

へてゐるからであり、曙覽の喜ばれるのも、眞實、曙覽の全貌が認められて居るからなのでもない、といふ氣がするのである。

さればと言つて又、江戸の短歌作者として、誰がもてはやされて居たかといふ事に傾いて考へることは、過ちのもとである。が、江戸式の鑑賞法において、謂はゞ短歌の本質的なものと認められるものは、もつと正しく見られてよいと思ふ。其上に、其作物についての査定が意義を發揮して來るのでないかと思ふ。つまり江戸文學の準據が多くの誤りを含んでゐたと同じく、——文學論の進んだ——今でもやはり、常に若干の過誤のあることは事實なのだ。今日の過ちが過去の正しさを無視することもあり、又過去における作品を、おぼざつばな批評態度でかたづけしてしまふ嫌ひがあるからである。

短歌のやうなある豫備知識を前提としたものには、殊にその豫備知識にくまされない限りにおいて其を知つてかゝらねば、第一著手における用意がないといふことになるのだ。新派短歌起つて以後、今に到るまで、江戸以前の作物に對する批評が、さうした用意を缺いた、單なる正義觀に似たものから出てゐるのが、多いのである。改革時代においては、と見かう見してゐる事は、なる程許されないであらう。だがもう、短歌史の上から現在の短歌を照し見るといふ形が出て來てよいと思ふ。私のこの書物は、其準備作業にしか過ぎないのである。

誰ともまだ咄し合つたことはないのだが、私一人の昔が思はれる。恐らく日本文學の中でも、短歌に多少手を染めた若者が、國文學を専門にする氣を起した頃、まづ思ひ立つのは、短歌史或は稍廣くて、歌謡史であらう。私も中學校を出る頃から、そんな志を懷いて、數年持ち續けて居たやうである。其が國文學者の爲事として、如何にも啓蒙式な興味だといふ事は、其後長く忘れてしまつて居たことでも知れる。そんな二十年三十年の歲月の流れた末に、「近代短歌」の歴史を書くやうに慥められた。其時は何とも考へなかつた。此草稿の凡終りに近づいた今、ふつと心を横ぎつた記憶が、私の心を幼く潤してくれた。誰しもする考へ事だ。さうして、誰も亦記憶の下積み忘れて行く計畫だ。私の友たちの誰彼も曾ては短歌史を書くと言つて居た。其がやはり、皆忘れてしまつて居る。

私には、幸福な機會が廻つて來て、幼かつた初一念を達することが出來たのである。爲事その物の價值よりも、昔心を燃した物思ひを、今にして、思はずに遂げて居るといふ喜びである。さうして其喜びも、寂しいもの足らなさを多く交へてゐる。其だけに一人、みそかごとでもするやうなほくそ笑みに、心がほころびさうになる。

一 短歌史の意義

歴史の上に施されてゐる時代區畫は、その代々の人々の細やかな心理までも、觀察して立てられたものではない。此は、歴史上の大事件で、恰も時代全體が鮮やかに舞臺替りでもするやうに見れば見られるところから出る間違ひなのである。だから其に伴つて、文化現象も、一時に豹變するものと謂つた考へ方の上に立つ速斷が、とつても深く沁みついてゐる。だが事實は、一通りの整頓が人々の心の上に来て、次の時代らしい特色を表すやうになることは、なか／＼容易なことではなかつたのだ。

文學史が、思想史の一分科のやうに見られ、又同じく補助學科のやうにも考へられて來たのは尤のやうに見えた。而も其が、一番低い程度の成迹すらもあげて居ないやうに見えるのは、どうしたことであらう。時代史から演繹せられた單純無反省な文學思想史が力を持つて居た。其爲此時代の世相と人心との關係がかうだから、文學も勢、かうならざるを得ないかと言ふ風な見方が、煩ひとなつて來たのだ。

戰國亂離の時勢だから、人は皆、安住の心を持ち續けることが出來ない。さてこそ、此時代の文學は、かくの如く悲しみ愁ひ、かくの如く斷簡零墨と言ふべきものゝみ多いのだと言ふ。なるほど、さう謂はれて見れば、誰にもさう考へられる。併し其では、文學史が、時代史或は政治史から説明せられてゐるのであつて、文學史から、何の新しいものも寄與してゐた訣ではないのである。況して、戰國の世にも、のどかな文學を愉しむ文人がゐて、朗らかに歌ひ、長篇の作物までも残してゐるばかりか、もつとのほゝんな有様で泰平の文學を製作して居た者も、澤山にあつた位である。かうした方面を考へてこそ、他の史的基礎に立つ學問々々の助勢にもならうと言ふ訣である。

「江戸時代の文學」・「江戸時代の短歌」と言ふやうな名目は、時代史の區畫を假りに利用したものである。文學の上での「江戸時代」に當る時期は、時代史の江戸時代とは、大分つぼが合はない。つまり、普通に江戸と稱してゐる時代の持つた文學らしいものゝ出て來、其が成熟し、又爛熟廢頽し、其上次の時代の萌しを持ち出して來た、さう謂つた全體に通じるものでなくては、文學上の「江戸時代」と言ふ訣にはいかぬのである。

だから、江戸文學は、關東將軍が江戸入城の時を記念して初まるものでもなければ、關ヶ原合戰を交叉點として、ふり替るものでもない。又、既に幕末各種の文學に、新時代の姿を示し出してゐることも、鋭敏に見なくてはならないし、同時に、皇居が京都から、新しく修築せられた江戸城にお遷りになつた頃から、明治文學になり替るとも謂はれない。明治十年から二十年までの間

に、古いものは段々迹を潜めて行つた。此期間にも江戸文學は認められるのである。尠くとも、文學史としての江戸文學は、さういふ風に見るのでなくてはならない。私のうけ持ちは、短歌の歴史である。短歌ばかりが、ほかの文學史の姿から自由であつたとは謂はれない。其で、此だけの前置きはする必要があると考へたのである。

此序に述べておくことは、かうした短文學の性質上、作者の生活が極端に作物に響いてゐる。而も大昔から、ある歌はある人の所産と考へることによつて意味を持つて來た歴史の上から、どうしても、作者についてよく考へる必要がある。其と共に、さうした久しい見方の爲に、文學としての價値の考へ方は、固定し易かつた。又作者と作物との關係も、密接に考へられ過ぎて、人格論が作物の上に乗まで及んでしまつた例が多過ぎた。又過去に定まつた價値は、何時までも傳襲せられて、容易に變化しなかつた。其で正しい場合の外、存外な誤つた評價が、驚くばかりに多かつた。だからどうしても、個人々々について審らかに見直す必要があると思ふ。其で私は久しぶりに列傳體を交へた文學史を作つて見る氣になつた。だが其ばかりでは、到底多くの作者——其も其中から私の擇り出した作者だけを書いて行くのも容易でなかつた。さうして此本の分量は、はやく超過してしまつた。其で重要な人の敘述も割愛した。外々の論議文に譲つてもよいやうな變り目の少い記述は、ひつこめることにした。又其を豫め思つて書かなかつた人も多い。だからほんの十數人の記述にしか過ぎないことになつた。此意味で、江戸初期にもつと述べねばならぬ

人たちも、眞淵・景樹門流の人々なども、大抵は載せなかつた。明治の新派運動でも、池袋氏前後の人々、其から直文・信綱以下の人々についても、批評や敘述はしないでしまつた。とりわけ、私の師匠服部躬治先生の、世間から疎かにせられてゐる價値の修正の、私としては最意義のある爲事すら、こゝには、あきらめてしまつたほどである。其から思へば、一層色々な學問上の未練も思ひきり易かつたのである。

其から此本は、去年の夏と今年の夏と二夏の間、参考書のない山の中で書いたものである。引いた作物や、歴史上の事がらに存外な思ひ違ひがないとも限らない。大抵は校正以前に手入れたつもりで居る。だが、尙誤りのない事は保し難い。今後もそろ／＼、其手入れはして行くであらう。

此を讀み返して行くについても、書きあげの當時、山へ持つて行つた僅かの書物の中、殊に「明治短歌年表」の著者小泉冬三さんに改めて、挨拶を申しておきたい。其は忘れてゐた、いろ／＼な古い事を、思ひ起し思ひ出させてくれたからである。

まづかうした姿で行くと言ふ、計畫の進行中の形を見て貰へればよい。

二 前江戸時代

一 文學の交替時代

江戸時代としての土臺が、既に短歌の上に現れて來た時期を、假りにかう言ふ名で畫して考へたいと思ふ。

勅撰和歌集は、第二十一代新續古今集に綴めを作つて、再出る時もなくつた。而も其前に準勅撰集の傳説を持つた撰集が二つある。一つは、新葉和歌集であり、今一つは連歌集としての菟玖波集である。前後に四五十年は隔つて居るが、本格なものを欲するよりも、まづ幾分氣易い準位に在るものを立てようとするのが、室町時代の公武の間に行き渡つた氣風と見ることも出来る。だから、此外にも準勅撰格の集がなかつたとは言はれない。

が、此事實から窺ふことの出来ることは、歌そのものを、本格式に守つて行く自信ある歌人が、堂上の傳統には殆、なくなつたと言ふことである。さうして、同じ公家でも、歌の傳統に關係のない人たちの間に、相當な作家が出て來て、正統を誇る人たちの爲に擁護の務めをし、或は却て、嫉視せられるやうになつて來たことだ。

第二には、連歌が成長して、世間の興味は寧、其方に向つて居た。歌人と言ふばかりか、歌の正統の人々すら、連歌を本藝風に詠出する風が、前代以來愈激しくなつた。今までは、短歌の準備としての連歌であつたものが、今は連歌を價值づける爲の折り紙として、短歌が考へられて來たのであつた。だから右の歌道の師範家は、連歌及び短歌の上の「本阿彌」としての位置を新しく持つやうになつて來た訣である。だから、作物などは出来なくとも問題ではない。かう言ふ時代に、勅撰集の出る理由がない。

又、此には、宮廷の式微の結果と見るのが通説だらうが、勅撰集事業についての經濟力は、今日の我々の算段から出て來ないが、思ふに唯今のやうに、調査局式のものゝ新しく設けられる訣でもあるまいから、わりに問題にならないだらうと思ふ。唯、之に採否の執心を寄せる筈の公家が、深い關心を失うたと言ふ點の方が、主な原因であらう。即、擁護者なく、撰者なく、作者のない時代である。極端にいへばさうなる。一つは公家を通じて、個々人の研究創作時代が、既に初まらうとする時だつた。無力な本阿彌を煩すには及ばないやうになつたものであらう。

第四には、師範家傳統の所屬が、前代よりも自由になり、必しも宮廷・公家の一つ流れを守らなくとも、さし支へがなくなつて來てゐる。二條・冷泉兩統が、此勢ひに乗つて、互に翼を伸べようとした。が、單に家格を重んじる時勢に迎へられて、二條家は榮え、公家にも新しく範圍を擴め、武家その他にも、開拓する所が加つた。さうした結果、却て二條家は衰へて、あまりきはだ

つた働きをしなかつた冷泉が、生き残ると言ふやうな事になつた。

第五、箏・琵琶・笛など、藝能の傳統が、公家では早く上流にあつたが、次第に繼承を相傳式にすることなく、幾人にも、堪能なものに傳へて、流派を作つて行つた。其に對しては、歌道の師範家なるものは、王朝末から鎌倉へかけて見ても知れるやうに、大貴族の家でなく、中流・下流の公家たちであつた。平安においてすら、「御子左」の末流、「六條」の末流に過ぎなかつた。此は藝の傳承と知識の傳承とに、自ら岐れる理由だが、傳書を以てしても出来る歌道の傳承が、小貴族の家の狭い血族に限られるやうになつた訣はわかる。其が遅蒔きながら、藝能の傳統と同じ形式を採るやうになつた。まづ二條家が、血族相承の固執を棄てるやうになつて行つた。次第に、公家・僧侶・隱者・武家にも及した。さうして、其讓る知識にも段階が生じて、全部を與へきつてしまはぬやうな形が、出来あがつた訣である。此が傳授である。

第六、かう言ふ點では、新興の連歌の方が、ずつと自由であつた。さうして其傳統も、古い藝能と同じに、大貴族から、優れた者に自由に傳へる、と言ふ風を採つて來てゐる。短歌傳統の間に生じた連歌が、いつか大貴族のものとなつて居たのは、官の受領と同じ精神で、宮廷のものは宮廷へ、と言ふ姿に近づいた訣でもある。だが、隱者である——僧侶・武家或は庶民出の——連歌師は更に歌道師範家を見習つて、傳授の形式を採るやうになつた。

第七、連歌師が、擁護者から自由になり、新しい多くの位置低い執心の徒にも、師範に替つて傳授するやうになつて、ちやうど、公家と庶民との中間の存在見たいな形になつて行つた。

何も、右の七條に限つた訣でないが、大體右のやうな形が見える。此が短歌史における所謂室町時代と、江戸時代との過渡期の形である。此様式こそ、下室町時代とも亦、前江戸時代とも言ふことが出来るのである。

二 歌道と連歌と

連歌が二條良基や三條西實隆などを上に、下には連歌師が多く頭を連ねて出て來てゐるのに、短歌の方は、全然さうした後世の宗家に似た檀那階級を持たなかつたのは、短歌自身が新興藝能でなく、又藝術が貴族階級の物好みによつて、保護せられ、傳承せられるやうな時代には、既に完成し過ぎる程成熟しきつて居たのだ。正しく短歌は宮廷直屬で、師範家は代官と謂つた形をとつてゐたのである。さればこそ、勅撰集も續いて欽定せられ、花山院・後鳥羽院の如く、尊貴御躬ら、撰集に當らせられるやうな御方もあつた。又、其が原則であつたとも見られる處がある。所謂師範家は、大貴族の下における藝能傳承の徒とおなじで、執達者・傳奏人と謂つた意味だつたのである。

單なる藝能でなく、既に宮廷との關係密接であり、神聖な技術でありした所の短歌である。宮廷

を離れなかつた結果、却て低い代官級の師範家が、之を自由にする形になつたのである。

私の擔任の時代の一番古い時期に當る室町時代で見ても、此事は明らかである。

風雅集の成立から推して見ても、同じ流れの玉葉集などは、謂はゞ藤原爲兼を代官としての、御自撰の勅撰集と申すことも出来さうである。

玉葉集が今日よほど見直されて來たのは、同慶である。何分、國の文學を見るものが、名篇佳作を埋れさせておいてはならないことであるし、其上極めてよい作品集を、反對に頗わるい雑集と一つに見て居たのでは、昔人の爲にとつて、又一人の國人として、此ほど恥しい怠りはない訣なのである。長い謂はれない屈辱を蒙つて居た、此集及び風雅集が正しい價値に立ち直つて來たのを見ると、私も此集の作者たちの天分を、前々から久しい間、讀へて來たものにとつては、肩身の廣くなるのを覺えずには居られない。

新古今集は、優れた撰集ではあつた。だが其後代に與へた印象は、わるい側を誇張したと思はれる所がある。——單にわるいと言ふよりは、華にして實のないものを、華なるが故によいと見させた點に多いと思ふ。さうして、却て正しく優れたものを、早く忘却させてしまつたのである。さすがに、新古今に近い百年ほどの間は、此よい方面が著しく文壇から認められて居た。

新古今以前から現れて居た純敘景に近い歌は、繚亂たる妖艶の歌風の中に、消えずの燈として明らかな光を發してゐた。新古今時代の最後の成功者たる藤原定家の歌にも、末になるほど、此境

地はしつかりと擱まれて來てゐるやうである。凡庸人と謂はれてゐる爲家の歌も、敘景となると、見かはずやうな秀作があり、又極めて的確な客觀描寫の届いたものが、相當にあつた。爲家に此作風のまじつて居るのは、勿論前代の引き継ぎには違ひなからうが、多くは連歌から生れてゐるものと見られよう。連歌における敘景は、歌合せにおける詩歌合せの延長で、從來なかつた印象鮮かな客觀描寫の句を出してゐる。其と共に、連歌の持ち來した拍子は、實に所謂、「こまたのきれあがつた」とも譬へて言ふべきものがある。時としては、當然持つべき素材に對して煩ひをなすと思はれるまで、緊張した句法に出來あがつて來てゐる。つまり此形式超過が、何時かは禍を來すことを豫約し乍ら、姑らく歌を進めて行く力の一つになつてゐたのである。

よられつる野も狭の草の かげろひて、涼しく曇る 夕立の空 西行
樽咲くそとも木かげ、露おちて、五月雨霽る、風わたるなり 忠良

名作であり、敘景歌として完全に近いものであるが、拍子から來る不安、此ほど緊迫した音律が、却て内容を空疎にしはすまいかと言ふ案じが、つき纏うて來るのは事實である。此は内容に伴うた自然の拍子でなく、其と剝離に際だつて來た調子なのである。

一面から見れば、工夫して構へた風景を、過剰した調子で生命あらせよう、とする結果にもなる。最知られてゐる例、

逢坂や 梢の花を吹くからに、嵐ぞかすむ。關の杉むら

宮内卿

花さそふ比良の山風 吹きにけり。漕ぎ行く船のあと 見ゆるまで 同じ人
景を意のまゝにしてゐる。名高くなつた程、作爲のあとが十分に現れてゐるのである。かうした
工夫は、連歌の上で習熟せられた技術の結果であると言ふことが出来る。つまり時代全體として、
程度以上に連歌の影響を受けてゐたことになるのだ。

かうして出来た「作られたやうな内容」と「張り過ぎた調子」とが、連歌の影響として歌の上に
残ると共に、連歌自身はあべこべに、歌其物に此から現れ初める低回調を、受け容れはじめるの
である。爲家などの歌の多くは、緊迫感を捨て、たゞごと式に發想する溫柔なものが、新しい
作風となつて來た。即二條流の主調である。

あだに など 咲きはじめけむ。いにしへの春さへつらき 山櫻かな

拍子としては、一所これと言ふ中心のない、蕩けたものである。でも此はまだ亡びない内容があ
る。而も内容が空疎になつても尙、此調子を追求してゐるのだから、助からぬものになつて行く。
かうした姿が連歌の、歌からとり入れたものとして後世に到るまで棄てられなかつた。さうして
連歌そのものを張りのなくて印象不鮮明な、直觀式には、意味の感受出来ないものにしあげたの
である。

爲家の持つたものゝ中、此弾力のないものを弾力と感じて多く受けたのが、二條爲氏である。弟
爲教も、爲相も、傾向から言へば、以前の敍景風な要素を立て前として傳へたやうである。作風

においては著しくもないが、庭訓としてさうした方面へ導いたのが、二弟の繼母・實母である阿
佛尼らしく、形の上で見えるといふべきだらう。が、時勢がかうした二傾向を著しくふり分けて
居たことも、事實に違ひない。冷泉爲相の作は、大體においては、著しく敍景風で、京極家の歌
風と、殆區別のつかぬものが多い位だ。尤、此人は曾て爲兼が阿佛尼の教導を受けたやうに、十
歳年長の姪爲兼の助力を受けた時代があつたと思はれるから、其も然るべきことと思へる。

第十三代集は、新後撰和歌集であつた。此後、七十年の間に、残りの八代集とも言ふべき新續古
今集を除外した七つの撰集が出て居る。古今以來新古今に至る八代集が、三百年の年數の間に、
ぼつ／＼に出てるのはよほど事情が違ふやうである。謂はゞ、師範家どうしの間の競争意識が
中心に、自然かうした結果を浮び上らせたことになると思はれよう。

畏多いことであるが、師範家の上に宮廷がおはして、之に督勵と保護とを與へられたことが、師
範家の消長と相呼應して、かう言ふ形になつて出たのが、原因の最大なものである。

大覺寺・持明院、二つの御流れに、二條と京極兩家が所屬し申して、歌道の執達を行ふ形をとつ
て居た。其が爲兼再度の失脚後、其に作風の近い冷泉を採用遊ばすのが、當然の事と思はれる。
處が、突發風に來る歴史事情は、大覺寺の御流れに親しみ深い二條家を、持明院の御流れの歌の
方に近づけて來るやうになつた。此には、其を擁護する大貴族の推擧もあつたであらう。即、勅
撰集は、この家で撰進すると謂つた歴史觀が、もう出来あがつて來たのである。一方、吉野の宮

廷におかせられては、花山院系統の歌人が勢力を得て、二條家に對して、南山の歌道を絶さなかつた。従つて、歌風から言へば、二條別流の觀がある訣で、新しく師範やうのものが生れた訣である。宗良親王の下で文學の事に携つたのは、師賢の孫藤原長親——耕雲——であつた。新葉和歌集はじめ親王の御業蹟には、此人のお手助け申した事の深さが察せられる。而も廷臣としての位置は、普通の師範家よりも、遙かに高く上つてゐる。その上、二條家に對する反感が、其歌論に露骨に出てゐるが、歌風は二條流をさまざま出てはゐないのである。唯、耕雲の祖父師賢を中心として考へると、吉野朝の仕人の歌風は、敘事式抒情詩と謂つた方面においてのみ、苛烈な境遇におかれたことの自覺が著しく出て來てゐる。併しさうした題材に即したものの以外は、驚くばかり其境涯に無關心な二條家流である。

京都では、二條家の立ち場が、頗浮き足立つて來たことは争はれなかつた。鎌倉の初めにもさうであつたやうに、飛鳥井家が緩衝地帯に立てられて、段々冷泉家の勢力を得て行く氣運が向いて來た。

新後拾遺集が出て、五十六年後、新續古今集が撰進せられたのは、色々な事情を考へさせずには居ない。後に續いて出なかつたのは、世の疲弊と言ふ事ばかりからも説けるが、前の空虛はさう言ふ理由では説明しきれない。師範家たる二條家にその人がなくなつたからでもあり、又師範家同士の競争を要しない時代となつたからでもあらうが、主として、世間の關心が短歌から去つて

來たことを示してゐるのである。即、既に連歌時代が來てゐたのである。

連歌は短歌とは、人間條件を異にしてゐた。教へるものは、師範家でなかつた。單なる連歌師であつた。連歌師を擁護し統率する力も、宮廷からではなく、代つて、大貴族自らしたのである。習ふに極めて氣易い文學で、教へる者自ら、頭を低れて家々の門を訪れた。唯、歌が何處までも、連歌の元であることを主張したのが師範家であり、又同時に連歌を作つて人に授けた。併し、師範家以外に、大貴族・連歌師の關係が明らかに立つて居て見れば、殘る所は唯一つ。連歌の法則は、短歌を基準として、わり出すことの外はなかつた。王朝の歌物語の祕傳の考へ出されたのも、和歌の爲ではなかつた。之を遂げないで、連歌を學ぶ者の基礎學として、連歌だけの範圍では、どうにも動きのとれぬものとしたのであつた。古今傳授・伊勢物語・源氏物語祕傳といふのも、皆其である。此關門を抜けてこそ、初めて連歌の基礎學を學習したことになるのだと信じもし、信じさせもした。

本歌と連歌と兩方を習ふ者が次第に減つて、連歌の方に進む者が多く、稀に連歌師及び連歌を通じて、大貴族に近づきを得た武士たちが、之を行つた。だから初めは、歌主連客であつたのに、何時か連主歌客といふ形になつて、連歌に熟達したと見られるやうになつたものが、本歌にも手を染める、といふ風になつて行つた。

此が文安・寶徳から、天文に到る凡一世紀の間に出來あがつた風習である。事實にはめれば、新

續古今集が出、宵柏・宗長等の生れた頃から、宗長の死、幽齋の誕生があつた期間に、歌・連歌の關係に對する世間の考へ方が、一變して來た訣なのである。

鎌倉開府以來、文學地に墮ちたやうに言はれてゐるが、事實において正しく萌ゆべき處に、芽生えを出してゐたのである。禪僧の將來した學問文學は、容易に影響を顯さなかつた新興階級にも、次第に波及して行つた。武家の子弟が、寺家の預り子として育てられることの多くなると共に、觸れることのなかつた情操に觸れたのである。其が此百年を経る間に、京・東又は他の地方の寺の文化の及ぶ限り、武家に大なり小なりの文化印象を與へて來た。文學圈・讀者層を徐ろに作り上げて行つたのである。さうして、京都風の教養を積む爲に、地方の武士は次第に、隱者の徒を迎へて、文學及び儀禮を學んだ。

隱者と一口にいふが、純然たる隱者以外に、公家及びその一流の閑散な地位にある者を含む。此等の知識たちの、先、與へた都ぶりの文化生活の規範は、短歌であつた。さうして後、徐ろに安易な道が開けて行つた。連歌である。之を授けることが、もつと順道なものとして。

二條家が勢力を失ひ、又自らにして歌道の選手を内から出さなくなつたのは、連歌に壓倒せられたからである。彼一家及び他の歌道の家々も、歌を師範し乍ら、連歌にも手を染めた。ところが連歌としては、別に次第に、連歌の宗家とも言ふべき家が大貴族の間に生じ、其から連歌師の方へ直接に續いてゐるといふぐあひであつた。師範家が連歌に精進する事は、自ら衰へを促す方面

へ向つてゐることになるのだ。既に歌においてすら、吉野宮廷に見られるやうに、大貴族が宗家のやうな形を以て、現れかけてゐたのである。

冷泉家は、師範家としての力は二條家の敵ではなかつた。阿佛尼を中にしての骨肉の争ひから、如何にも對立してゐるやうな外貌を示して居る。又更に京極家と合同して、二條家に挑戦してゐるやうな形にも見えた。だが結局わりあひに無事に、二條家全盛時代を遣り過し、又勅撰集時代を遣り過した形である。

新續古今集は、形の上でこそ、勅撰二十一代集の最後になつて居るが、事實は此から又、新しく起りはじめようと言ふ決意が見え、又同時に過ぎたる時代の思ひ出に、遙かに打ちどめをうつた形に見ることも出来る。聊か趣きを異にした、かう言ふ點に注意せねばならぬ。だが生憎新後拾遺集が出てから、こゝに到る五十年の間に、歌壇・文壇の様子は大きな變化をしようたのである。

時の波に乗つて居る間は、世の人すべて風を逐うて其門に歸するが、時去れば、人は又自ら、就くべき所に寄つて行く。此間に、勢力を示して來たのは、冷泉爲尹であつた。彼は當時において、師範家として實力は、却て持つて居た。さうして、傍流として見られてゐた面目を、漸く更めて行つた。東福寺の正徹書記も彼の門流であり、自身また晩年の今川了俊にも教へを受けてゐる。其門人に又心敬があり、冷泉系統には、學者・實作家が輩出するやうになつた。さうして遙かに

後の、江戸初期の藤原惺窩が、此家から出ると言ふ姿が適當に見えた。

冷泉家の勃興には、殊に地方武士の勢援が力あつたものと思はれる。其中、冷泉とも藤谷とも爲相以後稱へて居り、爲満の子爲賢に到つて、藤谷家の實が出来てゐるのを見ても、關東を背景とした事が知れる。さうして、遂に此家を上冷泉・下冷泉と二流を分派させるまでもなつて行つた。而も従來、門閥以外に勢力を張ることの出来なかつた歌道にも、連歌における新しい構造が、とり入れられるやうになつて来る。連歌においては既に、連歌師に就いた地方人が、師の認可と共に、其門流を開いて行く風が、初まつてゐた。恰も、時衆・門徒の輩が、宗門を地方に擴めたのと同じやうに。連歌の興行は、念佛宗の弘法と、殆擇ぶ所はなかつたのである。連歌にはじまつた生活相が、却て短歌道にも反響して來たことは、連歌師が歌よみであり、歌よみが同時に連歌を作つた爲である。若し見方を自由にして考へた場合には、兩者の間に、根本かつきりとした形式上の區別がなかつたからである。

了俊・正徹・心敬、皆連歌を作つたが、とりわけ、心敬は連歌を本意として居た。だから心敬の門流は、存外に廣つて居た。つまり、從來の師範家をうちつづす力は、幾様にも生じて居て、更に新しい師家を立てようとしてゐたのである。

三 武家の歌人

—

頓阿が二條家の代官として、歌道に勢力を得たのは、單に文才ばかりからではなかつた。二階堂氏の流れで、隱者として權門に出入したと言ふ事情が非常に、其才を伸べ、其事業を擴げさせることになつた訣である。同時に、彼の二階堂氏における血脈關係の、實は甚、怪しいものであることも、ある暗示を感じさせて来る。頓阿歿後、其に當る者として物色せられ、拾ひ上げられた者と謂つた形が、東常縁に見られる。宮廷權門に出入した事は頓阿とほぼ同様で、又彼の暗示したものを明らかにして、系圖を言ひ立てゝ居た。此も亦半世紀を隔てゝ、さうした傾向の著しくなつた事を示してゐると言へば、其までかも知れない。素還法師は千葉常胤第六子胤頼の筋で、代々歌人の出た家である。學も、二條・冷泉兩派に通じて、而も二條派の正統を繼ぐものと見られて居た。二條爲重以來は、傳統は、代官とも言ふべき東氏に降つて來たのである。若し、新續古今集以後に撰集の御企てがあつたとしたら、飛鳥井或は冷泉の後を助けて、曾て頓阿が新拾遺集になしたやうに、撰集の儀に與つたかも知れないほどの名望を持つて居た。而も、彼が文學史の上に事業の足跡を印するやうになつた理由は、王朝史の俊成がさうであつたよりも、更に三四

年長命して九十四歳まで生き延びたことであつた。たとひ實作力は、彼に劣るとしても、——作物が直に影響しない此啓蒙時代の事だから——此長壽は、彼を完全に、二條・冷泉學の傳統者として、大きな存在たらしめた。が、歌道の傳統が單一を守ると言ふ考へから離れて來たのは、彼に大きな原因がある。

古今傳授の歴史において、彼が著しく見えるのは、此兩派綜合と、今一つ、從來露には見えなかつた庶民傳授を行つた點にある。彼は、貴族及び地下の民に對して其を授けた。つまり、學問及び文學の普遍と謂はゞ言へる所に、功勞らしいものを認めてよいのだ。

文明十二年、應仁の亂後の疲弊甚しい京都において、東山で古今傳授を行つてゐる。尤、宗祇に之を傳へたのは、其に數年先だつて居るであらう。

彼が應仁の大亂に遭つたのは、七十歳に垂んとして居る時であつた。此際、凡公家は諸侯の國に流離したのである。藝能を持つ家は、その藝能を携へて行つた。鎌倉幕府の規模が、此時代においてすら、尙理想と立てられてゐた。京の有職を迎へることが、小さな鎌倉實現を夢想する大名たちの風になつてゐたのである。推測すれば、東常縁が二條の傳統を完全に自分の物としたのも、かうした時の退轉から、長い歴史を忘れる方に傾いてゐた二條家の末流をして、すべてを放擲させてしまつた時勢が、さうさせたのであらう。

若し常縁の後に、之に替る筈の者を求めれば、太田道灌を擧げねばならなかつたであらう。だが

彼は常縁よりも遙かに若く、又その歿年も亦彼に先んじて居た。其も、今日からの考へであるかも知れぬ。なぜなら、關東管領配下の大名として、父子二代の文雅の才を都人たちが珍重がつただけで、本格として認めて居たものとも思はれない。學問文學においても、都に居ないものは、本流となり得ない世であつたのである。

短歌は、此時代において、まことに危いせつばに臨んで居たのであつた。歌の傳統者は諸國に流寓し、見とほしもつかかなかつた時に、常縁が飯尾宗祇に之を傳へたのは、行きつまつたからの決斷であり、又焦燥に驅られた亂離時代の人心を肯はしめる。此後百年、慶長の田邊籠城の砌、細川幽齋が、古今傳授を失ふ事を虞れて、開城したのも、尤と思はれる。時代は一世紀を経て、世態を通覽する眼は進んで居ても、尙其様であつた。まして文明年間、應仁大亂直後の世間である。其は、あるべきことと思はれる。傳授のみが大切なのではない。傳授を失ふことが、古今集及び伊勢・源氏等の、貴重な文獻の意義を晦冥に歸せしめる事と、信じて疑はなかつたのである。と言ふよりも、もつと具體的に寶物を亡してしまふといふ、深い憂ひを感じたに違ひない。庶民の間にも、此傳統が残りさへすればよいと言ふ氣になるのは尤である。さうして最適切な受けとして、隱者といふ形があつた。

さうして此常縁の方針は、誤たずよい結果を、遙かな未來に持つことが出來た。公家と町人と兩方面に分けて傳へた、和歌及び和歌を説くべき方法と信じられた學問が、遠く江戸期に入つて、

正しい成迹をあげ得たのである。

和歌は、學問と考へられて居た。其を作る事は、漢文・漢詩を作る事を遊戯・藝術と考へずに學問の一つに考へた如く、一つの學問であつた。さうして我々が今日考へる和歌の上にある所の學問は、當時の人にとつては、學問を遂げる爲の鍵であり、理論であつた。此理論を知らねば、和歌なる學は知ることが出来ない。之を失ふことによつて、和歌は從來積み立てた、代々の解釋法と、作法と、兩つ乍ら亡くしてしまふことになる、と考へたのである。我々にとつては、——と言ふよりも、倭學・國學の分岐する江戸期においてすら——別な解釋法を發見することによつて、さうした單純・迂闊な理論の有無などは問題とすらせぬことになつてしまつたのである。が、古人にとつては、其理論は更に、信仰をさへ添へて居た。さうしたものを失ふことは、之を持つものにとつては、大變な事だつたに相違ない。

今日の我々にとつては、連歌と和歌とは、其態度方法において、全く別な文藝に過ぎないが、古人にとつては、基礎における様式の同一性が、どこまでも、此二つを離して考へさせなかつた。連歌の母胎は短歌だつたので、其から分化した藝術が連歌だと考へてゐた。此考へ方までが、正しいものではなかつた。だから、歌よみ及び苟も歌道の師範家ともあるものが、連歌にうき身をやつすことも不思議ではなく、又連歌師が歌を作り、尠くとも亦、歌を作るといふ立て前を持ち續けた理由も、知れるのである。だから、和歌の理論であり、主要知識であり、又主題である所

の傳授秘傳を、連歌師が誇りとする事も、當時としては理の當然である。

宗祇が、古今傳授を受けたのも其訣であつて、同時に連歌師の手で、ある期間、ある部分まで、短歌は守られて來たと言つても、さし支へはない筈である。

一子相傳であるべき筈の傳授が、血族を離れて、學統の直系を意味するものとして授けられるやうになり、一應町人の手に降りた古今傳授は、宗祇から三條西實隆に傳へられるやうになつて、再姑らく公家に戻つた。さうして、讓るべき人を待つやうな形で、三條西家に保留せられて、公條から、實枝といふ風に傳つて行つた。

二

此頃の師弟相承次第は、嚴重であるべき筈だが、傳統以外にも、臨時の指導を受ける事は、さし支へはなかつた。傳統として出来るだけ系圖正しい師範を擇ぶが、一時の師としては誰に道聞いても、師と助力者との區別は、自らにして立つてゐたのである。時としては、助力者の方が有力に働いて居り、師は傳統上だけ名義を授けるに止る、と言つた形を取つて居ることもあつた。地方土豪にして、廻國の連歌師・歌よみから手ほどきの教習を受けても、後には、京の師範家に弟子入りするのを、原則としたのである。

隱者は諸國を漫遊して、京都文化を撒き散すが、結局收まる所は、京都の師範家と言ふ形であつ

た。謂はゞ諸大社・大寺の御師ミツシとも言ふべき廻國文學者だつた。

其著しい例が、近世短歌史の東雲シノヅキ時の代表者とも言ふべき太田持資入道道灌にも見られるのである。道灌は、父資清以來、上方文化に憧れ、歌・連歌に好みを深めてゐた家に人となつた。だから、廻國の雅人の口によつて、京地にも、彼が文雅の才あること位は、傳へられて居たであらう。傳統としては、飛鳥井家の門流に屬して居た。京に使を入れて許しを請ひ、新續古今集の撰者雅世の子雅親から、統を傳へたことになつてゐる。藤澤の今川了俊、又心敬僧都などは父子二代にわたつて、彼の師だつた、と見てさし支へないだらう。

彼の作と傳へられるものには、ある種の主題に似た露骨な意圖を持つたものが多い。又其だけ啓蒙としての短歌の趣味は、人に感受せられ易いものを含んで居る。

一體武家の歌は、王朝末の武官の作物にすら、既に相當に、趣向と情趣とが絡みあつて、簡易な一つの主題らしいものを持つたのが多かつた。頼政がさうであり、西行のあるものがさうであり、秀能のが又さうであつた。武官の歌の鑑賞法と謂つたものが、凡備つて居たやうに思はれるのである。一氣呵成と謂つた風に出来て、而も其間に思想の折れ目において、外的にも強い曲折を作つてゐる、と謂つたものであつた。首尾交錯したやうな幽玄調とは違つて、的確に表現するだけに、印象鮮明なものが多かつた。思ふに、若干寺家の歌風と相通ずる所があるのではなからうか。この主題を寓する態度は、長く残つて、短歌の本質の一面であるかのやうにさへ、見えるやうに

なつたほどである。

殊に道灌は、此期の冷泉風の影響を受け、又連歌式表現を以て人の興趣を繋ぐことを知つてゐただけに、何處か、拍子にはでなをどりを持つて居る。

かゝる時 さこそ命の惜しからぬ。かねて なき身と思ひ知らずば

かうした、讀者を身に近く感じながら作ると謂つた抒情詩が、殊に武士の「述懐」には多かつた。かう言ふ境地は、次第に文學を離れて武士の中のみ止つて、武道歌と謂ふべきものになつて行つた。ちようど寺家の歌が早くから、讀歌から道心歌になり、又道歌になるやうに向いて居たのと、傾向は一つである。

彼は歌合せを喜び、連歌を愛したのは、當時の地方土豪としては、稀有の事ではなかつたであらうが、其もありふれた程度と、見ることも出来ない。此から時代が進むと、其も普通の事となつて来た。又その才能も、末流文壇において、十分に發揮の出来る理由のないことを、考へに入れてかゝれば、まづ相當な才能ある人物だつた、と見てよからう。だが、都會人士の田舎びとに對する見くびりから出發した過褒讚辭も、わりびきして見ねばならぬ。道灌が世に傳へられたのは、固よりさうした境遇からではあるが、同時に、實際洗煉すれば、相應な位置に達することが出来たらう。さういふことは考へられる。

四 歌風の流れ合ひ

二條家と冷泉家とは、元々歌風において若干の違いを見せてゐた。冷泉の敘景を主として、調子の張つてゐるのに對して、二條は抒情を主に、調子の立たず柔軟に連綿してゐる、と謂つた曲調をしたてゝ、ことを目標として居たやうである。

末期二條派の代表的なよみぶりは、最著しいものとして、才人頼阿の草庵集を見るが早い。歌人自身の生得のものに據る外はないやうな、何の計畫もなくして、自ら個性の流れ出て來るのを期待するやうな拍子で、内容はたゞごとであり、形式は平穩・流暢であることを狙つて居たに相違ない。つまりさうした處に、古今の歌の音律の特徴があると見たのである。だがかうした態度にある限りは、極めて稀な歌人の出現を期する外はない。生得の上に、氣分と境遇とが、頗關係して來る。たとへば、型は小さいが、江戸の良寛のやうな人を俟つて初めて達せられるものを、すべての人に望んでゐたのではないかと思ふ。だから、類型表現も苦にはならなかつた。唯當然、ある作者の性格・經歷・境遇などが、實作物の上に附加せられて、聯想上の價値が増して來たであらうと思はれる。だから、頼阿を知つて、其を作物の背景とし、註釋とすることによつて、價値は殖えて來るのである。草庵集を見て失望するのは、之に望をかけ過ぎ、而も鑑賞法を知らぬ後人にとつては、あたり前である。必しも過去の二條派の歌には限らない。歌の上には、いつもあ

ることである。

冷泉派は、出發點において、歌風を異にして居たことは固よりである。かうしたむつかしい獨立の爲には、京極爲兼といふ偉才が出て道を開いてくれたやうなものである。つまり出来るだけ、二條派と自ら區別しようと言ふ努力があつた。だが、あゝした専ら個性に據らなければならぬやうな客觀描寫と、緊張した拍子は、常に誰にも望まれるものではない。だから多少づゝの新味は、残し乍ら、次第に、やはり平凡な無感興な類型内容を、類型形式に表現して行くやうになるのは、當然である。唯時々、纒かな救ひとして清新なものを出してゐる位の程度で、多くはやはり、安易な二條派風なよみ口に近より流れて行く。而も、連歌から輸入した表現法は、頗内容と關係のない千篇一律の平明無味な拍子である。どうしても、歌の趣く所は知れて居たのである。だから二條派は、歴史事實として、痕を潜めてしまふ世になつても、歌風はそのまま傳つたと同じ事である。

譬へば、下冷泉派の政爲の碧玉集を見ても、もう既に爲相などの歌風よりは、二條派風に近いものになつて居る。と言ふよりは、草庵集の影響をとりこんで、新しい時代を迎へようとして居る痕が見える。だからまして、實隆の雪玉集などを見ると、明らかに二條風が見られる。廉あるべき所を、強ひてかどをかきとつたやうなもので、冷泉流のとりえである、凜として張つた部分がなくなつてしまつてゐる。

三 江戸時代

一 細川幽齋

鶯の來鳴く砌の 夕日かげ。むら／＼なびく 窓のくれ竹
風わたる洲崎の蓬 冬枯れて、夕霜白き彼方の川波

かう言ふのを見れば、大體において、冷泉調の盛んだつた頃の作風である。唯、二首とも第五句が實感を逸したそら／＼しさを持つて居る。つまり調子が、まどかに捲きこんだやうになる點である。此は連歌の習熟から來るもので、ある調子の緊張はある。内容においても、約束以上には出ないが、敘景法のかつきりしてゐるのは、やはり其影響である。

歌そのものとしては、かうした作風が幽齋の常の傾向だと考へることは出來ない。極めて稀にまじつて居るもので、さすがに純粹な二條派風と言ふものすら、存在する事がむつかしくなつた時代を、示してゐる例に過ぎない。

其時代においてこそ、唯一の傳統繼承者である。だが其は、文學の眞髓を受け繼いだと言ふことではなく、唯の系圖を正しく傳へたと言ふまでであつた。而も彼に古今傳授の形式によつて、歌

道を傳へた三條西實澄自身が、大作家でもなかつた。其上に、彼も亦才において、歌に優なるものを持つて居たと言ふのではなかつた。精神傳承であつて、謂はゞ、受けとる個人の才能によるよりも、外在する威力が、ある人に附與せられることによつて、何等かの變化を來すものと豫期した時代のひき續きである。だから譬へば、古今傳授によつて來憑する歌魂を、空漠と考へたまでだ。さうしてまた適當な人に譲り渡すまでの、暫定風な預り主としての意味も考へられるのである。

慶長六年、桂ノ宮智仁親王に幽齋古今傳授を申した時は、年六十八であつて、歿年に先立つこと九年。此年連歌の先輩紹巴は七十五、昌叱は六十三。後輩では貞徳三十九歳であつた。更に幽齋の生まれた年を準據に見ると、宗祇歿して三十三年であり、宗長死して追善千句のあつた後二年に當る。三條西實隆八十、宗鑑七十、守武六十二であつた。この七十年程の間に、連歌を嗜んだ人々が、再本歌の格式を學ぼうと欲するやうに、世の文運も凡前途に光明を認め出してゐた。さうして次第に、連歌師に保存せられて居た短歌及び短歌の學問も、一つの専門として獨立しようとし初めたのである。だから、幽齋を以て、連歌と短歌との分岐點にある人、其門人貞徳に到つて、明らかに連歌門が短歌から分立したと見ることが出来るのである。彼の武家としての行蹟は、寧ろ文人或は武將の御伽衆の優なる者としての聲名の裏に、隠れてゐる。信長・秀吉に事へ、又家康に眷かれたのも、之によるので、其ほか公武貴顯の間に多くの門弟を持ち、江戸の日本の

學問文藝の權輿のやうな形を備へたのも、一つは室町將軍家以來の高家格に準じて見られた所があつたからである。十五代義昭將軍以前から、幕府に仕へて居た。恐らく幼少で、既に同朋のやうな務めに出仕したのだらう。義晴將軍の落胤だと言ふ説の是非は訣らぬが、かう言ふ風聞の散るほど、彼には室町幕府の色彩が濃かつたのである。將軍家の格式を學ぼうとした信長以下の武將にも側近し、戰陣にも従ふやうになつたのである。かう考へて來ると、彼の戰國末から江戸へかけて、第一流の文學者として認められた理由は訣るし、同時に極めて雜然とした内容を持つた彼の文學である。

幽齋以外の傳統正しい歌人はまづ、冷泉爲滿を擧げねばならぬ。幽齋四十歳の天正元年には、まだ五つであつた。二條のたゞごと體よりは、多少印象風な作風を持つて居るが、其とても、大したことはない。上冷泉の傳統は、此人、家康の爲に古今集を講じたと言ふ歴史によつて、後々に引き續き、爲村(安永三歿六十三)その他を出してゐる。

爲滿と同年に歿して、五十九歳であつた藤原惺窩は、下冷泉家爲純の子であるが、近代の傾向として儒學の方に進んだ。而も、其子爲景は、爲將の後を承けて和歌の統を繼ぐやうになつた。此事も、當時における學問に對する考へ方を見る上に、大切な事である。

幽齋に統を傳へた三條西實澄の孫實條は、再彼の傳授を受けた。何と言つても、三條西系が最廣

く京都派の和歌に働きかけ、又此系統にあることを誇りとしたものと見えて、後々までも、民間の歌人は多く此門から出てゐる。此は一般の論であるが、個人として見ても、澄月・夢宅・伴蒿蹊は、此筋の出である。香川景樹も亦、此派の清水谷家に學んだ梅月堂一家に入つて、一家をなしたものであつた。此外にも、飛鳥井の傳統は、久しく續いて來た。唯優れた人を出すことなく、其古い名によつて、大名の間に、多くの弟子を持つたことが、目をひく位に過ぎない。

中院通勝から傳つた中院流、烏丸光廣から出た烏丸流も、皆系統上、幽齋の流れである。三條西から分流したものには、清水谷流・武者小路流などがある。

京或は地方の人士の、傳統の末に列ることゝ、歌を作ること、及び歌人として公認せられることを、一つと見なした時代である。だから、其々贅を執つて門下に參じたのである。其等の間には、思ひがけない學者たちも、多くまじつて居る。此等は、さうした事によつて、學問を得たと言ふより、學者としての領分を持つ爲に、さう謂ふ形式を履んだものと見るべきであらう。

二 地下の歌人

さう言ふ傳統を全く無視して出た、歌人學者のあるべくも見えぬ世間ではあつた。だが若干、尙別に微かな流れが、過去から續いて居て、別派の歌人が現れなかつたとは言へない。即、堂上の傳統以外にも、流派とは言ふべくもない歌の家と謂つたものが、諸國にあつて、短歌再興の時代

に、頭を擡げても來た。さうした時が時であるから、時流を逐うて、新しく歌道の家の點を乞ふやうな者も出た。つまり配下となつた訣である。神社及び寺家において、殊に其が見られる。

幽齋死後七年元和三年、渡會延佳が生れてゐる。彼の學及び歌は伊勢のもので、恐らく住吉・加茂その他の社々の社家に傳へられた法樂・神樂歌系統の作物の、さらに複雑な徑路を経たものと思はれる。荒木田氏などの傳へるものと、自ら區別ある點から見て、殊にさう思はれる。彼の歌には、特にとり立てゝ言ふほどの價値もないが、唯、拍子から見ると、神樂歌調とも言ふべき、唯のつて諷誦せられるやうな、如何にも即興歌らしい拘泥のないものが聞える。

吉川惟足の如きは、中年から這入つた宗派神道家で、當時の所謂「神道者」だから、歌は別に特殊な徑路を通つたものとは言へない。

時は遙かに隔るが、延佳歿した年、二十二の若者であつた春滿の「我等、中院殿・清水谷殿などにも弟子になり申さず候わけも、家傳を一つ興立申度所存候故、个様に歌すき候へども、公家の弟子に成不申候」とある書翰も、家傳は其父以前の傳統を言ふのやら、自ら新しい流を開かうと欲したのやら、も一つ明らかではない。が、公家風以外に、流派を立てる素地のあつたことを見せてゐる。即、神官家には、又一つ歌風のあつたことを示してゐるのだ。

おなじく長袖と謂はれても、僧侶は隱者と共通の所が多い。其故、此部類に入る人たちが少くなかつた。寺家は鎌倉以來、詩文の造詣が深くなつて來てゐるが、やはり短歌を棄てないものが多

かつた。と言ふよりも寧ろ、寺家の生活と歌との結合に、離されぬものがあつたのである。西行などの純文學式に進むのもあつたことは勿論で、五山の傑出した學僧の中にも、清巖（正徹）の如きは、其傾向に著しかつた室町期の歌人である。併しもつと生活に即したよみ捨てを恣にしたと言ふより或は、時としては讚歌、時としては骨折れぬ述懐として此形式を擇んだ、明惠亞流の歌よみに一休がある。此類の人々の作物には、まじめなものもあり、剽輕頓才を寓した誹諧歌に近いものが、出来るやうにもなつて行つた。

寛永十八年に死んだ藝壇の鬼才瀧本坊昭乗を中心として、石清水流の狂歌の發達した徑路も、やはり考へれば、突然ではない。延いては鯛屋貞柳が隱者として、此系統の古狂歌の態度を大成するに到る順序も、頷かれる。

此傾向で、稍文學味を持つてゐるのが澤庵で、兼ねて五山系統の短歌の末に位するもの、と言ふことが出來よう。さうして短歌を簡明な教誨の方便にした道歌意識も亦十分に見られるのである。嚮に述べた武邊流の述懐歌が、末には此と流れ合つた。つまり兩系統の隱者の中に立てゝである。此態度を後來の禪僧等が文學式に完成しようとして、幾度か失敗した。其ほど僧侶の生活氣分は、短歌と本質上そぐはない部分があつた。

此時代の僧侶は、政治家以外に、社會文化事業に自然關與せねばならぬやうな地位に立つて居た。澤庵其他のした事業を、宗教文學などの、個人的な爲事と比べて見るのも、一つの考へ方である。

昭乗よりは十七年、澤庵よりは二十三年、其歿年に先んじて生まれた後輩に、元政がある。短命で四十六歳で亡くなつて居るが、二十年遅れて生まれ、二十六年後に歿した五十一歳の芭蕉と境遇までが似て居た。謂はゞ其先型とも言ふべきであらう。二十六で、彦根藩を脱して深草に隠栖した。芭蕉ほど俗世間の人と伍しての暮しを續けなかつた爲、人生味においての變化展開は著しくない。

歌道師範の家々や、連歌師の間には、流動しない知識を傳承してゐる間に、學問も歌も、其等の自由な發動を見る前に、既にある點まで發足點は作つて居た。日本古典學は必しも歌道によつてばかり存して居た訣ではなく、神官家や寺家の間に、日本紀學が傳り、之に新しい悉曇の語學——科學的な——研究法が加勢した爲に、自ら多少の形は出来かけて居たのである。さうした人たちが、歌道・連歌道に傳る訓詁學に觸れるや、直に雜然たる傳承知識を排して、その學の先まで見透してしまつたと言ふ所がある。

文學においてもさうである。元政の如きは、まだ作物が、文學と知識との間に浮游してゐるが、其觸れようとしてゐる所は、個性の發露にある。貞門に出入した彼にしては、珍しいことだ。

かうした隱逸文學者が、存外俗世間と深い交渉があり、其文學を轉換させる力になつてゐることは、大凡に見ることが出来ない。

おなじ隱者にも、もつと豪華な生活を送つてゐる者が段々ある。さうした中の隨一人として、木下長嘯子が考へられてゐる。此人こそ元祿期の優隱者の理想で、而も前代以來の、闊達の氣風を保つてゐたものと言へよう。が、何も彼一人が、さうした生活と文學との前驅者ではなかつた。國々の諸侯にも、連歌及び短歌に修業を積んだものが尠くなかつた。近くは幽齋、又高い所では公家を師範と頼んだ外に、皆其々御伽衆の中に、相應な歌人・連歌師を養うて、之が加筆教授を受けてゐたことは察せられる。さうした御伽衆自ら前代以來の隱者であり、武道文學の徒であつた。だから當然諸侯の歌は、後々までも其等の人々の手の、加つたものが多いであらう。此點作者として見るより、文學擁護者として見た方が、適切かも知れぬ。

島津義久・伊達政宗の如き大名を初めとして、名を擧げる違のないほどである。

三 木下長嘯

古人の、歌を愛誦する態度は、今我々がするやうなものではなかつた。一首の傳ふべきものがあれば、其によつて、ほゞ作者として價値がきまつたのであつた。さうして其集の中、更に數首も優れたものがあれば、如何に凡俗な作品の數十百首で圍繞せられて居ても、其作者としての位置は動かなかつたのである。吟誦して傳へられるに堪へた歌が出来たと言ふ事が、歌人の値うちをきめたのである。其ほど凡庸な多くの作物を見るに馴れ、其だけ又、其中にまじる清新なもの—

——と言ふより類型の元となるものゝ存在を、非常に高く見る傾向があつたことを考へないでは、我が國における名歌と傳へられるものと、名歌の作者との關係が會得しにくいのである。

長嘯の歌の如きも、今日見れば、何を其ほどもてはやしたか合點の出來ないものも多い。而も世間耳食の人々だけでなく、古典文學に新しい學問と藝術との立ち場を見出した下河邊長流・僧契沖すら彼を尊敬し、——と言ふより、長嘯子の名の傳へられる原因の大きいな部分は、此二人の推奨によるとも謂ふべきであつた。——又彼を出發點とさへして居る所の見えることから考へると、自ら、昔の批評の標準に思ひ到らざるを得ない。

彼が五十六歳になつた寛永元年には、長流と北村季吟とが生れて居る。此半世紀の遲速は、戰國と泰平との差異である。作家・學者等の内界に非常な變化があつたことは、考へられる。而も生前に評判のあつた豪快な隱者なる、此先輩の歌の價値を、今一度糺すだけの年月のゆとりが、其間に流れたのであつた。長流の如きは、恐らくその名まで、長嘯を模したものと謂つてよく、長嘯は更に遠く、日野方丈の長明の名の字を襲いだものと見られる。此三人の間に、隱者文學傳統を示す、ある誇りの持たれて居たことが察せられる。

曾丹・俊頼・爲兼を立てゝ言ふのは、冷泉流のまだ健康な作風を持して居た時代の風である。長嘯も亦、其流れを學んで、善惡共に二條末流全盛時代として見れば、異風な作品として目についた。彼以外にも、さう言ふ作風の人はあつたのであるが、傳へられるに足る位置と、注意を惹く

だけの物は、でも残して居たからであらう。

里は荒れて、燕ならびし梁ツバキの古巢 さやかに照す月かげ

見わたせば、山もあらはに年くれぬ。しづが門松 今や伐るらむ

思ふどち ひと日も疎く過さめや。いつと定めぬ世のはかなさに

枝も葉もかぞふばかりに 月澄めば、かげたしかなる庭のときは木

音もせず 春日のどけし。時守りの鼓や 今日ほうち忘るらむ

まづ此等は、此時代として相當、類型を出てゐるものであらう。

鳩の鳴く外面ソトモの杉の夕霞。春のさびしき色は 見えけり

鶯の聲のひゞきに散る花の しづかに落つる 春の夕ぐれ

冬枯れのこずゑを 松に吹きまぜて、こまかにかはる風の音かな

靜かなる庭の木の間に かげ落ちて、夜深き花に月わたる 見ゆ

の如きは、新舊いづれの立ち場から見ても、よいものと許される筈のものである。

其新奇を銜うたやうに見られるものも、時代を離れて今日になつて見ると、清鮮な味ひが缺けて居る。古風で硬い感じのするものと、全く世俗風な大衆味の多いものとで、新舊の感じが違ふだけで、等しく同じ古さになつてしまつたのである。併し其間に、技工としてある緊張感を持たせるものが新しく思はれ、技工がひのない類型式なものが、古いとせられる訣である。彼の作物の

中にも、舊風なものが多い。さうした作群の中から、とり出された幾分の一かの技工式な作品や、又稀にある玉葉・風雅に近いものが、新しいと見られるのである。さうして其は、新しさ、優れた正しさを持つものと謂つてよい。

風そよぐ竹の下道 われ過ぎて、雪に宿かる足柄の山

はるくくと 鳥羽田の末をながむれば、穂なみに浮ぶ 淀の川舟

此等の歌の持つと感じられる新味は、公式にはまつた所があつて、自由がない。當時は新しく感じられたであらうが、ある類型を思はせるだけの古みが伴ふ。「淀の川舟」の方は、形式に囚はれた古めかしさを示してゐるが、事實は、風そよぐよりも生きてゐる。即ち、歌を通じて、歌以上のものが思はれるのである。彼の作物中數へきれないほど多く、此種の草庵集式な歌がなく、又必しも草根集風な物が多い訣ではない。さうして純自然描寫と見えるものがあつても、どこか確實性がない。つまり、才氣と野心とを露骨に見せたものが多い訣なのだ。

だが此は、此人だけの性格によるものではない。彼が自ら態度とし、其態度の代表者とした鴨長明及び其以後の隱者の持つたものが、皆其であつた。世の中に對して、常に優越感を持ち続け、知識と才氣と剛愎と、さうして半面に、世俗的でない生活面を持つて居ることを誇示する、文學者の一つの傳統である。

彼木下勝俊は、豊太閤の北政所の兄、家定の長子であり、小早川秀秋には兄。此兩家は共に亡び

たが、次弟利房・三弟延俊の後の木下氏は、今も存續して居る。利房の末に、木下利玄が出たのも、何か誘導があつたのであらう。世説では、秀吉の愛妾松の丸と先夫武田元明との間の子だと傳へる。關ヶ原合戦に先だつ伏見における彼の進退は、後世にも非難せられてゐる。秀秋の關ヶ原の態度程大局に關係はないが、軌を一にすると見てよい。他の諸侯において、進退の目に立たぬことが、豊臣氏の近親だけに、衆人環視の前に著しく目立つたのであらう。之を思へば、其態度には世人の解釋するよりは、自然なものがあつたのかも知れぬ。而も東山靈山、後に、嵯峨或は大原に住んで、安樂な生涯を終へることが出来たのも、叔母北政所若しくは、松の丸の心入れによるものと察せられる。公家・大名・學者・連歌師・僧侶・茶人・富豪・隱逸など、交つて、恣に世を送つた。かうした境涯から出るものは、豪快な文學でなくて何であらう。さうでなくとも、所謂桃山時代と謂はれた闊達な、富饒な生活が生み出した藝術の間に居た人である。其作物が、其まゝ典型としての隱者文學であつたのは、當然すぎることであつた。

一方、利休が代表してゐる如く、當代の藝苑に遊んだ人が、己を以て典型とし規矩として、敢へて昔の型に重きを置かなかつた氣風の充ちて居る時勢である。彼の歌における優越感が、寧放恣など思はれるほどに出て來て居るのも、理由のあることである。其が、歌は爲兼以前に學ぶべきことを知つて、其格を破つて自在に遊ぶことを知るやうになつたのである。彼の歌のあるべき訣は、此にある。

夕顔の咲ける軒ばの下涼み。をとこはてゝれ。女はふたのもの
右天下至樂也。有ラム誰カキモノ如レ之ニ。

かたぶきたる酒とつくりに、瘦せ僧と言ふ名をつけて

なれよ汝。汝はやせ僧。時にははず 頸うち投げて、もの欲しげなる

文殊院にて、朝の眺望と云題いだし給ふこと有ければ

もの申し、歌よみ たうべ むすぶ句に、今朝のもじこそ冬の眺望

九月十三夜

わがものと 大和もろびとおごり見よ。外に知られぬ秋の夜の月

一色に玉敷きかへて、天地の またひらく世や。雪の曙

今日の佛。花たてまつる。この枝におきあまる露は いかゞ見るらむ

すべてたゞ これ皆秋のすることぞ。月も ゆふべも 蟲も 憂からず

九月十三夜

名に立てし怨みも はるゝ今宵かな。月と言へば雨 花といへば風

すべて人を 如何なる時にしのばざらむ。あはれ日又日 あはれ夜また夜

歌匠の歌らしい平俗な歌口、無學な語の斡旋に飽いた隠士の間、かうした作風のとりあげられたことは言ふまでもなからう。だが一方又、別の俗氣が頑に出て來てゐるのは是非もない。長

流・契沖が、大きに長嘯子々々と唱導したのも、理由は明らかである。

併し彼の歌は、一步すれば轉び落ちる危い崖を渡つて居るやうな所があつた。之を救ふに適度の文學意識があればよいのだが、彼の文學——と言ふより、隱者等の懐く文學心は、別殊のものであつた。——は、和歌の本質から逸出しようとするものがあつた。高邁なものを欲して居た。無執著貌を希つて居た。其が多く煩ひをなした。さうしてむやみに、居丈高な壓倒風の物言ひをした。其で、著しく當時流行の抽象癖に輪をかけたこけ嚇しに過ぎぬやうなものが、無際限に出て來た。さうした結果は、やはり當時の歌についての知識の限度を越えることが出來ない。爲に、無内容な觀念風な作物が多かつた。内容あらしめようとすれば、語が別の思想の橋渡しにはたらくやうな、懸詞・縁語でなければならなかつた。さうして此が、戀の懸け合ひなど言ふことを離れて、文雅の徒の實用に使はれることになる、結局は、互に心憎がらせようと言ふ狂歌・誹諧歌に奔るのは、言ふまでもない。夕顔以下の歌でも既に其に深入りしてゐる。

をぐるまの廻りて 空に行く影も、曆の軸にうつる年かな (歳暮)

ぬひ著する今宵の雨のいとも憂し。空ゆく月の雲の衣は (九月十三夜)

しばしとて、木火土金をかりの身は、誰か一度かへさざるべき

(黄金をおこせければ、返しつかはすとて)

此等は全く古風の狂歌である。緊迫した所のない調子が、鯛屋貞柳以前の格だつたことを示して

居る。江戸時代の狂歌の古風ものは、石清水社僧の間に榮えて、京・大坂に根を張つたものである。彼と友として好かつた瀧本坊昭乘なども、藝文に達した隠者ぶりの間に、狂歌に嗜み深かつたのを見ても、此頃の文人氣質が訣る。併し、彼らはかつきりと、短歌と狂歌との間に區別を持つて居なかつたらしい。本格として諷詠する場合と、口拍子にのつて、とりやりする氣安い時との相違があつた位で、日常應接のものにも、歌と狂歌とが、時によつてまじつて出て來たものであらう。

ある人の許につかはしける

生くる日の宿のけぶりぞ まづ絶ゆる。竟ツレのたぎりの 身は残れども

窮乏を歎いてやつたのである。此に對して、其人から金子を貸しておこせたのを返す時の歌が「木火土金」の歌で、全くの狂歌と見られる。一つは狂歌、一つは歌、自ら二様になつて居る。此等のものになると、作者にとつては、單に調子が滑らかだか、どうかと言ふだけの違ひしかない。

河のほとりにて、鮎をとらせなどして遊びて、けうか

あいすくふあみだほとけの御利生か。はらみつばかり 喰ひふくれけり

八十一になりたるとし

ことしわが齡のかずを 人とはゞ、老いてみにくくなるとこたへむ

此も、年代を後に据ゑて感じて見れば、正に狂歌だが、此頃としては、やはり風雅味と、滑らかな通俗調とを兼ねて居るものと見られる。みにくくに九九が賦ツしてあるのである。

謂はゞ、本歌・誹諧歌・狂歌の間を循環してゐるのが、彼のかうした歌を作る時の氣分であつた。さうなるのは、言語の上に興味を置いて居る以上、所詮免れられないことである。

秀吉關東御陣の時分

いつ消えて おのが春をも待ちえまし。富士の高嶺の雪の下草

高臺寺にまうで、豊國明神の像を拜して

なきかげにまた袖濡れて、仕へけむ昔を今の しづのをだまき

「杉原彌助」の子、家定の子であつて見れば、秀吉立身に連れてなり上つた一族である。土民の傭兵として武力を持つて居た者の多かつた時代だとは言へ、類に牽かれて家をなした者の中には、さして兵事に馴れなかつた者もあるだらう。家定の子等の中には、さうした者もあるのは、當然である。兄弟共に武名において缺ける所のあるのは、不思議はないとも言はれよう。事情は事情として、根本にやはり、武將としては、膽の据らない人であつたのであらう。が、文人としてはさすがに、放膽な所もあり、他人の之を遇事することも特殊であつた爲、作物は自然、寛闊なものとなり出でたのであらう。

漢籍千五百卷、國書二百六十部を、隠れがに貯へたと言ふ彼は、歌集又は歌文集として、若狭少

將勝俊朝臣集・舉白集はあるが、別に研究書を残して居ない。が、其弟子山本春正は、徳川光圀の萬葉註疏事業の初めとも見るべき企てに召されて水戸に下つて居る。勿論系統立つたものではないが、亦學統も長嘯を承いだとも定められないが、多少彼の學問傾向を窺ふ手立てにしてもよい。更に春正よりも、稍遅れて——と見る方が正しからう。——おなじ事業の爲に、迎へられようとした下河邊長流は之を辭し、註疏の事だけは受諾した。此が延いて、契沖の萬葉代匠記撰述に到るのである。春正の水戸下りを、長流の招聘よりも早いものとすれば、此二人の間に、長流・契沖の間に行はれたやうな推擧があつたかも知れぬ、と言ふ想像が起る。長流が長嘯に傾倒したことから考へれば、此師承を明らかにしない隠士下河邊氏の上にも、何か、文學上の傳統が考へられさうに思ふ。

短歌の上から言へば、當然二條末流の歌が、一部具眼の人々から排せられる筈の時になつた。さうして、眞に偶然生き残つたと言ふべき冷泉流が、自由な作家を擁することになり、之を唱導したのが、長流・契沖であり、其對象として擇ばれたのが長嘯子であつた。而もその導きとして、更に長嘯・長流の間に、何か系統上の關係があつて、さうした機縁を濃くしたものと見る方が、一層適切らしい氣がする。

畢竟、彼だけの地位に在つたものが、一擧にして處士となり、自在の境涯に入り、而も欲望を矯める不自由なく、欲すれば有るといふ隱者の理想を實現した生活であつた。だから、彼の歌は正

當に評價する人も多く現れ、又正當以上に受けとられることにもなつた。而も、彼の時流を棄てて、冷泉流についたことが、何よりも正しかつた。其と同時に、彼が爲兼を目標とし、更に爲兼の尊敬した曾根好忠・源俊賴の歌に注意を向けるやうになり、其處に製作せられるものが、歌の本質に最叶うたものとならう。其點において、彼は作物よりも、態度においてよいものを持つた。其よりも、よい態度を後人に教へたと言ふ方面に、もつと彼の存在の意義がありさうである。彼の認められざるよい素質を、歌を以て示したいと思ふ。

はふれけむ身もはづかしく 門さして、暮れ行く年にあはじとぞ思ふ (歳暮)

やどりをば 明けぬと出で、雪も 夜も深きにまがふ野べの旅びと (深夜雪)

なか／＼に訪はれしほどぞ 山里は人も待たれて、さびしかりつる

ある人ほど久しくとはざりし時

ぬしなしと 花をや思ふ。雨そ／＼ぐ櫻が枝にかゝる みの蟲

老いらくの世もうく 人もなさけなし。さもあらばあれ。幾ほどの身ぞ

起きて見る霜夜の月の かげ清し。人はしづまる闇のとぼそに

園過ぐる嵐の後は、音もせぬ木の葉につぎて ふる涙かな

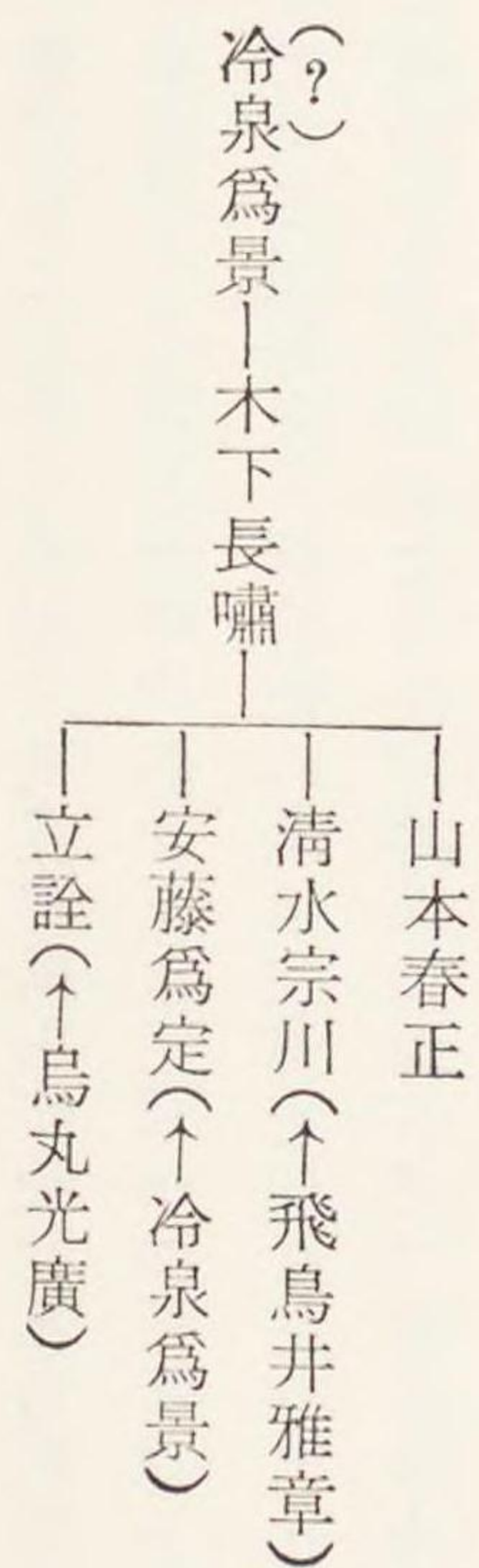
思ふどち ひと日も疎く過ぎぬや。いつと定めぬ世のはかなさに

なき數に入れてや 人のかぞふらむ。生くるこゝちもせぬ うき身かな

擧白堂にて、子どもなど、彼此つどひて遊びけるに、紹三の事まつ思ひ出で、
 遊ぶ子の數にも入らで、君ひとり 苔の下にや 今はなげかむ
 まづ悲し。花を見 月をながめても、そのおもかげは、ムカヒモトうかび消えつゝ、
 吉野山 花見に行かむ出で立ちも、宿の櫻に思ひとまりぬ

態度は冷泉であるけれど、歌風はなほ二條派の長い影響が、此人の上には残つてゐる。歌そのものが、二條派の主題（氣分）を離れては考へられなかつた時代なのである。作る時の構へとは、自ら對立して、こんなものが、彼の歌の調子がある部分まで規定してゐる。彼の歌は一口に言へば、連歌の氣分・詞遣ひが、纏綿してゐる。不世出の天才と言ふほどではないが、此時彼が出たと言ふことは、歌にとつては幸福であつた。後輩の言あげの爲に、大きな心頼みとなつたのである。

彼の門下——と謂つても學も文學もすべて、彼から學んだ訣ではなからうが、——としては、普通下のやうな人々が數へられてゐる。



(注意) ↑印の下の人名は、別途の師匠。此は、後の多師を仰ぐ風を言ふ場合の爲に、わざと掲げた。

四 啓蒙時代

隱者文學末期

江戸の政治は、最初から保守であつた。寧、保守を表にして隱忍した、漸進主義であつたとも言へる。そこに世人は、其隱微を察すると共に、又全體として批判が、さうした點を中心として集注してゐる。唯、此時代初めから、元祿以前にかけての特徴は、前代以來の教養が、存外廣く武士・郷士階級に及んで居たことである。

其等の知識を無視しては教化の行はれる理由もないことを察して立てた幕府の勸學の方針が、更に此勢を煽つた。だから、武で仕官を得ずば、文を以てありつきを求めようとするやうになつた。さうして中には、二つ乍ら相兼ねた者も尠くはなかつた。さうして悉く志を得た訣ではなく、寧、志を失うて流離する者が多かつた。此等の中の武に偏した者は、歌舞妓衆・町奴などにもなるが、文に長けた者は、口を糊する道が乏しかつた。併し、文道に在る者は、個人の聲をも、社會全體に及ぶことが出来たのである。教養薄い此時代においては、さうした儒道或は文學を以て世に立つ事の出来ない輩に、其々ありついた者と、對等の實力あるものが多かつた。其だけに不平が迭つて、批評となつた。儒を以てする者は、政道・經濟・軍法に、文を以てする者は、歌・連歌・

誹諧・艶書の類から、軍談講釋の類まで試みた。さうして其間に苛辣な非難の言を挿んだ。さう言ふ聲を聞くに馴れた當局者は、無意味の謠言までも、眞として聞きとつた。此を根絶するには、

學を勧めて舊習を廢するか、一方の學に集注するか、或は又職なき有能者を野に留めないことであつた。爲政者は、異學を禁じることを方針とした。だが文學、殊に日本學及び短歌文學の人たちについては、警戒することを疎かにした。此が、在野の儒學勢力去つて後、長く野に批判力になつて残つた理由である。國學はこゝに起る。短歌・連歌だけでは、まだ獨立した一家の學たり得なかつた。儒學の教養或は佛家の學を以て、雜然たる組織——一つの神學にも似たものを作るやうになつて行つたのが多い。さうして、其日本學を中心にするものは、神道者に近い色彩を以て行く。儒學・佛學を其々の中心とした者があつて、様態種々であつたが、結局世の中を眞に謳歌する者は尠かつた。之が對象となる理想境を見出さない間は、江戸幕府の方向は、其でも安全であつた。かうした隱者形態は、前代の隱逸者には、見ることの出來ぬものであつた。

増穂殘口の如き、諸道に通じ、艶道まで兼ねた人もあり、下河邊長流・木ノ瀬三之・戸田茂睡のやうな、歌に向つて學に向つて、新な批判を試みる人々が出て來た。

長流の生れた大和松山（宇陀郡宇田）では、どう言ふ種姓だつたか知れぬが、後、水戸侯の招請にも應じなかつたといふ傳へは、隱者の風格を思はしめるものがある。唯、其と目的の通じた「萬葉集管見」が残つて居り、萬葉訓詁書としては、時代よりも進んだものがあり、此が如何ば

かり契沖の代匠記の刺戟になつたかは察せられる。集には自撰の「長龍延寶和歌集」があり、又契沖撰の「晩花集」がある。歌は、此人々に到つて、やゝ文學を見出して來た觀がある。延寶集及び晩花集には、「爲兼に倣ふ歌」なることを詞書きにしたものがある。彼の歌が、契沖と共に、やつと二條流の主題を脱し初めた理由が知れる。おなじ「長」の字を持つた長嘯八十の年には、彼は既に二十五歳の壯盛りであつた。さうして、大坂に住んで町人たちを教へて、隱者としては、やゝ新しい生活法を採つて居たことが思はれる。凡、二十年長じた宗因とは、同時に同じ大坂三郷の中に暮して居たのである。

木ノ瀬三之も亦、固い型の隱者で、里村昌琢に學んだと言ふが、和漢佛に通じた人らしい。佐佐木信綱さんの推輓によつて、世に弘く紹介せられたが、弟子としては、今井似閑等のあつたことから寧、注意すべき人であらう。古今傳授も「末の世になりて、愚かなる人の卑しき心より、傳授といへること始れり。」佐佐木博士の引用せられたものにも見えて居る。

かうした自由批評は、必、更に以前からあつたに相違ない。隱者としては、武家に反感を持つと共に、公家の無力を知つて來た時代である。さうして自ら守る學を持ちはじめたのである。公家の傳統する傳授事を軽く値ふみするやうになるのは、時勢の然らしめた所だ。

戸田茂睡は、駿河大納言の臣下の子で、流離の末ありつきを得たが、後、又其を失うた。だから殆、生れ乍らにして漂遊學徒の格を備へてゐる。此人は、江戸の町の成長の過程をつくぐと見

て暮した。而も當時、江戸の近郊眞土山の下に住み、又本郷丸山にも居て、いまだ完成せざる粗野な江戸の性格をも持つて居たであらう。恐らく開拓の届かぬ江戸文學の曠野に鋏を入れようとして、發表したのが「梨本集」であらう。此書は、歌道師範としての新しい門地を張らうとする意気込みを見せてゐる。

實作の巧拙はともかく、問題は理論を以て、前行者の迂愚を指摘して、我を依るべきを示すにあつた。だから彼の歌論家としての爲事にも、隠者らしい野心を見逃しては、意味のなくなるものがあるのである。作物は一句・數句の間に捨て難いものは往々あるが、まだ長流だけの境地にも達して居ない。つまり古歌集についての勉強が、まだ／＼足らなかつたことに、その理由があるやうである。

五 隠者及び學者

學問が文學を生むよりも、寧ろ妨げになる場合の方が多い程である。だが啓蒙時期において、據るべきものは、やはり古典及びその研究である。そこに文藝復興があるのである。長流が爲兼集を読み、曾丹集・散木奇哥集を推讚したのも、理由のあることである。單に從來の人々の読み又味うて来た作物集だけでは、おのれの鑑賞眼も亦、囚はれ勝ちなものである。だから其等をまづふり棄て、新しい物に就く必要があつた。草庵集や三玉集では、どうにも魂が引き出されなかつたのである。又古今・新古今・新勅撰の類を見ても、見方が固定してゐる以上、一舉に新しく目を開く事は出来ない。長流・契沖等は、どう言ふ契機キツカからか、さうした新風を孕んだ多くの歌書を読んだ。

契沖は、悉曇學の方法を以て、古代・中世の言語を研究し、又其に馴された心で、研究態度を會得した。歌及び歌物語の類の研究から、更に萬葉集に進んだのであらう。彼が尼ヶ崎の生家に、まだ四歳の乳兒であつた時、萬葉集寛永活字本は出たのである。さうして、其生家下川氏の仕へた青山侯も亦、歌を愛護したことのある家であつた。

近來までもさうであるが、萬葉集と、創作物としての歌との關係には、不思議なものがある。歌人學者は、歌の本質に對して、大體に、溯上の限界を持つて考へて居たやうである。たとへば、我々が記・紀を見ても、其様態の歌を敢へて作らうとしないやうなものが、萬葉集に對して持たれてゐたのである。萬葉集は歌集には相違ないが、古人等で考へる作物の歌とは、隔りのあるものであつた。學問の對象ではあるが、創作の規範にはならぬものと見られて居たことである。師範家の持ち來りの型の謂はれないことは知りはじめても、歌は、師範家の掌る範圍のものを、文學と見てゐたのである。即此間においてこそ、學問としての歌もあり、文學としての歌もあつたが、萬葉集はやつと學問になり得ても、其以上のものではなかつた。だから完全な短歌學の對象ではなかつた訣だ。此考へ方は、近代まで續いてゐる。最近の萬葉學者木村正辭先生の歌が、家

持の時代にも及んで居ない。精力を萬葉註疏に集注した鹿持雅澄の「山齋集」は、やつと家持に達するか否かの程度の古風である。本居宣長の「鈴屋集」に古體と新體とを分けたのも、かうして見ると却て見識が高かつたと言ふことも出来る。賀茂眞淵が其前に在つて、ともかくも家持調でも、萬葉ぶりを唱導したのは、歌の文學を鑑別する才能を思はせるものがあるのである。ともかくも、歌が純文學風に作られなかつたと同じく、萬葉集の持つ文學性も、認められることがなかつた。だから勿論、萬葉ぶりを歌にとり入れる性質の「歌がら」とも思はなかつた。此ことが前後久しきに渡つてゐるのである。つまり、萬葉を去ること久しきに過ぎた爲である。まだしも、平安中期又は末期の歌人は、幾分でもこれを模しようとしてゐる。

契沖だけの人で、萬葉の影響を彼の文學に受けることの極めて少いのは、不思議乍ら、かうした理由があつたからである。長歌の如きも達意であるが、まだ文學性を持たず、其だけに萬葉よりも、古今ぶりの長歌であつたと言へる。

……大空の雲もたゞよひ、塵もさり、水なき琴のしたびにも流るゝ音し、

琴柱には咽ぶ音して、鶯は古巢にあるを、笛の音に其も囀り…… (無常賦)

平俗ではないが、音調が後世風でばさくである。萬葉集に親しんだ第一人の作かと思はれるばかりだ。尤、長歌は容易に、其拍子・情調を移すことの出来ないものと見えて、江戸期の古學者中、眞に萬葉に出入し乍ら、近代感を詠み得たものはない。唯一人、加納諸平の作物を取り出し

て、他の人々の長歌と比較して見ると、却て長歌の如何に擬し難く、又創作し易からざるものを持つて居たかゞ知れる。

短歌には、文學としての想像は、相當に持つて居る。

富士の嶺は山の君にて、高御座 空にかけたる雪のきぬがさ

なるほど、殊に二句が俗調だし、三句の据り、四五句の移り皆俗だ。雪の華蓋を見立て、其下が高御座を考へたのは、今一步之を救ふ詞があつたらと思はせる。即、萬葉調でよまれたものとしたら、此常識味と凡庸感は吹き飛ばされて、文學作品として、見直すことが出来た筈である。其でも、題材が題材だけに富士百首は、萬葉集の倂を更に透き寫しにしたやうな所のあるのが、却て、人を憮然として寂しませる。

共に立つ 宿の梢の朝鳥の 還る夕を、何處にか寝む

多少の趣向を思はせてゐる作だが、底にあるものは偽りではない。一句に病ひあり、二句が構圖し過ぎてゐるのである。三句以下は、西行にもなく、又後の良寛にもない柔軟性を出してゐる。感傷性を露はにしてゐるが、感傷そのものに留意の示されなかつたのが、自覺して用ゐられ、次いで其が厭はれ出したのも、明治及び其以後の事である。昔の作物で、感傷を扱つてゐるのは寧ろ優れた用意と見るべきであらう。彼が文學上の「若さ」を持つて居たことは、此作でも見られる訣である。

初瀬のや 里のうなるに宿とへば、霞める梅の立ち枝をぞさす

明治の新派短歌が興隆しても、尙、此境地は棄てられなかつた。現實を擬古表現して、而も其寫し出す所は中世的である。人は之を新古今式だと言ふかも知れぬが、其は外的な感じ方に過ぎない。唯、江戸期の歌の正調と謂つたものは、かう言ふ所にあつたのだと見るのが、本道だと考へる。「霞める……」と言語上の美化を行ひ「……立ち枝……」と選擇を加へたのは、言語だけの問題ではない。かう言ふ點を末梢的なものと見てしまへば、擬古文——殊に散文などの場合にも、價値を失ふものが多く出る筈だ。上田秋成の文章の如きは、結局かうした古語と、漢語との選擇配合の上に、凡その價値がかゝつて居るのである。

契沖は、過去の歌集・物語等を見わたして、其文學味も、時代としては十分知ることのできた人である。伊勢物語を好み、殊に蜻蛉日記を愛したのも、彼の鑑賞眼の凡でないことが知れる。唯、短歌文學の再認識の時代の選手であつた爲に、其文學の持つ過去の特殊性に煩ひせられることの多かつたらう、と言ふことは察せられる。其歌が一通り文學をなし乍ら、更に一往、草庵集風な遲鈍な感覺を與へないで居ないのは、時代である。だが此當時として此だけの新味でも歌に表すことの出來たのは、彼が優れた才能を持つて居たからである。文才が必しも文を作るでもなく、才に適應した作物は、時代と、深い感激とが之を進めるのである。彼は、早く悪い時代に生れ、文學感激を催すべき生活をも持つて居なかつたことを考へてかゝらねばならぬ。其作物中に

見える、覺めた美意識と、文學計畫は、之を古きに求めれば、やはり冷泉派の古様又は、京極爲兼等から攝取したものと見るべきであらう。唯、歌が極めて自在であるべきものとの自覺の替りに、ある小ぢんまりした纏りを欲した時代の後であるから、かうした作風になつたのは、當然と言ふ外はない。彼の集は、「漫吟集」として傳つて居る。其外に長流同様、自選の、「契沖和歌延寶集」がある。

六 古文學の發見

長流・契沖は、茂睡のやうな單なる理論家ではなかつた。曾ての歌人・連歌師がさうであつたやうに、學と作とを兼ねて、一つの「學」としてゐた。此點、同時に彼等に先だつ、隱逸長嘯以下の人たちよりは、日本の文學史風な意味における文學者であつた。學と作と併行しない所に、文學がなかつたのである。でも、此亦やがては純文學者と言ふべきものを生ずるやうになつた。都會生活のをりに馴れた人々は、漸くさうした傾向に趣いた。併し、其とても、誰一人として敢へて學問の、文學に不必要なることを揚言した者はなく、不必要は認めて居ても、外面修飾の爲に、古文辭の研究を銜ふやうになつて行つた。

唯、契沖も長流と同じく、學と作力とはあつたが、其學の爲の眞目的は持たなかつた。之を見出したものが、國學者であつた。古文辭以外に、古代生活を見ようとした。文藝復興の本體を擲ま

うとしたのである。

七 萬葉調の概念

私は古く、和歌における萬葉ぶりの起伏状態を述べたことがある。眞淵に到つて、理論上に完成した萬葉ぶりの歌は、作風としては、眞に純然たる萬葉を見ることは出来ないにしても、萬葉に向はうとする意向は、はつきりとして來て居る。其で、國學の發揚と共に、眞淵系統及び、其に準ずべき流派において、萬葉主題の歌が行はれて來た。ところが、國學以前から傳統を持つて居る倭學、殊に公家・堂上に傳へた系統は、此との交流が甚しかつた。其は、一人で二三の師匠に前後してついで居る者の多いの由つて居る。國學者のやうに見えても、さうでない倭學式の思想を持つたものがある所から、又國學者である筈の人々にも、おなじ氣流が流れて居る。さう言ふ人々は、多くは萬葉ぶり——折衷——非萬葉ぶり、此等の間に彷徨してゐるのである。だが、明らかに國學系統でない公家侍・連歌師などの流れを引いたものは、やはり古い二條か、でなくば冷泉などの傳統を守つて、歌だけは交流上から生ずる新味を持ちながら、古今を宗としたものに進んで來た。景樹が出ると、その位置と、居住地との關係、其に加へるに彼の渡世才能によつて、調においても、内容からも、安易なものに轉向させるやうになつた。其は景樹自身よりも、彼の門流の人々によつて遂げられた部分が多い。

近代短歌

だが、萬葉ぶりは、かうして、古今調にうち負された形を採ることになつた訣だ。此事が、明らかな形になつて出て來たのは、寧ろ、明治時代と見る方が本たうであらう。其を二十年代の末から起つた新派和歌の運動が、一舉にして、又元の形を——と言ふよりも以上に、古今風をおしこめてしまつた訣なのである。今日においては、所謂舊派の古今を宗とするものは、唯、相當な人數の作者を持つて居ると言ふだけで、一つの文壇をなしても居ないし、文學自身ですらもなく、情熱を失うたものになつてしまつたのである。新派運動の嚮導力はやはり、近いところには、學校等においてせられた古典教習の結果であるが、其をとほして窺はれるものは、國學者の萬葉作風及び、稍完全に把握した古典の力であつた。つまり、萬葉ぶりが勝つたことになる。之を溯つて延長すると、萬葉から百年後に古今が出て、此二つの流れが交錯し乍ら、次第に古今に壓されて行く。而も時々、萬葉ぶりが少しづつ復活する、と謂つた形を見せた。平安朝における曾根好忠・源俊賴の態度は、萬葉と通じるものが多かつた。さうして、俊賴に對して居る勢力であつた、藤原基俊すら、萬葉を標榜して居たのである。而も彼は萬葉から、何物をも得て居ない。萬葉の精神と言ふよりも、生活の把握が如何に困難かといふことは、江戸や明治だけの事ではない。昔からさうだつたのである。もつと、おしつまつた末期平安歌人にも、萬葉訓讀のある成功から持ち來された、萬葉ぶりが見え出してゐるが、其が著しく姿を残したのは、東國まで輸出せられた、と見える源實朝の萬葉ぶりである。其同じ勢ひが、京極・冷泉の作物製作の一動機にもなつて残

り、常に一知半解のままの文學刺戟となり續けて來て居るのである。だが謂はゞ、此長い期間において、萬葉ぶりは地下水のやうになつて流れてゐた。さうして、冷泉流の行はれる所に、多少實感を持つて、萬葉めいた歌風が鑑賞せられると謂ふ、あり様だつたのである。

この萬葉・古今兩歌風の交錯状態の考へ方は、今思へば、古今自體から、萬葉以來の繼承要素をとり去り獨立させて見て居る點において、可なり不自然なものがあると言ふことが出来る。だが以前、友人島木赤彦在世の砌、この考へを提出したことがある。多少、現在の萬葉論の基礎となつてゐることは、明敏な史家は見るであらう。だから此點、もつとよく訂正しておきたいのである。たゞ民謡においては、その性質上多く記録せられないものであり、又時間的普遍性を欲する爲、永く殆、同様の主題をくり返して居る。唯、新鮮な刺戟の變化を欲する性的な敘述以外は、言語・句法の末に到るまで、驚くばかり古典的であつた。かうした推移不容易性から見れば、民謡は、古今以前からの要素を、鎌倉にも又室町時代にすらも、尙持ち續けて居たと見られぬではない。作者或は諷誦者の生活その他、環境ばかりによつては見られぬ所の、古典性の固持・揚棄・交錯の状態なのである。萬葉ぶりに近いものが、時代々々の民謡の變化の基礎にはあつたのである。ともかくも、論理形式として、萬葉・古今の對立を假設して見るならば、こんな風に考へることが出来るのである。

さうして事實においては、萬葉と古今とが目安とせられて、歌風・歌派が見積られて來たことも、

亦事實である。この二つの歌集の外に向、新古今集が現れて、一つの獨得な文學境地と主題とを顯し初め、こゝに短歌の本質の成立に近づいて來た。而も眞の文學態度らしいものが生じたのは、此集の成立前後にあるのだから、假設は假設のままの構圖として、此三つの集を中心にして、近世の短歌を考へて行くのも意味はあるであらう。さうして眞實には其後に出た玉葉・風雅においての「短歌本質成立」、かう言ふ事實が、之に對立してゐることを決して見落さないやうにしたいものである。

八 眞淵と宗武と(その一)

國學を以て世に立つたつきとすることは、まだ極めて困難なことであつた。さう言ふ世の中が來る爲には、まづ、國學が學問となる必要があつた。而も第一には、經國濟民の理想を寓したものでなくてはならなかつた。又儒者が常に立てる言説のやうに、聖賢より流れ出で、邪淫なきものでなければならぬ。歌は儒學における詩よりも、一層國學に關係が深かつた。だが詩經が持つと考へ做されたやうに、思邪ヨシヤなきものばかりではなかつた。國學者が天下の學を築く爲には、此點が問題とならずには居なかつた。

天下の學となる爲には、江戸將軍をはじめ、諸侯の家學とならねばならない。率然と起つた國學が、かうした天下の學となることは、單純な努力では達せられるものではない。だが又幸に、さ

うした高位の人々に近づき易いものとして、歌が、國學に附隨してゐた。文學を好み、新しい意味における歌學としての國學に、親しまうとして居た八代將軍の御曹司たる宗武が、在滿よりも眞淵に就くのは當然である。在滿以外にも、眞淵以前の指導者があつたであらうし、在滿辭退前にも眞淵が進出して居なかつたとは言へぬ廉々がある。宗武の歌を見ると、鎌倉將軍實朝同様、古態新様が相當に交つて居る。其萬葉ぶりの新しい歌が、宗武一個の力で率然生れて來たと思ふのは、あんまり文學史を見る者としては、悠長な考へ方と言ふ外はない。實は我々としては、宗武の歌、及び歌の上の主義が、何處から來たか興味になつて來る。其誘導者として、眞淵を考へることは、一應正しいやうである。だが尙考へねばならぬ餘地のあることは、宗武論において述べた。

而も此翁の、田安家に出入りするやうになつた頃は、まだ、凡萬葉ぶりの歌人と言はれない時代で、村田春海の所謂『其頃はかの荷田の家のをしへのまゝにて、いにしへぶりなど言ふ事は、尙唱へ出でられずなむ。』とある五十歳未滿の頃の事であつた。

かげろふのもゆる春日の山櫻 あるかなきかの風に かをれり

秋の夜のほがらくと 天の原照る月影に、雁鳴きわたる

こほろぎの鳴くや 縣の我が宿に、月影清し。とふ人もがも

にほとりの 葛飾早稻の新釀 酌みつゝ居れば、月傾きぬ

夕されば、海上がたの沖つ風 雲居に吹きて、千鳥鳴くなり

眞淵ほどの人でも、純然たる萬葉ぶりの歌は、實に寥々たるものである。我々の時代の最喜ばしい發見で、同時に一つの動すことの出來ぬ鑑賞法を立てるに到つたことは、萬葉ぶりの歌の正しい値打ちを見たといふことである。凡萬葉ぶりである限り、まづ其後のいづれの時代の作物をめぐらした擬古作品よりも、通常非常に優れてゐることは、事實である。かう言ふことは、今こそ常識のやうになつてゐるけれども、其でも尙、多少不滿を持つ短歌作者・鑑賞家がある。ましてアララギ派の作風が時代を作らなかつた以前は、個々の作品について、相似た他の時代の風に擬した古典歌よりは、必優れてゐることを感じてゐた人でも、理論の上にも、感情の上にも、容易に受け容れなかつた考へ方である。だが、短歌が末梢の技工を思ふことの少かつた時代、又其新興の氣の正しさと美しさとを發揮した時代に最近だけに、——此がすべての國々の古代作物の宜しさの因である。——何と謂つても、萬葉の歌は、第一義式な素朴と均整とを保つてゐる。其をとり入れたのが、國學者の常に抱いてゐる文藝復古への憧憬である。此精神は、後代の文藝の本質のよさを發揚し初めた時期を、鋭敏に感得したのでもあつた。

萬葉の歌は、かうして他の時期の歌よりも、一群として不動の信頼を持たせるやうになつた。此は今の萬葉調流行の時代の去る事があつても、地を掃つたやうには過ぎ行かぬ鑑賞法である。さうしたよさを、冷泉・二條二流の歌風の混淆時代、又稍新古今ぶりの喜ばれ出した時代、古今

風があらゆる形において遍満して居た時代に發見して、ともかくも理論として發表するに到つた眞淵は、國文學鑑賞法に、大きな新しい事實を打ち立てた人と言はねばならぬ。

此事實の前には、其作物が、相當各時代の歌風を雜糅してゐると謂つた事も、大した疵とはならぬ。つまりさう言ふ陣痛を経て若干の正しいものを、確實に擷んだと言ふ事になるからである。其ほど、眞淵においてすら、萬葉ぶりはあつても、純萬葉の氣魄の撲つと謂つた作品は尠いのである。だが其以外に多くの萬葉ぶりの歌がある。時代々々の歌風の上に、萬葉語又は萬葉の拍子を一部分に措くことによつて、其歌の情調を古典的にひきあげると言つた萬葉ぶり、此が賀茂翁の作物の本體と言へるかも知れぬ。だが其は、何處までも、數の上の問題である。本體といふことが、其人の最後に到達した最よい姿と言ふ意味なら、極めて數は少くても、作風を決定したものを擧げるのが正しいだらう。だから、眞淵の歌は、此二つの判断の上に置かれてゐる。

だが、追隨者の歌で見ると、何と言つても數の多い作物の傾向を、其先覺の本格の姿と見るであらう。眞淵の弟子では、楫取魚彦が——問題はある——萬葉の單純性を守らうとした外は、眞淵以上に各時代を混淆した歌風になつてしまつてゐる。此が國學系統の歌人の歌を、凡萬葉調にのみ趣かせなかつた理由なのだ。

最訣り易い例を引くと、加納諸平である。彼ほど賀茂翁を尊敬する色々の因子を備へて居た人が、ちよつと見には、如何にも賀茂翁と違つた歌を作つてゐる。併し、よくよく見ると、彼ほど亦、

眞淵に似た作家もない。長歌においては、晦まされない知識を以て、吾々は見る。諸平の作物は、眞淵の長歌から出發してゐればこそ、あれだけの抒情味のあるものが出來たのである。「岡邊の家にて詠める(眞淵)」などがなかつたら、諸平は長歌に自在な境地のあることを知らずにすんだらう。長歌を比べた後に、短歌を見ると、如何に眞淵が諸平の歌の素地になつてゐるかゞ知れよう。眞淵を純萬葉、諸平を單なる後世風の歌人ときめてかゝつて讀んでは、問題にならない。まづ「賀茂翁家集」その他と、「柿園詠草」とを心靜かに讀み比べて見れば、私の欺かない事が訣るであらう。全作物を通じて得るものを重んじたのが、諸平の眞淵に對する態度である。却て、極僅かな作物の中に、窮極の姿のある事を見逃してゐたのである。諸平その他の歌人も、此からあげる位の萬葉ぶりならば、實作を残してゐるのである。

を筑波も 遠つ葦穂も 霞むなり。嶺越し 山越し 春や來ぬらむ

すがのねの 長見の濱の春の日に、群れ立つ鶴の ゆたに見えけり

み吉野を 我が見に来れば、落ちたぎつ瀧の都に、花散りみだる

ふる里の野べ見に来れば、昔 わが 妹とすみれの花 咲きにけり

雲雀あがる春の朝明に見わたせば、をちの國原 霞たなびく

あしびきの 岩ね菅原 いくつ夏繁りゆくらむ 岩ね菅原

天の原 八重たな雲を吹きわたる息吹もがもな。月のかげ見む

縣居の茅生の露原 踏み分けて、月見に来つる都人かも

こほろぎの待ち喜べる 長月の清き月夜は、更けずもあらなむ

はしだての 倉梯山に雲霧らひ 高市國原 雪ふりにけり

尊き哉すべらみことは、神ながら神をまつらす。今日のひなべ

信濃なるすがの荒野を 飛ぶ鶯の翼もたわに 吹く嵐かな

朝日かげにほへる山に、紫の雲立ちわたる。春近みかも

み民われ 生けるかひありて、さすたけの 君がみことを 今日聞けるかも

飛驒たくみ讀めて造れる眞木柱 たてし心は、動かざらまし

不二の嶺の麓を出で、行く雲は、足柄山の峰にかゝれり

實は、眞の萬葉調といふ程のものではない。だが其中に這入つてゐる若干の萬葉語彙、萬葉情調のある句が、他の時代、他の歌風であるよりも、どれだけ此等の歌を、たけ高く見せてゐることか、明らかかなことであらう。

一等初めに擧げた「かげろふのもゆる春日」の歌の如きは、傑作の一つだが、萬葉に喜びを感じることに薄い人は、萬葉ぶりとは見ないであらう。萬葉ぶりを他のふりから鋭敏に感じ分ける人は、之を萬葉の潜んで出たものとするであらう。かうした點になると、個人の直観と知識との、一つ物の鑑賞の上にも、色々な効果を持ち來す事が思はれる。ともかく、眞淵が萬葉集を愛して

居なかつたら、かうした姿にかうした境地が託せられて來なかつたことだけは、否むことが出來まい。此が既にさうであつて見れば、第二例にあげた多くの歌は、同感せぬ人から見れば、全く萬葉の形骸を學んで、學び得なかつたものと言ふであらう。だが、其人が萬葉でないと感ずることとは、同時に古今・新古今・玉葉風雅でもないと言ふことの出来る根據にもなるのである。ともかく、混淆した歌風を、若干萬葉で統率する傾向にあるものと見るが正しからう。

萬葉に親しみながら、又萬葉提唱以後の作もあるだらうのに、賀茂翁家集の「戀歌」の部は、どうしてかうだらうと思ふほど、後代調である。どうかすれば、二條末流の作かと思はれるほどである。戀歌はかう言ふ型を出ぬものと、彼は考へたのかも知れぬ。併し、さうした同じ歌口のもでも、他の部類には、眞淵の詩人としての天分を窺はせるものがある。

筑波山零のつらゝ 今日とけて、枯れ生の薄 春風ぞ吹く（筑波……しづく萬葉語）

とふ人の笛も聞えて、垣の内に梅散る風のおもしろきかな（擬王朝物語風）

霞たつ春野の雲雀 何しかも、思ひあがりて ねをばなくらむ

ふる里は、春の暮れこそあはれなれ。妹に似るてふ山吹の花

高き屋は涼しかりけり。あらがねの土てふものし 夏にやあるらむ

今朝はしも 竹の林ぞそよくなる。世は秋風の立ちやしぬらむ

たなばたの逢ふ夜となれば、世の中の人の心もなまめきにけり（第五句の實感力は、非常である。）

とほつあふみ 濱名の橋の秋風に、月澄む浦を 昔見しかな

(桂園一枝にある境地。姿はなよ／＼してゐるが、感覺をとる。)

さゝなみの 比良の大わだ 秋たけて、よどめる淀に、月ぞすみける

かみな月 今日も時雨のはれにけり。曇りにけりと 言ひて暮しつ

(景樹に、殆同想のものがある。)

D 冬枯れに、里の藁屋のあらはれて、むら鳥すだく梢さびしも

我がいほの庭には、あともなかりけり。落ち葉が上に、ふれる白雪

ふる雪の白斑シラフの鷹を、手に据ゑて、武藏野の原に出でにけるかな

(調子に混亂はあるが、單純化を思はせてゐる處が見える。桂園調の前驅)

茂りあふ松かげに 君をおきしより、風の音こそかなしかりけれ

D 色かはる萩の下葉をながめつゝ ひとりある身となりけるかも

雄鹿なく岡邊の萩にうらぶれて いにけむ君を いつとか待たむ

眞淵の歌を通覽すると、こゝに二三抜き交ぜた類の桂園調と謂つたものが、可なりある事を發見するだらう。あれほど景樹が、眼の敵のやうにした賀茂翁の歌が、全く桂園調に影響を與へなかつたとも言ひきれなくなるのである。人は概念の上には争ふ事があつて、現實には、却て歩みよつて居る事が、屢ある事を思はせられる。

過去に、鎌倉右大臣實朝を發見した眞淵は、同時代に田安侯宗武を知つた。さうして、其實朝において數少いが優れた萬葉ぶりを見る如く、彼自身亦作物中に極めて少い萬葉歌を残した。併し何れにしても、其が到達點だつたと思へば、我々は安んずることが出来る。さうした中には、宗武が、わり合ひに、多くの萬葉ぶりを、全歌集の中に留めてゐる。だが、かう言ふ意味においても、數を以て文藝家の才能・天賦を定めることが出来るかどうか。

眞淵について言ひたい事は、山程ある。だが此と景樹の分は後追ひとして挿し込むのである。唯心ゆかしのつなぎとして之だけを書いたのはまだしもだ。此も學問の祖先に對する報謝である。

九 眞淵と宗武と(その二)

ともかくにも、所謂、堂上風なる二條傳統の歌柄は、陽に守られ乍ら、陰にはありふれた見識のないものとして、學才を抱くものゝ屑しとする歌風ではなくなつて居た。尠くともさうした意識が、人々の心に動きはじめて居た。従つて其聖書なる古今集が、まづ疑はれねばならぬ時に達した。だが長い歴史は、やはり流傳せられるには、其だけの價値の勿論あるものと考へて、古今集をふり棄てる事は出来なかつたのである。而も、此古今集に替るべきものが、何だかと言ふ目安は、既に立ちかゝつては居た。其が萬葉集におちつくものとして、安易に考へるのは、歴史の迂餘曲折を、考へに容れて居ない近代の見解である。だから先、萬葉が適度に文學性を認められ

るまでに摸索せられたものを考へないでは居れぬ。即、新古今集である。此集ならば、成立・傳來いづれから見ても、何れの流派からも排斥せられる筈のものではなかつた。だが、此集には、まだ傳統ある歌學が出来て居なかつた。其だけに、學の對象としては、江戸期に到つて、初登場したやうな訣である。而も、新古今集の中に、古今集を見出すことに、一つの意義が見られるのである。

荷田春滿の家學を傳へた在滿は、既に春滿の築いておいた基礎の上に立つてゐた。だから、春滿の理想を追ふことに急しかつた。其で、先人のとつた方法は深められずに、寧ろ、どうして正しく之を活すかといふ點にかゝつてゐた。彼は新しい有職家のやうな形を持つて居た。一つは、江戸の上流に重用せられた高家の姿をとつて、規範としての國學を興へようとしてゐたのかも知れない。彼の「國歌八論」で、價値を高く認めたのは、新古今集であつた。さうして、新古今集の中の代表として、良經を探つて、定家を棄てた。謂はゞ、古今集の「よみ人知らず」の風格を延長したやうなのが、後京極攝政であつた。在滿の方針は、正しく領かれるものを持つて居る。「國歌八論餘言」を書いたのは、田安宗武の名である。歌には、「天降言」の如き創作集もあるのだから、此論説も彼の執筆ではないとは言はれぬ。だが同時に、歌文兩つながら、在滿以外にも、指導者がなかつたとは言へない。

在滿の田安家に出入を辭し、賀茂眞淵が新に殿人となつたのは、二人の間に極めて圓滿な受け渡しがあつたやうに考へられてゐる。だが、其にしてからが、國歌八論などの意見の行き違ひがあつた事に基くやうに説いてゐる説から見れば、數年遅れては居ても、露はに宗武説に贊同を表してゐる眞淵の爲方は、何か意味がありさうである。其に在滿の辭任は、「大嘗會辨蒙」に關しての謹慎の意義においてしたものであるとするのが、正しいらしいのから見れば、——たとひ京都方面の故障によると言はれるもの——國學者として幕府から忌まれたものゝ早期の一人と言ふことが出来る。此人には、春滿以來の理想があつて、文學に泥むを屑しとしなかつたのではないか。こんな點でも、平田篤胤等の性格の一部が既に露れて居ると謂へる。宗武が彼を聘したのも、田安侯自身に水戸の光圀の影響があり、又其以外にも幕府親睦の大諸侯に幕府を輕視して、直に天日に接しようとする理想の者があつたのを、註釋として見ても訣るやうに、古典・古文學愛好の心には、據り所があつたのである。在滿に替つて眞淵が侍ることになつたのも、亦言つたことの外に、或は信賴の眞淵に傾いた爲と見ることが出来る。單に國歌八論について、意見が合はなかつたから、と言ふ考へ方を避けるべきであらう。

『歌のものたる、六藝の類にあらざれば、もとより天下の政務に益なく、また日用常行にも資くる所なし。』

(評) 歌の本分の徳を知らず。後世の歌になづめり。

と言つた八論中の翫歌論の冒頭の句から見ても、在滿の態度が訣る。此部分だけ見れば、頑固な藝術無用論のやうに聞えるが、八論全體が此語に適當な裏書きを與へてゐる。其は、一面文藝功利主義に對しての解放で、歌に對してさうした實利を望む習慣を排したのである。又一方、到底歌は、一文學に過ぎない。經世家として見れば、片々たる作物によつて、何が望まれようと思ひ棄てた語でもある。「六藝の類にあらざれば」と言ふのは、在滿として矛盾のやうに聞えるが、歌道の人の無學なのに對して、自ら學、倭漢に立つことを揚言してゐるのだ。だから、一つ事を兩面から言つてゐることになるのだ。「評言」を見て知れるやうに、宣長のやうな圓滿な常識家でも、結局此點は却て、在滿までに到つては居ない。

『然るを中古以後の官家の人は、天下の政務、武家に移りて、わが閑暇なるまゝに、ひたすらに歌のみを好みて、終にわが敷島の道と稱す。これ歌の本來を知らざるのみならず、道といふことをも知らざるからの妄言なり。論破するに足らず。』(翫歌論)

(評) 公よりも許し給ひて、此道を専らと任じ給ふ家の人なれば、我が敷島の道といはむことは、時代に取りては難なし。

文藝或は學問の上から、獨占式の傲りを憤つたのは、在滿の志が次の時代にあつたことが知れるし、宣長は稍後れてゐ乍ら、——勿論當代において最成熟した常識人としての言ひ方だが、其立ち場からは、何の新しいものをも得る望みはない。

『然るに、今の官家の人は、……會々、力ある歌を見ては、輒曰はく、これ地下風なり。歌にあらず。これ誹諧なり。歌にあらずと。』(官家論)

(評) 眞に笑ふべし。

國歌八論全體から推すと、傳統と權威とを以て、文藝たることの刻印としようとした從來の歌に、學問の保證を以て、新しい價值をうち建てようとしてゐるのである。さうして、この考へ方は、この論議以前から實行に移されて居たのが、こゝに明らかに理論を立てたことになるのである。もつと適切に言へば、此以前から既に、一面から人々によつて、くり返されてゐた官家論が、歴史背景と綜合式な考へに統一せられて出て來た訣で、此論は、實行としての力を持ちはじめた、其推進力になつたものだ、と言へようと思ふ。

在滿の八論に對しては「餘言」、眞淵の「國歌論臆說」に加へて、「剩言」を書いたのは、宗武二十八歳から三十歳に到る間である。

宗武の歌集「天降言」^{アマリゴト}は、その成立からして、すべての趣きが、實朝の「金槐集」に似て居る。殊に萬葉調のものと、其以外のものとが混つて居る點の注意は、誰しも向けることであらう。集中第八首目にある「九月二十三日、田安に家作り出で、今日なほ移り住みて——わが宿のかきほの松よ。今日よりは、幾萬代を、もろともに經む」の歌は、詞書きから、享保十五年(十一月十日)

或は十六年の事と察せられる。さすれば十六歳か、せいぐ十七歳の秋である。其後二十數首は、享保以降寛延——三十五六歳までの間の物である。

見るたびに 袖をぞ濡す。いにしへのおもかげもなき 庭のくさむら

あはれなり。霧間に見ゆる山陰の 小田にと落つる 雁の一つら

姿は必しもさうでないが、情調は新古今を得て居る。さうしてこの部類には、萬葉式の表出を見ない。ところが次の四十首は、寛延・寶曆の作物に、古い享保の頃のも交へたものと見える。「君が爲、すなごりせむと漕ぎ行けば」「去年の冬のかしこかりしを思へれば」「洲崎べに漕ぎ出で、見れば……はるけく見ゆも」「萩の花散れり。今日のあらしに」「みことをうけて、弟も吾も……」「……螢はも けだしわが如……」「天の下いや榮ゆらし……」など言ふ萬葉調——今日の馴れた耳からはさ程でもないが、當時は此程度でも、異常な響きを感じたであらうと思はれる。

洲崎べに漕ぎ出で、見れば、安房の山の 雲居なしつゝ はるけく見ゆも

富士の山 見むとし欲りて、山のべに作りし庵に 入り日さす見ゆ

寶曆から、明和八年（宗武歿）に互る二十年間の作物は、其次にある百二十餘首が大體其らしい。

去年は さも思はざりしか。青みます岩間の雪の、清く見ゆかも

春雨は音静けしも。妹が家にい行きかたらひ、この日暮らさむ

櫻花ちり敷く野べのつぼ菫 色うらさえて、摘みなむも惜し

あしびぎの 岩間をしぬぎ湧く水の、落ちたぎち行く風のすゞしさ

琴の緒をさわたる風の ひゞかすに、秋さり來ぬと、今はしるしも

ひむがしに向へる家は、朝明けに 明け行く空を見つゝ 樂しき

あをぐもの 白肩の津は見ざれども、今宵の月に 思ほゆるかも

たまどりの八尋のたり尾 開き立て、めぐる姿は、見れどあかずけり

菰かげに浮む澤鷄 その菰に、とさかの句はえて いつしき

この外に歌からは寧、此等に優れて、單純化の出來たものが相應にある。其等を以て、宗武の萬葉調と見る風はある。が、こゝにはなるべく、内容から、又形式から萬葉風なものを探つて見た。この人の作風を見ると、如何にも古語と言ふものゝ新しい文學に入つて、一つの妥當性を生じて來る道筋が訣る。

むら松のそがひを登る 月讀のなかばにわたる雲さへ、うれし

眞帆ひきてよせ來る船に 月照れり。樂しくぞあらむ。その船びとは

霞わけて 雁歸る見ゆ。行くさきのはるけきもへば、あはれむ。われは

栽多し時は、枯るべく見えし わが庭のしだり柳の 愛たくなりぬ

この類の發想が頗多い。此は必しも萬葉の語脈を其まゝとり入れたものではない。だが、宗武自身は、さう考へたかも知れぬ。又天降言を全體に承認する人々の間にも、さうした萬葉ぶりに對

する錯覺は、あるやうだ。

古語と近代語感との間の空隙に、ある自由な、從來なかつた表現が齎す闊達なものが、人を快がらせるのである。之を全體として萬葉ふりと稱するのは、一考を要する。だが、すべての文藝復興は、さうした感覺の發掘にある。宗武その人が發見せられたのは、此點からであつた。かうした語の一つ又は數個によつて、一首の調子の中心が生じ、又は統一せられて來る時に、在來の陳套無感興の痺れたやうな語句の上に、明朝と高邁なものを受ける。其主調になるものが、——孤立してゐても——萬葉語である時は、まづ萬葉ふりとして許すことが出来る。だが、どこまでも、ある個人又はある時代の、ある世間が擱んだ萬葉調なのである。

宗武について、我々は多くの問題を感じて居る。だがどうしても、まづ考へてかゝらねばならぬのは、どうして萬葉ふりを好んだか、又誰が指導したか、と言ふことにある。さうしてもつと大きな問題は、偶然に似た事實が、古人實朝にある點だ。時代も隔り、位置も若干の高下はあるが、等しく將軍・將軍の子としての作物であると謂ふ點である。此事から、萬葉に對する、後代人の時代を超えての、共通した心持ちがとり出されないものであらうか。

實朝には、萬葉に行く一つの導きとして、前代以來の釋教歌があつた。さう言ふ意味において、宗武には、實朝があつたと言へる。だが、果して實朝の作物を見て、萬葉ふりに這入つたかは問題である。眞淵の實朝推獎が、彼をも萬葉ふりに誘うたと言へぬでもない。が、果して、眞淵侍

仕以前に萬葉愛好心を持ち初めなかつたと言はれようか。國歌八論關係の書類は、時期においては、在滿・眞淵交替のきはい頃の物だから、其によつて明言は出来ない。だが、昨今の眞淵から教はつた影響がすぐに出たとすれば、眞淵の感化がよほど這入つてゐることになる。天降言の作品々々の製作年代が、詳しく訣らないから何とも言へぬが、若い頃の物にも部分的には萬葉模倣があるらしく思はれる。この方面の觀察には、尙、狛、諸成の如き侍臣その他について考へて見ねばならぬ。

近代短歌

根本において、かうした位置に居る人が擇ぶ歌風と、其生活の質とが關係して來る。其に指導者。この三つの要素の叶ふ所に、萬葉風を採ると言ふ事實が出て來るのかも知れぬ。自らにして、世間と違つた古典的な生活氣分、おほどかな調子、其が近代のこましやくれた歌風にあはない。だが唯、習慣として無反省に作つてゐる人々は、其でよい。堂上風の作風でも、優に古典的な氣分を感じる事が出来る。だが現代から見ると堂上風とは違ふ。其當時にしては、堂上風は、寧ろ、世間一般に行はれた作風であつた。其に安んじて居られぬ人は、別なものを考へるであらう。所謂新古今風だと言はれて居るものも、ある部分、堂上風を残してゐるが、其とは大分變つてゐる。古典的で人の多く趣かないもの、と言へば傳へ聞く萬葉の外はない。實朝が萬葉に就いたのも、理由はこゝにありさうだ。其上萬葉の研究機運の濃厚になつて、仙覺萬葉抄のやがて出ようとする時機であつた。其に實朝の選擇する歌風が、追隨者の尠いものにあつたとすれば、萬葉に行く

外はなかつた。宗武との間に五百年の隔りはあるが、外的事情はほど變つて居ない。萬葉が顧みられはじめても、やはり新しい歌風を形づくる程でなく、學問と歌とは別々であつた。併し段々、萬葉から直接に文學語をとり入れる風は、次第に進んで来て居た。世間には、萬葉文學が興らうと言ふ兆を持ちはじめた。此時に識見高く、新様と古雅とを併せ好み、誇り深い貴公子の自由を選択するものは、萬葉と言ふことになるではあるまいか。既に水戸學の影響を受け、國典に對しては、光圀の計畫した萬葉註釋類に目を曝してゐたとすれば、歌が萬葉ぶりに傾いて來る外的理由は知れるであらう。さうして更に、萬葉を詳しく知らうとして居た時、人選に當つたのが、眞淵だと考へるのが、最適切であらう。さうして其後益、萬葉ぶりを發揮して來たもの、と見るべきであらう。

眞淵が、田安家の扶持を受けたのは、延享三年、五十に當る年であり、宗武三十二であつた。天降言の編纂法は、殆捕捉し難いものである。が、堀川太郎百首題の歌百八十首以後の四十餘首は、寶曆・明和に互つてのものと察せられる。其以前のは、二ヶ所にある左註の爲に、判斷出來なくなつてゐる。だが其中、延享元年のものと考へられるのが三首ある。

いそのかみ ふりにし唐の笛竹を吹き立て遊ぶ今宵 たのしも
かくしあれど、去年より欲りしわが心 今宵の月とよもに、はれけり

*

わが君のさかゆくことは、玉松のきのえの根ざし ひろごるが如

後の二首は、稍常識的なもので、調子も自ら低く見えるが、尙、部分としての古調が全體を幾分救うてゐる。第一首はやはり萬葉ぶりの正調である。殊に下句がさうである。かう言ふ風に年代が知れれば、眞淵以前にも、段々此形を示す作物を認めることが出来るのだらうと思ふ。

宗武において、特に注意を惹く歌風は、

霞わけて 雁かへる見ゆ。行く先のはるけき思へば、あはれむ。われは

眞帆ひきてよせ來る舟に 月照れり。樂しくぞあらむ。その舟人は

青雲の 白肩の津は見ざれども、今宵の月に 思ほゆるかも

栽多し時は、枯るべく見えし わが庭のしだり柳の 愛たくなりぬ

此等の歌が示して居る拘泥のないと言ふより、前で扱ふ手を背に廻して動した感じのある發想法が、萬葉ぶりと言へば萬葉ぶり、宗武調と言へば宗武調と言へるものを作つてゐる。さうして此が、小ざかしい姿から逃避しようとする人に、常に一つの道を示してゐるのである。今の萬葉調の歌に、此等の歌に習熟した結果、生み出されたものゝあることを思ふと、今一度近代萬葉の調子論を、考へて見ねばならぬ。

十 蘆庵と景樹と

我朝漢土、萬里を隔て、人情一般なる證少々可レ記レ之

(毛詩衛風伯兮章) 自_二伯之東_一、首如_二飛蓬_一。豈無_二膏沐_一、誰適爲_レ容

(萬葉九) 君なくば何身かざらむ。櫛笥なる玉の小櫛も とらむと思はじ

(采葛章) 彼采_レ葛兮。一日不見、如_二三月_一兮

(萬四) 唯一夜隔てしからに、あらたまの 月かへぬると思ほゆるかも

(鄭樞兮章) 籟兮々々。風其吹_レ女。叔兮、伯兮、倡_レ予、和_レ女

(萬八) 神無月しぐれにあへるもみぢ葉の 吹かば散りなむ。風のまに／＼

(小雅南山有臺章) 南山有_レ臺。北山有_レ萊。樂只君子邦家基。樂只君子萬壽無_レ期

(萬六) 春草は後は枯れ易し。巖なす ときはにいませ。かしこき我が君

(北山章) 陟_二彼北山_一、言采_二其杞_一。偕々士子朝夕從事。王事靡_レ監、憂_二我父母_一

(萬二十) 大君のみこと畏み、いそに觸り 海_ノ之原_ノ渡る。父母をおきて

毛詩も、萬葉もひろき文なれば、より／＼あはせ見るべし。數多あり。我あはせ損じたるあら

ばあはせ直すべし。是はたゞ今わづかに思ひ出づるをかきたるのみなり。(布留の中道)

如何に楽しい引用であるか。滋味の盡きない豊かな心を以てした比較である。殊に『籟兮々々。

風其吹女』を『神無月』の歌に宛てたり、『南山有臺』を『巖なす ときはにいませ』にひき比

べたりした所、學問の眼と、詩の心とが相叶うてゐる自在さが流れてゐる。さうして、漢學を以

て日本を説かうとしてゐるやうな、寧、如何にも、海表の學問の方に達してゐたことと思はれる

小澤蘆庵の詞である。

彼こそは、尠くとも百年遅れて出た隠者だと言ふことが出来る。江戸政治が葬り去つた生活が其自身亡びようとする兆の見え出した時になつて、忽然として出て來た形が、此人に見られる。儒學者は、江戸では早期から官學に登庸せられてゐた。其が段々人頭超過し、異學に進む者が出來、さうした人たちが、市井に落伍して、隠者生活に似た姿をとるやうになつたのは、他の文學隱者よりは、遙かに遅れてゐる。

蘆庵が家を捨てた動機も、幾分、遠く隱者の權輿鴨長明と似通うてゐるのも、偶然の縁を感じさせる。

其蘆庵が、蒲生君平の等持院の尊氏の墓を辱しめた話を聞いて、自らも懺悔をした。先年東山靈山で、長嘯の墓に對して、其武士らしくなかつた振舞を難じ、且、恣に歌を詠んで歌品を下落せしめた事を擧げて、杖を以て打つたと言つた傳へが、果して正しいかどうか、保證の限りではない。だが、長嘯に何らかの關心が、此傳へにすら見えて居るのは、おもしろい。

長嘯を憎んだといふ説明は、馬琴等の誤傳か、曲解かも知れぬ。單に歌風の違ひの上からでは、ありさうでもあり、ありさうでなくも考へられる。何れにしても、隱士風の歌よみとして、長嘯・蘆庵の間に、かうした交渉の傳へられてゐるのは、意味のあることである。

『五つには、たゞごとうた。』

「いつはりのなき世なりせば、いかばかり 人のことは 嬉しからまし」といへるなるべし。

これは、事のとゝのほりたゞしきを言ふなり。此歌のこゝろ更になはず。とめ歌とや言ふべからむ。

「山櫻 あくまで色を見つるかな。花散るべくは風吹かぬよに」

古今集序の歌の六義の第五の解説文である。「いつはりの」の歌以下は、後世の書き入れであるが、蘆庵は、此項全體から、暗示を受けてゐると見てよい。

「布留の中道」に『問云、貫之いふ所のたゞ言うたは、こゝろのとほりをかざりなく、ありのままにつゞけたるものと見ゆ。此體よくば、かの「富士の山 おなじ姿に見ゆるかな。こなたおもても、あなたおもても」「女郎花 色々にこそ 露もおけ。花には黄玉。葉には青玉」此もよろしとせむや。』答云、古人のたゞ言歌と言ふは、心をもとめずして思へる所を詞を飾らずして詠ずるを言ふなり。是は不道理を求めて續けたれば、詞にも優りて、其心あしきなり。』

段々承つてたゞ言のよい事は訣つたが、おもしろいたゞ言も多いが、『あまりにたゞありにておもしろからぬも亦少からず。』一點おもしろさうな心を所謂たゞ言でよんだらどうでせう、との問ひに對して、『答云、……わが思へることを言ひ出づるは、内心より出づ。さるをおもしろかるべき一ふしを言はむと言ふは、人のいまだ詠ぜざる心を求めて詠ぜよ、と言ふ教へにたがへることなし。……今思へる所をたゞ言につゞけならひ、誰聞きて、聞ゆるやうに修練つもりて、後は、

如何なる事も、詞心にまかせて、自在なるべし。』

此本上中共、卷末に、古今序が、歌のよみ方の書き初め。代々の歌人・宗匠其に基いて、多くの歌書を書いた、と言ふ風にあつて、上には更に、私の本も其一つだ。此を見るよりも、古今序を明らめ知つた方がよい、と言ふ風に附けたりがある。古今序の印象が、強く沁みてゐたのだ。此印象を分解して、蘆庵は蘆庵風に解してゐたのが見える。設問の「たゞ言歌は、心のとほりを飾りなく、ありのまゝにつゞけたるものと見ゆ。」とあるのは、即歌の六義の「たゞごと歌……」の註の「事のとゝのほりたゞしきを言ふなり。」に當るのである。心のとほりをが事のとゝのほりに飾りなくがたゞしき云々に大體叶うてゐる。詩の六義から言へば、「雅」に當る所が、たゞごと歌になつてゐるらしいのだが、蘆庵も、漠然とかうした無成心な境涯において自ら成り出でるものがあり、其が「雅」であり、「たゞしいもの」だと言ふ位の感銘を持つて居たのだらう。ともかく古今の用語に極度の權威を感じてゐるのである。こんな風にして、蘆庵自身すら既に誤解せられるのには困つたらうが、主張しとほしたのが、「たゞごとうた」であつた。此が心になつて、香川景樹の「しらべ」の用語例と理論とが出て來たのである。古今集の値うちを今更論じる事もないが、あの集のよさと言ふのは、萬葉集と古今集との過渡期の四季雜歌・四季相聞風なものにあるので、江戸時代のどの作者・評者の心に這入つても、認めてゐる所は、此部分に濃かつたものなのである。だから、其を籠めて古今集全體をよしと考へるやうになる。すると、忽古今の

「今」、即現代作家——古今編纂時代から遠くない時期——のものが、古今の中心になつてゐる所から、其もよくなつて感じられて来る訣である。何と謂つても、古今調盛行の時代は長かつた。新古今を唱導し出したのも、やつと百年になるかならずであり、萬葉集は更に新しく、五十年になるかならない位であつた。まだ古今集の歴史が重く意味深く、歌人の心を疑はせなかつた。かうして、歌道の經典のやうに考へられてゐた以上、其中の一首々々は、優劣に繋らず、古今集の歴史の陰を曳いてゐた。一首とり出して味ふにも、一人をひき放して考へるにも、皆古今集中の物として背景を負うてゐた。だから今日になつて見ると、どうして此がと思はれる歌でも、優れたものとしての調和の中に這入つたものとして、一つとり出せば、やはり相當な値打ちを伴うて出て来る。つまり鑑賞法が特殊な條件を持つてゐた訣である。かう言ふ時代には、如何な優れた作の經驗を持つた批評家でも、さうした用意せられた鑑賞法にまづ没してしまふ。だから忠岑・貫之は勿論友則以下の歌人の作でも、自らよく味うて来るのである。かうある上は、古今集は愈、説明と、やゝ不完全な理論に護られた優れた文學書となつて來ずには居ない。蘆庵の如きも、やはり古今の中から、自分の力でよいと感じたものを、又再おのが作物の上にとり入れて來ると言ふ風になつて來る。蘆庵が冷泉家の門流だからと言ふばかりではない。出來るだけ虚心になることを努めても、彼の心に生滅するものは、彼の和漢書の造詣である。彼を凡俗にも邪道にも引き込まなかつたのは、此古典文學の力だと思ふ。だから蘆庵の作物に出て

來るものは、彼以前の古今を祖述する者の歌風にはないものであつた。彼以前の古今集風の歌が既に知識風なものになつて居た。彼は拘泥を救ふものとして、多作の方針をとつて居た。蘆庵の後に起る桂園風の歌は、實は蘆庵自身によつて、凡調べ出されて居たものであつた。

○照る月のかげにて見れば、山櫻 枝うごくなり。今か散るらむ

◇鶯の木づたふ枝は、見えねども、聲ぞ聞ゆる。夜は明けぬらし

野の宮の檜の下道 今日來れば、古葉とよもに 散る櫻かな

ちゝこ草 はゝこ草生ふる野べに來て、昔戀しく思ひけるかな

しらかしの瑞枝うごかす朝風に、きのふの春の夢はさめにき

ほととぎすしばゝ鳴きし明け方の 山かき曇り、小雨降り來ぬ

とりはてぬ澤田の早苗 はるゝと末こそ見ゆれ。水の白波

◇さみだれの雲吹きすさぶ朝風に、桑の實おつる 小野原の里

♪朝づく日さしもさだめぬ 大比叡の雲母の坂に、時雨ふる 見ゆ

刈りあげし畠の大麥 こきたれて降るさみだれに 干しやわぶらむ

◇なびくだにすゞしきものを 夏川のたま藻を見れば、花咲きにけり

うたゝ寝に うちながむれば、蘆垣のしだり柳に 月はかゝりぬ

○青海の 太秦寺に來て見れば、身もなげつべき花のかげかな

蝴蝶だにまだねむれる 朝かげの花を 起き出で、ひとりこそ見れ
、わぎも子が額髪ゆふ 元結の 濃紫なる 藤なみの花

夕昏れにけり。早苗とるしづが小笠原 夕日のかげも さゝずなるまで

家にして 今日ほ謡へる聲すなり。門田の早苗栽多みてにけむ

いかに寝む。麻で小衾うちかづく煽ちの風も 寒きこの夜を

墨染のゆふべの山をながむれば、松の立てるも さびしかりけり

此等の歌の中の多くは、此でも景樹のだらうかと思ふ人があらうと思ふ。其だけよいものに行き逢つて居り、又正しく其を捉へてもゐる。

「桂園一枝」及び「拾遺」の中で「事につき時にふれたる」の部ばかりから、まづ引いて見たのである。此部が明らかに、彼の主張を見せた特殊な部類であり、又其作物の中で、最尤なものが多いと言ふことが出来る。四季・戀・雑などの外に、此部を立てたことは、とにかく彼が歌に潜めた思ひの深さを示してゐる。一つくを見れば、他の部類に入れて、ちつともさし障りのありさうに思へぬものが多い。だが、態度として見る時、彼の論からはどうしても、かうした分類に入らぬ部類を欲するのは、當然でもあり、之を考へたのは、さすがと謂へる。雑歌なる部類が既にある固定したものになつて、自由なものを容れることが、出来なくなつて居たのである。彼の「しらべ」の主張を貫かうとすれば、どうしても、こゝに出るのである。題によるのは、時々

便宜を頼むので、自らなるしらべはゆくりなく出る即興の歌の上にこそ、極めて自然に出て来る筈である。恐らく「事につき時にふれたる」と言ふ部は、其一つくの歌の創作動機から立てられたものであらう。だから、後で題を附ければ、何とか他の部類に納まるものばかりであるが、かうした事を行つた點に、景樹の文學者としての純粋性と、理論性があるのである。

其だけに、歌も、彼らしい型から出たものが多いし、もつとよい事は、梅月堂の遺産らしい二條風とも謂はゞ言はれる刺戟のない、弛緩した散漫な歌は多いのである。だが外の部になると、さうは行かない。あまりにしらべに執した結果、形式要素をすべてしらべに置いて見る弊が多くなり過ぎてゐた。しらべ以外に、之に對立する程の價値を占めるすがたに關心を逸してゐるやうな傾きが著しく見える。すがたと言ふのは、内容の聯想が様式の上に加つて、而も形式要素のやうに混和した情調である。事實、語句の意義の連環によつて、感情が動されることなく、單に音の連續や、音の價や、音脚・休止などばかりで、我々の言語情調と言ふものは生じない。音感覺は先入要素ではあるが、我々の心理現象は、さう微細な區畫を、劃然と受納することは出来ないことを思はねばならぬ。音調ばかりと、意義ばかりとが、完全に判れて我々に享受せられる前に、この二つの相交つたものが、まづ感得せられるのが、常である。

「しらべ」を出すことに専念して、すがたを作ること忘れて居た爲に、景樹の歌は、無内容なものが多かつた。又無内容に近い類型を、出来るだけ刺戟を避けた閑かでもあるが、平板なしら

べに載せて出すことが極めて多く、又強ひても其方面に努めて居たのである。彼においては、喜怒も哀樂も、皆ひとしく柔軟で閑雅で、さうした調子は常に啓蒙式なものであつた。

海原の沖の 高くも見ゆるかな。幾重つもりし水にか あるらむ

世の中の花のあそびに、くたびれて、ひと寝入りせる 君が手枕 (涅槃會)

たまほこの道ゆく人の うちかづく袖に一むら 降る霰かな

ふる里のしのゝ荒垣 野分して、葎のとぢめ ほころびにけり

春の夜を おぼろ月夜といふことは、霞の立てる名にこそありけれ

かげろふの もゆる夏野の澤水に 夜たつ影は、螢なりけり

うつせみの 人目人言しげき間を しばしと言ひて 中絶えにけり

今日ぞ知る。ふして仰げば、位山いよゝ高き君が恵みを (從五位宣下蒙りし時よめる)

かう言ふ例は、いづれの部を引いても、直に引用の出来るほどである。其ほど桂園一枝及び拾遺は、殆一つ調子の歌ばかりである。誰とてさうでないとは言へぬが、彼だけの人に、どうして此用意が缺けてゐたかと思はれるほどである。結局、彼は感情の種類によつて、心理昂揚の度の違ふことは考へず、又其に伴ふ生活律の變化などより外に、常に不變な調子があると空想してゐたのである。さうして其が、彼の謂ふみやびでもあつた。文學は優美でなければならぬと言ふことになる。其はさう當然思はれる筈で、而も此ほど亦、大きな過ちもないのである。かうしたみや

びた調べを出す爲には、自ら題材にも選擇が加つて来る。其だけに取材の範圍が狭まると共に、之をひろげようとして無駄を重ねた處も見える。詞からみやびのしらべさへ出れば、俗事も歌に入れることが出来るとし、又俗語も全體のしらべの一つとして乗つて来れば、優美になり得ると考へてゐたやうである。だが其は多く、一時彼がさう感じてよみ入れたゞけで、今日においても、其語だけは觸りのぬめらかで、變に世馴れたやうなものを感じさせてゐる。さうした口語發想などと言つたところで、結局歌詞の持つ情調との妥協によつて、調和を感じるに過ぎないのである。俗語自身が、其職能を十分發揮する訣ではないのである。景樹においては、單なる試みとして過ぎ去つた。

春日野に若菜をつめば、我ながら 昔の人のこゝちこそすれ (春)

橘のなつかしき香に にほふ夜は、わが袖ならぬこゝちこそすれ (夏)

雲よりさして來にける もみぢ葉の色は、夕日のこゝちこそすれ (秋)

梅の花散るにまがひて降る時は、雪さへにほふこゝちこそすれ (冬)

たまだれの小簾のすき間に 見ずもあらず たゞ俤のこゝちこそすれ (戀)

この引用は、少々意地のわるさを覺える。唯、彼の感動の行き互る限界が、可なり狭い間を動いてゐたことが知れるであらうと思ふので、もつと適切な例も措いて、わざとこんなものを出して見る。景樹の胸に來たものは必、詩の感銘であらうが、彼には、口語發想を主張するだけのものが

内在して、「こゝちこそすれ」と謂つた常識の説明に入れてしまふことになつたのである。千萬無量とも謂ふべきせつない感銘をすら、さうするのである。殊に春夏の二首の如きは、よくも、かうあきらめたやうな、ぶつきらぼうな發想、仄かに温めたやうな調子で満足出來たものと思ふ。この單調な見えるしらが、彼にとつては大きな誘惑でもあつたのであらうが。自分の欲するしらべに入れる爲に、題材自身が持ち、又言語相互の間に生ずるものは犠牲にしても、彼の好むたゞごと式であり、簡明でもある所の——さうして、多量に大衆啓蒙の意義に立つたしらべにはめようとしたのである。春日野の歌は、物語の世界から現實の世界に蹴落されてゐる。「若菜をつめば、われながら……」。かうした物言ひは、彼の欲するしらべの弱點を暴け出してゐる氣の毒である。橘の歌でも、又しても、「わが袖ならぬ……」と常識表現に陥ちてしまつてゐる。其だけにしらべは、しらべ自身によつて、讀者の胸に内容を理會させる安全を十分に發揮してゐる。が、此しらべは歌自身を破つてゐることが考へられないであつた。歌の生活と調子とが背反になつてゐるのである。「雲のより」は、しらべを以て、無理納得を強ひてゐる遺憾がある。不自然な調子で、自然らしい擬裝を作つて簡明に流してしまつた訣だ。彼のよい處をあげた先人は多くある。さうして其等は、彼の本たうのよい處を外して、缺點を長所と見違へてゐることが多かつた。勿論其中には、よい處を考へて居るものもある。私の論は、先人の議論の考へ直された今日において、尙景樹の永く生きる所を見出さうと努めてゐることに

もならう。

短歌は最近まで、實に古典風な文學であつた。だから一般文學とは違つた所があつた。勿論今も多くは、其傾きを深く持つてゐる。さうして其が、今の處ではまだ、正しいやうである。新しい感情・思想や、境遇・生活やは、極めて徐々に這入つて來た。さうした後入要素が、擬古風な短歌情調に妥協すること、とり込まれ／＼して來た。さうして、やつと歌の本質を破るものでない事を見出して、今度は其が舊來の短歌の内容にとつて替らうとしてゐる。此がし遂げられることか、どうかは、まだ、疑問である。だから、近代短歌では、どうしても古典風であることが、短歌の生命の繋る所であつた。古典風といふのは、言ひ替へれば優美——みやびだと言ふことになる。短歌において古典感を起すのが、みやびと言ふ精神だつたのだ。此古典感を調節しようとしたのが、眞淵であつた。其以前からずつと古典に上の限界をつけて、古今以前に溯らうとしなかつたのが、短歌の世界のみやびであつた。其に更に萬葉を加へようとしたのが、從來の歌に馴れた人々及び其傳統に居る人々から、排斥せられたのである。さうして、本質式短歌を古今集に認めてゐたのが、蘆庵・景樹を筆頭とする京都の歌よみ等であつた。此運動には、地方文學と謂つた色彩もあつた。萬葉ぶりを輕視しようとする傾向は、實は傳統短く、優美の根ざし浅い江戸の地に置いて考へたからであつた。王城を負ふ所の誇りは、京人のすべてに行き互つた感情であつた。地方出の歌人ながら、京に住み、京の人事自然に親しんで居ることが、さうした感

情を導いたのだ。

其江戸の古學者とても、散文精神から見れば、平安朝のものであつて、其が和歌にも共通してゐるのが事實であることから見れば、短歌も長歌も實は、純粹な萬葉精神に立つとは言へなかつた。理論ばかりが奔つて高唱した。其が作物を大體、萬葉ぶりなる如く感じさせたのである。

古典の標準を平安朝に置くものは、古今集を以てみやびの典型とした。唯、萬葉まで延長し、其に古今以後までも互つて、優れた精神を見出さうとしなかつたのが、缺點であつた。みやびでないものは、如何に眞實でも問題でなかつた。此は古典文學である以上、短歌にとつて誤りではない。此短歌の上に、種々の感情や、生活を求めようとするのは、却て迷妄である。

だから、景樹が無條件にしらべとみやびとを並行するもの、ときめてかゝつて居たのも、意義がある。古典調子には、自ら古典精神が寓つて来るものとしてゐる訣である。謂はゞ語句・詞章といふよりも、其が醸し出す氣流の中に、古典精神を迎へ得るもの、と考へてゐたことと思ふ。此點、景樹門流多くは、皆さやう信じて、成心なき時に浮ぶ歌を重んじることになつて來た。唯、かう言ふ心構へは、詩として純粹なものを生むことが出来るけれど、天來の妙音を待つやうなことになる。作意企圖の露出せぬ柔軟、閑雅と謂つた詩の美德を備へた作品に逢著することはあるに違ひない。だが常にと謂つては、あり得る態度でない。其爲に、景樹自身すら、彼妙音を捉へることが、極めて稀であつた。彼は理論の雄ではあつた。だが其爲に、自らの心にある構へを生

じさせた。作意企圖を却けて、自然なものを獲ようとした彼にとつては、反對な結果が來たのである。

彼には、しらべの價值についての検査が足らなかつた。しらべがすべてを詩化するものと思ひ過ぎた。作物の上に出て來るのがしらべで、作物以前には情調であることを思はなかつたのであらう。しらべによつて、又すべてが解決つくものと考へた。だから、内容をなすべき感情・思想・生活などは多く問題にならなかつた。かうした立ち場からは、出来るだけ單純・平易なものがよかつた。最單純で平易なものは、現代生活の周知せられた斷片を持つ氣分である。之を文學化することは、野心を唆る所が多い。景樹は屢、易々と之を捉へた。當時の世態人情を小さな一塊として、舌の上に上す風に、しらべに載せた。彼は得意であつた。だが、しらべによつて彼が試みた手品に過ぎなかつた。さうして手品は、彼自身の目まで昏ましてしまつた。其多くは、唯古典語で言つてよい所を、やゝ雅言もどきの口語まじりで發音した、と言つた効果を表したに過ぎないものが多かつたと謂へる。其が如何に調和したと見えるか。調和したと見ると同時に、歌全體が低調に墮ちてしまつてゐる。併し景樹の心構へとしては、極めて自然に――又自然らしいしらべに乗つて出たものだから、品も破らず、歌の本質にも叶ふと見え、更に歌に新境地が開けた、とも思はれたのである。

だが、此は古典式作家が常にする遊戯だ。而も遊戯と言ふことが忘れられ勝ちなものである。彼

は眞淵の如く雄渾を念願としなかつた。又理想だけでも高邁に持つことを忘れて居た。其と、古今よりから選擇したしらべとが相叶つてつくり上げた歌のすがたは、しなやかであつた。飽くまでも柔らかであり、弾力も備つて居た。併し高い精神に撲たれるやうな所は出て來ない。あまりに、世馴れた物語り上手と言つた歌口であつた。くろ、うとの持つ滑らかさと、頼み難さがつき纏うてゐる。古典表現と調和する近代要素も、其が古代精神に通ずるものが見出された時にこそ、其詩の内容となることが出来る。さうでない限りは、歌には、さもしいらべをうたふに過ぎなくなる。景樹の歌には、此點において遺憾乍ら、小唄調に陥つたものが、なか／＼にある。室町から江戸までの小唄が持つ味は、古代表現と近代内容との矛盾から來るのであつた。とは言へ、文學者としての景樹は、やはり小品作家としての素質に優れた人であつた。かう言ふ意味から、歌において最纏りの見えたのは、彼が第一である。歌人以外に生れなかつた人を江戸時代から求めるなら、私は彼を推す外はない。短歌作家として實に適切な能と智とを備へてゐたのも彼である。其は彼も自覺し、彼の追隨者も自ら感じて居たと思はれる所は、景樹の持つ抒情質である。敘景詩を作る間にも現れて、作物の偏向を見せる感情要素の豊かにあることである。必しも抒情詩人と謂つた意義ではない。此あつて、彼の歌は如何にも温かく、懐しい感じを含んで來たか知れない。彼の歌には、彼さへ意識しなかつたと思はれる、おぼろ／＼の匂ひが靡いてゐる。若し景樹が世間の人に顔を見せることを厭うて、其性格や癖を人に示さなかつたら、どんなに懐

しい人と想像せられたかも知れない。歌はさうした空想を呼びさうな作風である。

譬へば、稍遅れるが、加納諸平一門の歌風である。熊代繁里・伴林光平・千家尊孫・小谷古蔭等の歌を見ると、師の作風と指導の痕とを示す如く、如何にも描寫の行き届き、又匂ひよき言語を連ねてゐる。寫生の歌とも見るべきものが多い。だが、靡きの残るものがない。景樹の歌を見ると、其がある。唯、しらべを頼み過ぎた彼は、内容を輕視し、又内容の排列を輕視した。其爲に靡くものが中斷して、讀者の氣分の迷ふやうなものが多く残つた。其點では諸平門流の人の行き届き過ぎた歌と、一つになつてしまつてゐる。彼の作として數へられてゐるものは、多くさう言ふ種類である。

明けてこそ 見むと思ひし宮崎の 波間に霞む 松の群だち

筏おろす清瀧川のたきつ瀬に、散りて流るゝ山吹の花

めせやめせ。夕げのつま木はやくめせ。かへるさ遠し。大原の里

いづくより駒うち入れむ。佐保川のさゞれにうつる白菊の花

照る月の影の散り來るこゝちして、夜行く袖にたまる雪かな

富士の嶺を 木の間このまにかへり見て、松のかげ踏む 浮島が原

此等にある飽き／＼した氣分を感じるのは、耳に熟し過ぎたからではない。歌自身が持つ微温的な風流三昧と、大衆の理會點を知り過ぎてゐる所にあるのである。

部分には多少慊らぬ所があり、又は全體としては同感出來ないでも、一部に優れた詩を持ったもの、或は景樹獨得の氣魄を持ったものを擧げて見ようと思ふ。

春の夜のおぼろ月夜に寢覺めして、堪へずや。雁の思ひ立つらむ
常見れば、くぬぎまじりの柞原。春は櫻の林なりけり

傳へ聞く遠山びとの洞の中も、かくこそあるらし。今日の日長さ

歸り來て、解けども 解けずなりにけり。結びおきつる 青柳の絲

大空のおなじところに 霞みつゝ、行くとも見えぬ 春の日の影

春雨の日ごろ降りつる 小山田の苗代水は、今日も濁れり。

大空の縁になびく白雲の まがはぬ夏に なりにけるかな

夏來れば 世の中狭くなり果てゝ、清水のほかにも すみどころなし
一とせを待たむ別れにおとろへて、花のかつらも、萎む今朝かな (七夕後朝)

わが宿の 薄穂に出でゝ、むらさめの降る日寒くも なれる秋かな

雨に夙くなりぬるものを 鈴鹿山 霧のふるのと思ひけるかな

松かげに立ちかくれても 見つるかな。あまりに 月の隈しなければ

山松の木の間に見ゆる 年々の紅葉も、色はかはらざりけり

山川の岸をひたして行く水に、ぬるでの紅葉 散らぬ日ぞなき

埋み火のほふあたりは のどかにて、昔語りも 春めきにけり

埋み火のほかに 心はなけれども、向へば見ゆる 白鳥の山

白雪の降る大空をながめつゝ かくて 今年も暮れなむが 憂さ

雪折れの聲さへ立てぬ 嫋竹の よに伏したりと 知る人もなし (忍逢戀)

夢なるか。我が手枕に 我ふれて、人のと思ひし 鬘の黒髪

かぎりなくなしきものは、ともし火の消えての後の 寢覺めなりけり

つく／＼と もの思ふ老いの曉に、寢覺め遅れし 鳥の聲かな

暮るゝより 松に吹き立つ我が山の嵐の末を 誰か聞くらむ

我が庵は、あまりに山の奥なれば、鳥の聲さへ 珍しきかな

今日も早 申のさがりになりぬらむ。とぐらにのぼる 鶏の聲

△つゞら籠をあけてやりつる放ち鳥。わが逃れしと 思はざらなむ

草枕 旅の空こそ かなしけれ。野にも 山にも 知る人はなし

はかなくて 木にも 草にも言はれぬは、心の底の思ひなりけり

朝戸出の袂は いまだ寒けれど、野は うち霞み、鶯ぞ鳴く

山雀のつゞく岡べの うつぼ木の枝も ひと枝 春めきにけり

露だにも いまだならはぬ今年生ひの まがきの竹に、五月雨ぞふる

桐の花おつる五月の雨アメごもり 一葉散るだに さびしきものを
山の端スバルに昇ノボりかゞやく みな月のこの夜は、いたく更けにけらしな

大體此ほど擧げれば、もう恐らく桂園一枝及び拾遺には、物がなくなつた思ひがする。歌柄は、拘泥せぬやう／＼と努めて居たらしく、一見柔軟に見える。が、實際は、全體を通じて、重くろしく感じる。どうも本格式に進まうと言ふ意思が、煩ひをする。珍しく態度に災せられたものと言へる。だが、理論に生活味を帯びしめたのは、昔においては、景樹一人位のものであらう。ともかくにも、彼は蘆庵あつての彼であつた。蘆庵の暗示を具體化した彼でもあつた。

十一 加納諸平

露霜ジモの秋さり衣イロモ吹きかへす風をとさじみ、蘆垣アシガキのまがきに立ちて、もみぢ葉ハのす
ぎにし人を うつら／＼ 戀ひつゝをれば、蓼アサギの穂に 夕日くだちて、雁鳴きわ
たる

中村良臣が身まかりける年の九月の末つかた、秋哀傷と
いへる心をよみて、と其子良弼が、こひおこせければ

短歌史の此部分を綴つてゐる昭和十三年の詩壇では、一方に古典的な長歌の存在が、尙未、認められてゐる。さうして、其作家らの標準から見れば、此作物の値うちは、相應に高くつもらねば

ならぬ筈である。稍、景物の配合に古風な處こそあれ、其引き緊つた製作力、感動の適切な淘汰性、古びない色氣、此があの登巴嶽——今の大臺个原山——時作歌を以て、世間にもて囃されて、無感激な作家の一人と見られて居るかも知れぬ加納諸平の作物なのである。登巴嶽の歌にも、勿論盛んな製作力や、部分的な緊迫感は見られるが、世の紹介者の言ふのは、そんな點ではない。萬葉風な長歌作家としてある。萬葉風の作家だと言ふ考へ方が、諸平の短歌の方にも及ぼされる爲、唯、其だけをめぐにして、「柿園詠草」及び「柿園詠草拾遺」にはひつて來た人々は、大きな失望をさせられずには居なかつた。其が、諸平の歌の値うちぎめの上に、大きにはたらいて居る。無造作な昔風の人は、加納諸平を相應な作者として位づけするが、其鑑賞する所を見ると、此が亦、諸平の爲の大きな煩ひになつてゐることが知れる。其等の人のあげる引用が亦、大凡諸平の姿を傳へきれぬものなのであるから。

諸平は、純然たる萬葉ぶりの作家と言ふべきではない。江戸末期に若干出て來た萬葉ぶりの歌よみは、多く萬葉以外を知らなかつたから、と言ふことが出来る。だから勿論、同時代の歌人は、さう謂つた見方から、萬葉狂ひの歌人として輕視して居た。此見くびり方が學問の上においては正しいかも知れぬが、作物其物の批評としては、亦的のはづれて居ることが多かつた。學力が薄いから、萬葉だけでとり繕つて居たからと謂つて、作物が必しもよくないものばかりはなかつた。だがさう謂ふ、萬葉集に對する一知半解から出た萬葉ぶりよみが、相應にあつたことも事實であ

る。

新派短歌が盛んになり、萬葉派が勢力を獲て後も、やはり誰某は萬葉ぶりだから、氣魄があると謂つた見方が行はれた。其は、磧の石の中から珍しい珠を發見したやうな喜びが、さうさせたのだが、やはり正しい見方ではなかつた。今日においても、改めねばならぬ謬論が澤山我々に残されてゐるのである。

諸平は、歌においてあらゆる知識を持たねばならぬと言ふ、王朝以來の歌學者としての正しい立ち場を守つて來た。其が又災ひとなつて、彼の歌を無用の技工、感覺を蔑視した知識歌に墮ちさせた。この憾みが深過ぎるほど、彼の作物に出てゐる。尤、此點では、江戸の相當な歌人に、さうでないものは尠い。其を免れたのは、傳統の乏しい、學問の貧困を萬葉ぶりで糊塗した人々だけ、と謂つてもよい程であつたのだから。つまり江戸までの傳統正しい歌人の立ち場は、さうだつたのだから、文學に縁遠い立ち場を守り乍ら、文學を爲さうとして居たものと言ふことが出来る。だから、諸平などについても、さうした學問に囚はれた癖を、一應は引き去つて、文學の形に直して見ると、可なり純然たる文學者素質が出て來、作物においても、其氣稟が窺はれるのであると思ふ。

姫島の松の夕日に 雁鳴きて、わが子戀しき秋風ぞ 吹く（海邊夕）

「海邊の夕」と言ふ與へられた題を、作者は防人の生活に延長して來たのである。此姫島を難波

の姫島だと考へてゐる人も相應にあるやうだ。豊後の姫島が防人の一屯所であつたことに氣づかないのは、讀者の方が、諸平よりも其點だけでは物識らずであり、又忠實でもない訣である。さうして見ると、なぜ我が子戀しきか、と訣る。唯、聊か戯曲式な興味を持たせる嫌ひがないでもない。つまり、作者同等或は以上の學者に讀ませるつもりが、昔から歌にはあつた。其が、作物の普遍性を缺く訣にもなるのであつた。だが、諸平の此歌の場合、必しも作者ばかりが責任を負はねばならぬ程、文學から離れた知識の遊戯には陥つて居ない。作物自身にも、相應の用意は積まれてゐる。「わが子戀しき……」と謂つたとて、諸平自身の子を思ふ或は、其に似た境遇にのみ寄せて考へるのは、地力の薄い鑑賞者である。又、姫島と雁を配してゐるのだから、記・紀に現れた、仁徳天皇と武内宿禰の難波姫島の雁問答の詠を思ひ浮べて、難波だと主張するのでは、却て昔の作家の卒業した固陋癖に更めて陥ることになる。諸平のことだから、姫島と雁——雁の卵と我が子——かうした連環は心に持つてゐるかも知れぬが、其は一つの沈めた技工で、彼こそさう言ふ點で、新しいに似た試みをした第一人と言ふことが出来るのである。無用に語を据ゑぬ、何かの點で緊密性を持たせる——かうした大切な用意を、昔の歌人は、技工の一つとして用ゐたから氣の毒だつた。姫島と言つたから、當然聯想せられるべき雁を持ち出したのは、度を越さない限りにおいては、わるい事ではない。此が正しい方法なら、過剰にならぬ限りよい事と言はれる筈なのに、歌には其を必しもよいと言ひきれない、病的な形式上の匂ひを、長く貯へて來たので

ある。

浪風のうちみだりたる我が髪を 誰か かゝげむ。くしもとの浦

熊野旅行をくり返したをりの心覚えの作物の一つで、名高い歌である。東牟婁郡串本浦での作か、追憶かであらう。旅愁を歌つたもので、誰の胸にも一應は来る筈の作である。さうして殊に下の句がねばりついて来るやうな情を湛へて居る。但、串本の地名から櫛を聯想したのであるが、古代の歌になら許して来てゐる事も、現実感を持たねばならぬ近代の物だから、ちよつと胸にこじれが来る。之を看逃すのが、舊派と謂はれる人たちである。だが、私はかゝげむなる櫛に適切過ぎた縁語の感じの深い語を改めれば、このまゝでよいと思ふ。歌にはさうした古典式病所が亦長所ともなるのだから。とり見むとすれば、色氣も出て来るし、縫りよるやうな寂しい心持ちも、出て来るのである。さうして、櫛とも縁がきれないで、又即き過ぎずにも行く。今一つは、うちみだりたるである。熊野の荒灘を越え、深山を涉つたのだから、浪や風に、髪も鬢もむちやくちやになつてゐるのである。だがなぜ「吹きみだりたる」と言はなかつたらう。さうすれば、浪風が一つの語になつて、海を渡るのに、汐風に荒されたことになる。其點を用心して、うちみだり、柔軟な感じを出し、浪と風とを分けたのであらう。だがさうした細い區別を立てゝ見たところで何にならう。結局心を打つものは、旅にやつれた髪形を、世話やく妹もないことである。私は「浪風の吹きみだりたる」と、はつきりかたづけける方が、よいと思ふのである。作物を嬌め

て見ることは、わるいとする人が必あるだらう。だが、古典式作品の形式約束から、必要以上――と言ふより有害なまでに、表現様式が拘束せられてゐる。さう言ふ約束に乗つて、其が又馴れから快く感じられる作家には、思はぬほど、効果を犠牲にすることがある。其を救ふのが、ほんたうである。元々何も作り直さうと言ふのではない。作者は、かう考へて居た筈が、かう曲つて現れてゐるのだ、と言ふまでである。かうした試みが行はれなければ、古典式作物は、正しい作者の意圖を顯さないでしまふだらう。作者の意圖と、時代の表現法との交渉について見るのも、鑑賞者としては、大切な用意である。

あす伐らむ舟木が中に、もみぢ葉のこがれて見ゆる 足柄の山 (名所紅葉)

紅葉の、末になつてちり／＼に捲き焦げて、黒みを持つて来る頃の色をこがると言ふのである。其へ、煩悶すると言ふ人間式の心持ちを重ねて表したので。歌における懸け詞は、かう言ふ風に融合しない混合状態のまゝで効果を示す。さうして其が假象として、一つになつた感じを持たせる。紅葉の焦げて見えるのを、まるで明日伐られることを思ひ煩つて居るやうに詞だけでとりなす。讀むと、煩悶が色に現れて焦れるやうに感じる。歌特有の表現であり、不安定なものをも残す。今の人こそ其がどうしたのだ、と言ふ位に閑却する、やはり同情を木に寄與して、木がさう思つて居るらしく感じて居るのであつた。懸け詞の弊を除いて考へると、此人のよい素質を見せ居る。唯、歌の表現法における固有の不安定性を利用した處に弱みがある。舟木を樵り出すか

ら足柄を出したが、歌の自由が此地名で堰き止められる。「明日伐らむ……」は、明治の新派の興らうとした間際まではたらきかけて居た新古典派は、——直文・義象等の一派——こゝまでも達して居ない。だがやはり計畫が計畫として、露骨に見えず。併し、趣向としてそこまでつゝこんで来なければ、興味をひくことの出来なかつたのも事實だらう。恐らく、諸平などの知識から言ふと、此歌の今一つの基礎は、「奥山に立てらましかば、渚漕ぐ舟木も今やもみぢしなまし(惠慶)」を持つてゐて、其を逆表現した所に「學者歌よみ」らしい處があるのだらうと思ふ。けれども、其は、此歌の鑑賞の碍ガイにこそなれ、得にはならぬ。かう言ふ詩人としての氣稟を十分持つて、而も、最癖の多かつた文壇時代に出て來たのだから、そこに素質と環境との交錯が、複雑になつて來てゐる。而も時代の爲に隠れきらぬよさを示して居るのに、氣づかない人が多い。又彼を讀する人も、此點に觸れないのはよくないと思ふ。

和歌山藩醫加納伊竹の養子であつた。杏仙又は杏仙郎と言ふのは、家職から出た稱である。國學者の中には、長袖殊に醫師が相當に多かつた。だが、其學統の上から極めて密な關係にあつた本居宣長が松坂の町醫であつた點など、彼にとつては、深い因縁を自覺せず居られなかつたであらう。加納氏を相續するやうになつたのは、彼の實父夏目甕麻呂の死の爲であつた。甕麻呂は、宣長門であつたが、當時の歌人・誹諧師がさうした通り、郷國遠州白須賀を出て諸國を游歴し、旅の間に生活して居た。文政五年、中村良臣の住地攝津伊丹に滞在して、昆陽コウヤ池の月見に出た

夜、月を掬ると言つて、酔うたまゝ池に入つて死んだ。此事、幾分杜甫の溺死と似てゐる。旅中常に從うて居たのは、神童の譽れ高く、兄瓶エカマと既に稱してゐた彼であつた。此年、十五になつたばかりである。思ふに、良臣等の幹旋によつて、其師であり、又甕麻呂には同門であつた和歌山の本居大平オホヒラの手で、加納氏に入籍したものと思はれる。其だけに、長男である彼を旅先のみ、而も父の死と共に、他家へ遣はした夏目家の落寞たる有様が、考へられるやうである。其によつて、甕麻呂の旅が、どんな意味であつたかと思はれるのである。だから當然、大平を師と仰ぐことになつたのである。諸平の名も、大平に關係のあるものであらう。

文政九年の春夏かけて、遠江にまかりける時、道にてよめる歌の中に

春霞 立ち出づるからに、里の犬の夜聲は絶えて、雉キヌなくなり

旅衣わゝくばかりに 春たけて、茨クサが花ぞ、香カに匂ふなる

(三首の中一首略す)

諸平二十の年である。其去々年加納家に入つて居る。だから、一年置いて初めて歸省したものと見える。數へ年二十歳の青年の歌である。後年の手入れは固より考へねばならぬが、前の歌には多少の實感が窺へるし、後の作には、若い感傷がみづ／＼しく出てゐる。旅衣がわゝける程になつたと感じてゐるのは、多少誇張を含んでゐるが、詩としては、其が實感

の程度に達してゐる。つまり妥當性を持つて居る訣だ。旅の日數の重つたと言ふ、季節の倦モソッい感じと、海道ばたの野茨の花の色及び香。此歌、作り物ではないのである。美しさは固よりある。だが、此程度の美しさを否定するだけ、他の文學も變化はしてゐない。唯、美しさにくるみこまれた實感の鈍りが惜しまれるのである。だが當時の文學は、現實感を出すものを賤しいとした。實感を却けなくなつたのは、明治文學でも、自然主義以後であつた。誹諧においてこそ、當時も實感モソッは認めたり、否認せられたりしてゐる時代だつたのである。

諸平は、技工萬能主義のやうに見える。如何にも楽しんで、其をしてゐるやうだが、實際はさうした馴れを離れた述懐・懷舊などいふ種類のものに、優れたのが多い。

わが身こそ よそにも移れ。萩が花 もとの垣ねに、やつれてぞ咲く

本生父翁の靈祭に、寄萩懷舊といふ題にて、人々と共によめる

一二句のくどき過ぎることが、却てたゞごとらしく歌を感じさせるが、其一二句は生きてゐる。此も物語歌らしく、響く點はないでもない。抒情の輪郭を述べると、敘事になるのである。

諸平は、歌集の中に屢、萩の歌を讀んでゐる。さう言ふものの中には、互に支持しあふと言ふよりも、ある一首の値うちの爲に、他が引き立てられる——即、其によつてある深みが附加せられて来る。——と謂つたものがある。此は柿園詠草に限つたことではなく、連作なるものゝ値うちもある點までは、さうした言はず語らずの約束が響いて来るのではなからうか。

ふる里のなつめがもとの 萩が花 こぼれにけらし。秋風のふく

(縣居翁靈社に獻つた歌の中)

此歌はどうも名高過ぎて鑑賞に警戒を要するやうな氣がする。——さう言ふことはあるもので、又さうしなくてはならないことが度々である。が、歌自身は、やはり製作當時、油のゝつた勢ひにかゝつて多く詠んだ爲か——夏目氏を利かしたことを念頭にかけて、よく感じられる。——と言ふのは、古人——作者——の満悦を無視することになるが、其はほんの大したことでない技工なのだから。棗の木のあるところから出た夏目氏だと思ふことが出来れば、歌の味ひの邪魔にはならない。

この歌・かの歌通じて、萩が母の聯想を含めて作られてゐるやうである。尤、「人知れず思ひみだれてしのぶかな。萩の下葉のうつり來し世を」では、又別の位置に心を置いては居る。

右の歌は、嘉永二年の秋、遠江掛川で、故夏目龜麻呂の二十七年忌歌會をした、と聞いて作つた「秋懷舊」の作である。翌年、

「九月、弟のとひ來て、懸川の會のことどもこまやかに語りければ」とあつて、

掛川の里わの眞葛 くり返し、とへど 語れど、うらぶれにけり

昔の歌としては、事もなげによんだ一二句に不審はあるが、却てことごとしいものを持つて感じないのが、今ではよい。三句以下は、先の歌とは違つて、敘事には陥つて居ず、さうした詞を使

ふ事で抒情を深めてゐる。かう言ふのが、詩人としての天成を思はせる歌である。若い頃の歌では、

二十まり一つになりぬる年の春

ますら雄がうちもかへさぬ 山陰の はたとせ 何に過し來つらむ

「歸去來兮。田園將^ニ蕪^レ」の心持ちを若々しくしたので、身は和歌山にあつて、かすかに暮す白須賀の里を思うたのである。ますら雄なる語が、國學者である彼の知識では、單に健康な田夫位の義に使つてゐるので、慷慨の氣を持つてゐるのではない。一人前の男の自分が居り乍ら、其まゝになつてゐるふる里の山陰の畠——それは、たちになつた自分、此年月家職を見ずに、他郷に過して來たことを歎いて居るのである。此歌を見て直に感じるやうな、壯夫、無爲にしてあることを、慨^{ウレタ}んだ種類のものではない。

二十三歳には、選集『類題和歌鯁玉集』第一篇を出してゐる。前々年文政九年には、其撰が成つてゐたといふから、若い彼の爲事に驚く。其選歌の標準も、信賴の出来るものであるし、範圍も廣く同時代人を網羅してゐる。最初から出版を思ひ立つ年でもなく、又其だけの印刷の自由もなかつた時代だから、自分の好みで集め出したものが堆積したもの、と見るが正しいのではないか。國學者の多くが、最初試みたのは、此歴代和歌の抄出であつたことを考へれば、其の大爲掛けなものと言ふだけのことである。だから先輩の歌なども多く選り入れてゐる訣なのである。彼の師

は歿する二年前——即大平七十六の年——、四十歳の婿内遠を迎へてゐるが、鯁玉集の出来る前後は、老年の師の傍に侍つて、重用せられてゐた諸平だから、此鯁玉集にも自ら師の息のかゝつてゐることを、人に感じさせて居たことと思ふ。此選歌といふことも、時代の流行となつて來てゐたことは固よりだが、大平自身も非常にさうした事に興味を持ったのか、「萬葉山常百首」、「近世三十六人撰」以下、多くの選歌集を作つてゐる。其影響のあるのは勿論だらうが、其には今一つ、遠因らしいものがある。其は寛政十二年に、大平の撰つた縣門長歌集「八十浦の玉」に關した事である。おなじ縣門の先輩、江戸の村田春海から抗議を受けた。其とは、内容も種類も、亦固より態度も違つてゐるが、何か相通じるものがあるやうである。殊に歌においては、古風新風に廣く興味を持つことを立て前として居た本居派の事だから、凡彼の標準からよいと思はれるものは、派の如何に拘らないで居る。が、此短歌集の名が、「鯁玉集」であり、彼長歌集が「八十浦の玉」であることを思ふと、單に名を模したと言ふだけでなく、ある意圖の、必あつたものと言ふ氣がする。此選集について言ふべきことは多いが、今は避ける。唯、かうした試みが、彼の歌人としての位置を、段々高めて行つたことは確かである。其爲却て、彼の學問は、眞價だけに評價せられないし、又彼も歌の方に囚はれて、學究の述作をする暇が、わりに少かつたらしい。此點は、學者としての天稟の豊かに示された「竹取物語考」・「枕語解」などを見ると考へさせられる。彼の研究法には、近代式な科學質も、彼らしい正しい直感性も現れて、比類尠い立派なもの

である。

彼の學問がもつと大きくならなかつたのは、文學者としての煩ひの外に、其に伴ふ規律の乏しい生活が、煩ひをなしてゐる。彼には恐らく、幼時、常に傍に見た父の流離の生活と、飲酒の惡癖とが、身に沁みて情なかつたに違ひない。又師大平なども、この事を戒めて居たに違ひない。然るに何時か、彼も大酒の人になつて居た。柿園詠草にある酒興の歌でも其よしは訣る。

九月十三夜、憐霞樓の宴に侍ひて（十三首の中）

月に聞く波のひゞきも 更けにけり。誰か 浮き寝の袖しぼるらむ

月にうつ大城の鼓 暫し待て。くだち行く夜を 誰か 惜しまぬ

月に吹く市の植ゑ木の風 高み、塵も残らず 晴れし空かな

皆、酒氣を帯びての恣な調子によい處があるのである。又、相應に知られてゐる、

我醉ひぬ。今は、ひさごを鼓とも 打ちてや、月の影にうたはむ

などは興がり過ぎて、人の思はくを憚らぬやうな厭みが出てゐる。

（弘化三年カ）道頓堀のやどりにて、曉深く起き出て、春曉月と言ふ題を出して、歌よみけるに、

熊代繁里が上句を誦するにつく

「堀江川 水かげ霞むあり明けに、」うかれ心の果ぞ やさしき

遊蕩心を文學にするのも一つの文學だが、此は恐らく恥しきと言ひ乍ら、頭を叩いて居るやうな

氣持ちもあるが、反省後悔が軽く出て居て、歌としては、變つた感情を出してゐる。

嘉永元年は夏に煩ひ、冬再、病んでゐる。其から思へば、二年九月弟の訪うて來た時の歌と言ふのも、病中の作だらう。其だけに歌をなす深い力が思はれる。

嘉永元年の夏、いたく煩ひける程、古蔭（小谷）が、朝顔を小鉢に栽ゑて見せけるに、日にあ

たらざれば、終日しほまさりけるを見て

ゆふべまで咲く朝顔の花見れば、一日も 千世の心地こそすれ

神のけにやありけむ。嘉永と改れる年の暮れなむとする頃より、こゝち損ひてかき籠りけるを

悲しびて、……云々

夢ごゝちに思ひつゞける歌（嘉永二三年ばかりにや）

みなとのうしほのくだり 如何さまにくだり行く世ぞ。地震ふりて屋庭を覆し、
山裂けて水田を埋み、飯に飢ゑて人はこやせど、よき人の書きて傳へし古の書と
りはしく、玉をしもことゝ數へて、其が剩り臺に建て、川竹の夜聲ぞゑらぐ。鳥
の如 立ちか舞ふらむ のろの如守らひをるか。あらがねの 地に俯居爲 人さ
はに歎かふものを、人さはに悲しぶものを 大直日直日の神の神み魂荒びにけら
し。少女らに男立ち添ひ、掌の音もやらゝに 打ちならす左右を田に墾り、種時
く見れば

此最後の長歌も、病氣の間の歌と思はれる。唯、「神のけにやありけむ」と空呆れしたのは訣があらう。柿園詠草拾遺を見れば、嘉永元年の作らしい長歌「十月三日、冬至なりけるに、四日の巳刻より……地震ふりけるほど、見聞ける事どもを、後に思ひつゞけたる」としてあるものは、又、又としてすべて五首續けて作られた長歌が並べてあり、次に十二月、魯西亞の船の伊豆の海に沈んだのを、「……わた中に沈み失せぬれ、神風と讀へざらめや。そこよしと聞かずであらめや。然れども、八十の國への夷らはいまださやげり。あきつ島 四方の國人。君が爲、神をいはひて、とき待ち居らむ」と歌ひをさめて居る。此二つが註釋にはなるやうだ。

諸平の病氣は、酒から來た精神系統のものだと言はれてゐる。其が「神のけにや」の理由である。若い時諸平の教へを受けられた、内遠の子本居豊穎先生は、私の問ひに答へて明らかにさう言つて居られた。だが一方、私の中學時代に漢文を習うた伊藤介夫先生は、——大阪の宿儒であつた。——之を諸平の歌の門人伊達千廣——陸奥宗光の父——の事に關聯させて説き聞かされた。千廣のある陰謀の書狀を遂に拾うて、之を示して諫めたのを、却て諸平亂心と稱して幽閉したのだ、と細かに事情を話して居られた。今になつて見れば、其どちらが正しいか。誰に問うても、明らかには出來まい。唯歌から見れば、亂心したらしいことも事實だし、其間に、國を憂へて居たらしい様子も窺はれる。門弟伴林光平が國事に死んだのは、諸平の死んだ安政四年から七年立つての事だが、多少關係は考へられないでもない。純文學者肌の彼の事だから、國事を歌つても、な

まな作物にはして居ない。勢、ぬるいやうな、顧みて他を言ふ風に見える所はある。が、此等の事情が、絡みあつて諸平自身もうつら病ひと諦めて居た月日があつたものと思ふ方が、當を得てゐるのではないか。甕麻呂の遺傳も、十分に考へられる彼である。だから私は、前は眞に發作を起して數月病み、後には其を口實に、暫らく謹慎生活をしてゐたのではあるまいか、と言ふ考へも持つのである。どうであらうか。

彼の作品中、最、油のゝつてゐるのは、前に述べた「縣居翁の靈社に獻らむとて、くさぐさの歌よみける中に」とある十九首である。其中、

ふる里の岡べの莖 手につみて、いとゞ 昔の春ぞ戀しき

櫻花。散らば散らなむ。とほつ神 わが大君の華蓋のうへに

ふる里の岡べに立ちて わが見てし富士のみ雪の、とはに戀しき

世の中はかなしかりけり。世の中の何かゝなしき 賤の男にして

引馬野の木芽は原。入り亂れ 春日暮すは、昔人かも

特に名高いのは、熊野巡廻の時の歌である。

沖離けて浮ぶ鳥船。時の間にかけりも行くか。鯨魚見ゆらし

ひし投げて 鯨つく見ゆ。逸鳥の翼が上に 誰か立つらむ

み山木の幹伐り斷つと 斧とれば、空もとゞろに あらし吹くなり

(巴嶽に登る途中で、假庵を作る)

ますら雄がすべしもとどり 解き放つ瀧の響きに、雨みだるなり (那智瀧)

傾きし軒の笈の水漕に、涙も浮ぶ 昔語りか (在田・日高二郡を二度廻つた時)

神無月 春ごゝちにもなれるかな。花の窟に、花祭りして

(十月二日、有馬村で、菊・鶏頭の花など携へて参る)

みよしのゝ 奥に思へる心さへ、身さへ、山路を分け辿りつゝ

驛長 竹の小筒を吹くからに、山のかひこそ 聲あはせけれ (近露の里にて寢覺めして)

山賤が 餅にせむと木の實搗き 浸す小川を またや渡らむ

門過ぐる風をしるべに、かしのみの ひとり出でゝも 拾ふうなぬか

契りありて、露もおくらむ。賤が樵るつま木の道の やまとなでしこ

凡百首の中から、前に抜いた二首の外に、此だけ採つて見た。此外にも名高いのが大分ある。多くのさう言ふ歌は、大抵、幾ところか甘い處があるので多く棄てた。人に喜ばれるのは、其人の作が其程度だ、と實際讀まぬ人に思はせる嫌ひがある。諸平も、さうした煩ひをうけてゐる。此等の中には、あまり抜かれないのがあるのも、不思議である。萬葉ふりと簡単に褒めてはならぬ。其時の感じをびつたり出さうとして、自然に出て來た拍子である。だから少し複雑なものを含んで居ると見る方が本たうである。「傾きし」の歌に、諸平らしい抒情味が十分出てゐる。四

句が少し冗辯。花の窟の歌は珍しく軽い氣分になつて居る。橘曙覽にでもありさうで、詞相互の關係は、今少し粘著力がある。「みよしのゝ」の歌は、吉野朝の御末、自天王以下の御事蹟を書物を通して、心の底深く思うて居たのが、今身すら山路を分け來て居ると言ふのである。五句は弱いが、諸平風の説明である。心をこゝまで持つて行くのは、平凡人ではない。「驛長」は、朗らかな諧謔を採つたのである。竹筒に對して山の峽を貝にとりなしたのだ。今の人は、貝の事など思はない方が受け容れ易い。唯、昔風の鑑賞家がかう言ふのを擧げないのは、古風な歌のよさと言ふものをどう考へて居るのか。「山賤が」は、相應に引かれてゐる。激動以外に、靜かな省慮を詩趣の中に數へるやうになつた自然主義影響以後の鑑賞法に入る。一二三句に互つての敘述がくどくて抒情より敘事に傾きかける緩さはあるが、かう言ふ氣持ちにも時々觸れた人として、此歌は逸せられない。「門過ぐる」も軽さと幼さと、おどけの中に、昔の歌らしい穩やかな慰めを感じさせる所を受けとつて欲しい。最後の歌、形は古い。でも發見は新しい。人知らぬ山路の而も偶然目に觸れた撫子、其上にかゝつて居る露に心づいたのである。「契りありて」を「露もおくらむ」に繋げてゐるが、實は其を見た瞬間にかうした山路に來て、かうした何でもない事に目のついたことに對して、ある値遇の感を起したのである。此は爲立ては古いが、類の少いものとして注意したいのである。

霜とくる 枯れ生の茅生の朝じめり。やがて春めく日かげならまし

岩が根の朽ち葉を 雪にこきまぜて、楯おし靡み 嵐ふくなり
 岩崩えて磯回の城門は荒れにしを 夜聲寒くも 寄する波かな
 わたつみの浪もてかくすふる里を、浮き寝の夢に 今宵見しかな
 足ふめば、霜くづれする赭土山 立ちや疲れむ。霧のみに
 深山木のもと伐り断つと 斧とれば、空もとゞろに 嵐吹くなり
 雲間洩る秋の日かげも むらさきの 古坐の巖に傾きにけり
 神ならば 岩押し分けて歸らまし。山路の暮れは、家ぞ戀しき
 天つ日の影もそがひの 古壁に、いつまでかれぬ草の根ざしぞ——達磨
 山里のそとものみ簞 吹く風の音もさやかに、なりにけらしも ——風鈴
 神無月 立ちにし日より、あしびきの 山さへ もろき色に見えつゝ
 山畑の麥の初時き急ぐらむ。なゝめにも降る むら時雨かな
 あな寒の 夜はの衾や。河風に 身をわび人の聲もたぐひて
 を萱原 雪を吹き解く風弱み、野火の煙のむすほゝれつゝ
 山百合の おのづからなる花の香も、松の戸洩れて 清き月夜か
 かきこもる那智の御山の 霜ながら 今朝の朝菜に 菊やつまゝし
 橘のときはの蔭と なびき寝し その夜も夢か。あとの若草

仰ぎ見し廬のけぶりの末よりも 高き山路を のぼり來にけり
 風やどる御嶽の野蕪 矢に矧ぎて、射つらむ夜はの 響き高しも——源三位頼政
 きさらぎの ついたち頃の夕月夜。心にくゝも 霞みそめつゝ
 咲く花の梢をつたふ川風に、みだれて寒し。鶯の聲
 行きかへり 見れどかなしき花のうへに 霞む春日も かたぶきにけり——芳野懷古
 夕月夜 ほの見えそめし紫陽花の花も まどかに咲きみちにけり
 あしがきのみだれをかこつ雨の中に、色もくづれし紫陽花の花
 刈りしほの麥の朱ら穂 あからかに夜さへ見えて、螢飛ぶなり
 常世物 花橘の追風に、足代の湊を朝びらきせむ
 船まどの秋のともし火 ほのゝと白める海に、月は浮べり
 山里は まだき夜寒になりぬらし。眞柴のけぶり、月に立つ見ゆ
 小雀鳴く秋の野寺のひと垣 ひま見えぬまで 萩は咲きけり
 雲霧のたゞよふ山の椎がもと。今日も いくたび雨はこぼれし
 山寺は 曙かなし。紫の雲路をつたふ さを鹿の聲
 み狩立 御野のこがらし寒ければ、鈴のゆらぎに、雪ぞ散り來る
 思ふそら 安の川原もありと聞く 雲の上こそ戀しかりけれ

師資五膠漆守死不敢移
 法、倫、可、立、宗、古、聖、執、不、爲
 人々共立宗、嗟我焉適歸
 諸人且勿喧、聽我唱導、詞
 唱導自有始、請從靈山施
 佛是天中天、誰人敢是非
 佛滅五百歲、人二二三其儀
 大士方此世、造論歸至微
 唯道以爲任、何是復何非
 自佛法東漸、白馬創作基
 吾師遠來儀、諸法頓有歸
 彼大唐盛矣、罔美於斯時
 領衆兮匡徒、箇々法中獅

唱導詞
 風俗年々薄、朝野歲々衰、
 人心時々危、祖道日々微、
 師盛唱宗稱、資隨而和之

十二良 寬

朝なく、庭立ち馴らし 見る毎に、知らぬ緑の色まさり行く
 春日さす南の庭の 雪消よりかげろふばかり 梅が香ぞする
 夕されば、雲雀の聲のさゝ波を 麥生によせて 春風ぞ吹く
 櫻咲く片山すげの根來寺 何時の春待つ室のとざしぞ
 國見すと のぼれば、寒き山風に、けぶりを洩るゝ花は 誰がかど
 五月雨の雲間の夕日 下照りて、島の橘 露かをるなり
 諸平の歌は、當然、再、見返される時が来るであらう。但、彼の當時、たけ高しと見られ、自分も負うてゐたらしい歌口は、相當、鑑賞の妨げとなるであらう。彼の情熱は、歌ひ上げることによつて、解決のつくものと考へられてゐた。併し、其の過重した姿の喜ばれる日は、まづありさうも思はれぬ。文藝家にも、生得の幸不幸はあるのである。

頓・漸 雖 逗 機 南北 未 分 岐
 迨 此 有 宋 末 白 璧 肇 生 疵
 五 家 遞 露 鋒 八 宗 竝 驅 馳
 餘 波 聿 遐 施 殆 臻 不 可 排
 粵 有 吾 永 平 眞 箇 祖 域 魁
 夙 帶 大 白 印 扶 桑 振 宗 雷
 大 哉 擇 法 眼 龍 象 尙 潛 威
 盛 矣 弘 通 任 靡 幽 不 蒙 輝
 垂 輝 及 島 夷 合 削 皆 已 削
 合 施 皆 已 施 自 師 去 神 州
 悠 々 幾 多 時 枳 棘 生 高 堂
 蕙 蘭 草 莽 萎 陽 春 孰 復 唱
 巴 歌 日 盈 岐 呼 嗟 余 小 子

遭 一 遇 於 此 時 大 厦 將 崩 倒
 非 一 木 所 支 清 夜 不 能 寐
 反 側 歌 斯 詩

良寛の詩における力量は、恐らく歌の比でないと云ふやうな気がする。勿論人の言ふやうに、様
 々な諸病を犯して顧みなかつた所は多い。だが、かうした長律の數篇に到つては、誰が本格のも
 のでないかと謂へよう。感動を堂々と陳べて行くのに、如何にも敘事詩らしい行き方で、暢達を失
 はないのは、盛唐の詩人の風である。
 私は實は、傳説の良寛に目を晦まされて居たのであつた。いや、人が傳説によつて、良寛の作品
 を解釋し、鑑賞しようとする態度を、殊に極端に却けて來たものである。私の先輩や友人の多
 くが良寛を尊敬するのに、反對し續けた。さうして其を、良寛傳に晦まされたものとした私だ。
 其爲、ある好きき友とも、文學上に相談しなければならぬ因縁の、大きなものを作つたやうに思
 ふ。私は、懷素を學んだといふ良寛の草體の字の巧な點をあげて、却て張旭を寫したものとした。
 而も其巧慧な筆鋒を見る時、誰が傳説上の良寛を其まゝ作品の註釋に使ふことが出来るものか、
 とまで極言した。其事あつて後、其友人は私に向つて、良寛のよさを説かなかつた。つまり、學
 究の末流であり、又結局、中古式な歌に興味を棄てることの出来ない者として、私をその朋黨の

意向に同じ難い所を持つもの、と思ひ初めたのだらうと思ふ。其友も今は亡い。此文が、或は死後、其何年の追善の爲の好意を含んだものだとも見られ、此ほど嬉しいことはないのである。良寛があつた人格であつたことは、固よりその素質にあつたのは言ふまでもない。だが、其質自身に、眞の得道の障りをなすものも多くあつたことも否めない。其を苦しみ鍛へて、あれまでになつた半生以上の修練を考へないのは大きな誤りである。こんなことは言ふまでもなく、誰しも思つて居ることであらう。だが良寛僧を思ふ時、ともすれば、其辛苦の経歴などは、念頭を去つてしまつて、唯生れ乍らの珠のやうな人格——其人格から、文學も自由に流れ出たやうに思ふのは、あまり無反省だといふだけである。

良寛は、何も初めから國上山下の田舎の寒僧ではなかつた。正道の修業を積み、接すべき知識には接し、又自らも廣い世間から相當に認められて居た人なのである。

「伊昔少壯の時、錫を飛ばして千里に遊び、頗古老の門を叩き、周遊すること幾春秋。期する所弘道に在り。誰か浮漚の身を惜しまむ。」

此人の社會的地位を思はず、乙子湖畔で喰はず貧樂の生活を續けた寒僧と言ふ點にばかり、思ひを集めるのは、佛子としての深い生を截り捨て、見ることになるのではないか。

此詩で見ても、慷慨もあり、自得もあり、決して、唯の詩僧並みの平仄を整へた人でないことは決る。尤、詩だから自ら其本質や、據る所の作風に左右せられて、多く思はぬものも出て來ると

言ふこともないではない。良寛には勿論、模倣は可なり深い病になつてゐるが、其中から個性が輝き出てゐる。

詩も、東坡や淵明や、もつと更に寒山をなぞつたものは多く見られるが、杜甫や、韓昌黎を目標としたものなどは、なか／＼さう安易なばかりではない。實にへうきんな拘泥のない生活が、多く詠ぜられて居るかと思ふと、半面極めてきちやうめで氣むづかしい所が出てゐる。おもしろ半分は調子に乗つて作つて居るかと思ふと、又非常に苦吟して居る所が見える。さうして、古詩の骨法を正しく得てゐるものもある。良寛は、詩人として相當に高い才能を持つて居た。唯、詩に執することを善しとせなかつた爲か、特殊な風格は見せながら、雄篇傑作を残すことがなくて済んだのであらう。彼も亦、五言に格高くして、七言に若干品低いものを交へて居る。が、其だけではない。譬へば、「讀永平録」の一つなどに見えた趣きのものも、なか／＼ある。

春夜蒼茫二三更、春雨和雪灑庭竹。欲慰寂寥良無由。

背手摸索永平錄、明窓下文几案頭、燒香點燈靜披讀。

身心脫落只貞實、千態萬狀龍弄玉、出格機擒虎兒老。

大風係西竺憶得、曠昔在圓通時、先師提持正法眼。當

時洪有翻身機、爲請拜閱親履踐、轉覺從來獨用力、自

茲辭師遠往返、吾與永平有何緣、到處奉行正法眼……

久しく良寛研究を續けて居られる相馬御風氏はじめ、多くの方々の解説をこゝに借用しない非禮は、褒むべきではないが、故らにするのではない。
傳説と詩と、相照して見ると、十八歳出家以前に、早くも遊里に足を踏むことを覺えて居たのは、察せられる。

『平生少年の時、遊遊繁華を逐ひ、能く嫩鶉の衿を著け、好みて白鼻の驛に騎し、朝に新豊の市を過り、暮に河陽の花に酔ひき。歸り來りて何處なるかを知らむとすれば、笑つて、莫愁の家を指す。』

と趣向を同じうした數首は、年四十に近くなつて歸國の後、其放蕩の時代を回顧しての作であると思はれる。

二十二歳尼瀨の光照寺を去り、國仙和尚に伴はれて備中玉島圓通寺に行つたが、其處に寛政七年まで居つた。此間に父山本以南は、郷里を出奔して京都で横死したと言ふ傳へになつてゐる。かう言ふ風に、庶民ながら聞えた名家の退轉して後、寺泊に還つたのである。此間に出來た詩は、相當にあらうと思はれる。歌の方は思ふに、多く歸國の後の作が、傳つて居るのではなからうか。殊に四十七から十二年に互つて住んだ國上の五合庵時代から、歌に興味が深まつて來たものゝやうに思はれる。文化十三年に山下の乙子の社の傍に下り住んで、こゝに亦十年、其後更に里近い處へ迎へられて島崎村に六年生きて居た。此間の歌もあつて、辭世の作に及んで居るのだから、

少く見つもつて二十年、長くは三十年に互る作歌經歷は考へられる。

恐らく禪僧としての當然の素養たる詩文から、和歌の方へ興味が移つて、次第に其方に傾いて來たのではなからうか。其に、良寛に書を懇望する人たちの爲にも、訣り易いと言ふことを主として、禪家風な氣樂な肩の張らないものを書いて與へる機會が、次第に多くなつたものであらう。良寛僧は、竟に一雲水で終つたと同じである。住職として法統を嗣ぐ者は、自ら師家との關係の深淺によつて、定まることが多かつた。中年にして、國仙和尚に従つて遠く遊んだ彼には、一寺に住持する機縁が起らなかつた。亦さうした浮世の外に、又一つの家を構へると言ふやうな事は、其希はなかつた所でもあらう。「唱導詞」にも、『師は盛んに宗稱を唱へ、資は隨ひて之に和し、師資互に膠漆の如く、死を守りて敢へて移らず。』と言ふのは、師家と檀那との交渉の煩しさを述べたものと見てよいだらう。だから彼の文學を見るのに、寺持ちの師家と一つに見るやうな立ち場からするのは、根本に間違ひがある訣である。さうした自由性が極度に出て居るのも、彼においては決して衒ひではない。つまり、禪家普通の理論を行つてはなくて、自らなる生活氣分なのであつた。

短歌様式を採るものに、道歌と言ふ一類があつて、狂歌の一つの出自を示すものである。我々はどうかすれば、短歌の中から鋭敏に道歌要素を感じる。少くとも、作者に其成心のないものまで、さうした型に入れてしまふことがある。尤、さうした傾向の歌は、其作物自身、大抵さうし

でも補足しなければならぬ弱點を持つて居る訣でもある。良寛の作物にも、さうした點がある。だが、その長歌はわりに、我々の感情は托げずに、とり入れられる。

白 髪

かけまくも あやに尊し。言はまくも畏きかもな。ひさかたの 天の尊のみ頭に、
白髪生ふる。朝には臣を召さしめ、しろがねの鑷を持ちて、その髪を抜かし給ひ
て、しろ金の箱に秘めおき、あまづたふ 日嗣のみに傳ふれば、日嗣のみこも、
つがの木の いや續々に かくしつゝい傳へますと聞くが、怜しも

世にみつる寶と言へど、白髪にあに及ばめや。千ぢの一つも

白髪は、よみのみことの使ひかも。疎にな思ひそ。その白髪を

白髪には、趣きの違つた長短歌が今一聯ある。其方は世間普通の「霜」に譬へるものよりは、幾分思想を持つて居るか、と感じられる程度の物に過ぎない。が、其反歌の一つ「白髪は、おほやけ物ぞ。尊哉人の頭も、避くと謂はなくに」とある。其などから、此長短歌は展げて來たものらしく、とても珍しい考へ方を、民間傳承の噂咄からとりあげて作つてゐる。かうした心の觸れ方は、文學を解しないものにはない事である。たとひ短歌を何百千萬作つたところで、行き當らない筈の心である。其をかう採りあげて、神祕に、而も潤ひと懐しみを放さずに、明るいものに

して來たのは、短歌にない文學境を持つて居たことを示す。さうしてこんなのにこそ、漢詩が深く根柢に光つてゐる氣がする。其ほど我々を驚かしたものである。長歌自身は、萬葉の調子に囚はれず、既に新しい詩らしく流動するものを持つて居る。だから、「……日嗣のみに傳ふれば、日嗣のみこも つがの木の いやつぎ／＼に……」と謂つた平安朝以後の長歌の調子になつてゐる。而も良寛においては、其すら自然なのである。『月の兎』に、「……食物あらば給へとて、尾花折り伏せ息ひしに、猿は林のほつ枝より木の實を掴みて獻せり。狐は築のあたりより魚を咋へて來たりたり。兎は野べを走れども、何もえせずでありしかば、……」など言ふ風に、五七調も自然であり、七五調も自然であり、又其外の律にも自由に變化する。

鉢 坊 主

鉢たゝき 鉢たゝき 昔も今も鉢たゝき。鉢たゝき 鉢たゝき 鉢を叩き 鉢を
叩いて 日を暮せ

人にかはりて

二十日講のこむなさか 塗り物 たゞはくるゝとも、おらいやよ。漆地ほし ぬ
らひくは、投げ刷けの たつた一刷け

寺泊に飯こひて

こきはしる鮎にも 我は似たるかも。朝には上にのぼり、かげろふの 夕さり來

れば、くだるなり

○ 夜や寒き。衣や薄き。すみのを^(?)と 閨のふみ一筆染めて、顔あげて 昨日は怨み、
今日はまた戀しゆかしき とりふ^(?)の 何からさきへ あし^(?)むき

新派歌人の間に、十数年長歌が相當に行はれ出したが、私も實は、その最拙劣な作家だが、どうも私の内證的事實から言へば、——さうした影響はなく、他の人々のするのに促された傾きのあるばかりだが——さうした長歌には、萬葉と言ふよりも、一度良寛の見本を通したやうな處がある。だから、昭和の「長歌」は、新體詩を出た作者が、其に飽滿して、新しい型を良寛に見出したのだといふ方が、適切な氣がする。

手毬をよめる

ふゆごもり 春さり來れば、飯乞ふと 草の庵を立ち出で、里にい行けば、たまぼこの 道の巷に、子どもらが 今を春べと手毬つく ひふみよいむな。汝が
つけば 我はうたひ、我がつけば 汝はうたひ つきてうたひて、かすみたつ
長き春日を暮しつるかも

かすみたつ 長き春日に、子どもらと手毬つきつゝ、今日も暮しつ

此には「あづさゆみ 春さり來れば」からはじまる殆同形の「手毬」と言ふ長短歌がある。少しの違ひだが、此方が幾分立ち優つて居るやうに思ふから採つた。

鉢の子

鉢の子は愛^かしきものかも。しきたへの 家出せしより、朝には 腕^{カヒナ}に掛けて、夕には 手^{タナ}上に載せて、あらたまの 年のを長く持^ヒたりしを。今日よそに忘れし來れば、立つらくの たづきも知らず、居るらくの すべをも知らず、かりごもの 思ひ亂れて、ゆふつゝの か行きかく行き、たにぐゝの さ渡るそこひ、あまぐもの向伏^{ムカフ}す極み、天地の寄り合ひの限り、杖つきもつかずも行きて、求めなむと思ひし時に、鉢の子はこゝにありとて、我がもとに人は持て來ぬ。いかなるや 人にませかも。ちはやぶる 神ののりかも。ぬばたまの 夜の夢かも。嬉しくも持て來るものか。よそしなへ持ち來るものか。その鉢の子を

道の邊に 菫摘みつゝ、鉢の子を忘れてぞ來し。その鉢の子を

鉢の子を 我^シ忘るれど、取る人はなし。取る人はなし。鉢の子あはれ

此にも三通りの作り替へがあつて、此が其一番長いものである。部分には力劣りのしたところもあるが、生活も現れ過ぎるほど現れ、感情も豊富に出て居る。其に、如何にも伸びがよい。而も

亦、敘事詩才能が顯れてゐるので、之を擧げた。處どころ用語に誤用のあるのは、此時代の事、而も此方面は獨學だらうから、是非もない。「たなへに載せて」「立つらく」「居るらく」皆むちやである。だがよく訣り、感觸は害しないから、擬古文辭としては、さし支へはない。「かりごもの——ゆふつゞの——」は生氣のない類型であり、「たにぐゝの——あまぐもの——」は、其上に、此歌では誇張し過ぎて感じられる。さわたるそこひなど言ふ無法な使用例は、却てほゝあまれる。良寛の歌には、此後も言はねばならぬが、同じ題材を作り直したと言ふよりも、前のものをくり返して書いてゐる中に、變化したと言ふ位の替り目の少い、凡同じやうな作品が漢詩にも長歌・短歌にも多いのが、一つの癖である。まるで、良寛集編纂の手落ちとでも見えるやうに。だが、決してさうではあるまいと思ふ。

一通りこの人の作物を見ると、古典としても、非常に古い時代めいたものと、中世風なもの、其上に極めて近代式な感じを持つたものとがまじつてゐるやうである。其では、さうした使ひわけを創作態度として持つて居たのだらうか。本居宣長一派のやうに。けれども若し、此らを見ると、考へは別に湧くだらう。

一つ松

國上の大殿の前の一つ松。幾代經ぬらむ。ちはやぶる 神さび立てり。朝には
い行きもとほり、夕には そこに出で立ち、立ちてゐて見れども飽かず。一つ松

はや

山かげのありその波の 立ちかへり見れども 飽かぬ一つ松かも

岩室の松

岩室の田中に立てる一つ松。今日見れば、時雨の雨に濡れつゝ立てり。一つ松
人によりせば、笠かさましを。蓑著せましを。一つ松あはれ

岩室の田中の松を 今日見れば、時雨の雨に濡れつゝ立てり

又、旋頭歌の部に、

岩室の田中に立てる一つ松の木。今朝見れば、時雨の雨に濡れつゝ立てり
一つ松 人によりせば笠かさましを。蓑著せましを。一つ松あはれ

良寛自身におけるかうした類型はまだ／＼ある。前のは獨鈷の松の歌だといふが、此方には、岩室の松ほど濃厚には出て居ないが、やはり一つ松なる語に惹かれて、日本武尊の『尾津崎なる一つ松あはれ』の印象が見えて居る。又、隱約の裏に、「岩屋戸に立てる松の木。汝を見れば、昔の人を相見る如し」「はだすゝき 久米の若子がいましける三穂、岩屋は、見れど飽かぬかも」などの影響が内在してゐるやうである。

『大刀佩けましを。衣著せましを』を蓑と笠にしたゞけと言へば、其までだが、良寛では今一應、自分の心で、近代式に活して来たものと見るべきだらう。古典文學から翻作した作物の研究は、別に積まれなくてはならぬ。が、此人においては、歌だけが、彼の文學ではなかつた。彼の文學領域は、もつと廣かつたのだ。其から思へば、後生大事と、古歌を剽竊するやうな態度になくともよかつたことは信じてよい。つまり古典も、創作も、彼の内では極めて安氣に融合して來るのである。其は記憶の錯誤と言ふでもない。前代の作物をあつさり、どうかすると半分は、自分の物のやうに感じたのだらう。

良寛にとつては、ほんの僅かのきつかけで長歌の一部であり、又、旋頭歌にもなり、短歌にもなつて來る。常に流動して居たのである。自分の物であつて又、同時に自分の物としても、はつきりした形を採つては、心に印して居なかつたのである。何だかかう、古語・古詞の中から、近代感を引き出す一種の才能を持つて居た人ではないかと言ふ氣がする。

「時雨の雨に濡れつゝ立てり」は、旋頭歌において、一番緊張した形を保つて居る。さうしてさう言ふ確立の上に、短歌としての堅固さをも、徐々に持つて來たのであらう。何にしても此句が、周圍の詞章に及す効果は、ある近代性である。一つは良寛の古典に包まれきらない個性と共に、も一つ更に大きな原因は、古典に關しての理會が、十分でなかつたと言ふ點にもあると思ふ。其爲に、古典の堅さを、近代の緊張味と同様に感じさせるのである。

……すべをなみ 庵を出でゝ見わたせば、五百重山 千重に雪ふり雲隠り 袖さへひびでて……歸り來て闌にこもりて(後なし)

○
この夜らのいつか明けなむ。この夜らの明けはなれなば、女來て はりをあらはむ。臥いまるび明しかねけり。長きこの夜を

此等の歌、古體のまゝでありながら、部分的に近代感のしみくゝとしたものが出てゐる。其で全體が近代風に感じられるのである。だから、ちよつとでも、近代生活の斷片が出てゐると、歌柄ががらりと、かぐはしく感じられるのである。

貧しきをのぶる

あしびきの 山田の田居に廬して、晝はしみらに、飯乞ふと 里に出で立ち、かぎろひの 夕さり來れば、山越しの風をときじみ、門さしてあし火焚きつゝ、いにしへを思へば、夢の世にこそありけり

「飯乞ふと里に出で立ち」の句がある爲に、一首の古い調和が俄然として新趣を動して來る。

「かぎろひの 夕さり來れば、山越しの風をときじみ」などの古い語句が、如何にも生きくゝとして觸れて來るのも、其爲である。

集には長歌と、旋頭歌との區畫は立てゝあるが、短い長歌は旋頭歌の部に相當にあり、長歌の部

にも勿論同様のが這入つてゐる。其編輯者には、良寛の氣持ちの影響すら見えてゐる。良寛は、旋頭歌の様式を知つて居たやうでもあるし、又知らない點もあつたやうである。此は、王朝時代の歌からしてさうで、其後、歌學者の間にも誤りが傳へられて來たのだから無理もない。「577。577」の形に正確に詠んだらしいものが多く、さうでないものが七首あるに過ぎない。其種類の旋頭歌と言ふべきものは、長歌と區別が、實はつかぬ。さうして、其少し伸びた小曲といふべきものが、良寛自身の拍子を極めてよく出してゐる。さうして其が又、普通の長歌の中にもわりこんで、古風のものと同ら割れて來る。そこに、良寛特有の長歌が生れたのだ。

ひさかたの 雪かきわけて、さすだけの 君が掘りけむ早百合根の 早百合根
の その早百合根の あやにうまさよ (長歌の部)

山笹に霰たばしる音は さら／＼。さらり／＼。さら／＼とせし心こそよけれ (旋頭歌)

かう言ふものになると、實に良寛の様式における自由性が示されてゐる氣がする。何だか、一つ先に新しい詩形の暗示を感じて、之を長歌にしたり、旋頭歌にしたり、短歌にしたり、色々其を具體化しよう、とする苦悶の現れたと言ふことも出来る訣である。

『深山風のを笹の霰の さらり さら／＼としたる心こそよけれ。けはしき山の つぐらをりの……くるり くる／＼としたる心は、おもしろや』 (松の葉)

此小唄を唄本で見たか、其とも民間に傳承せられた民謡として聞いてゐたのか、ともかくも、ほ

んのちよつぱり旋頭歌調に調へ入れることによつて、相當に別様な生命を生じさせてゐる。だが普通の見方から言へば、大膽過ぎたし、かただと言ふことになるだらう。

時鳥鳴くや 五尺のあやめ草 芭蕉

此は、「——五月の——あやめも知らぬ戀ひもするかな(古今集)」と言ふ歌から截斷して來たものでなくて「五尺のあやめ草を截りたる様にすべし。」と言つた歌論の語の支持もあつて、獨立性が出來て居る訣なのである。此が、正しい誹諧の鑑賞法である。併し誹諧時代を過ぎた普通の讀者には、其處まで切實に感じられないのだから、良寛の場合と大した相違はないかも知れない。さう言ふ態度に這入るものは、芭蕉以下随分見えるのである。だが、良寛のは、如何にも、前代作物に對して大膽である。少し放心状態にあるのではないかと思はれるほどである。だが、私にとつては、此問題より先に、かたづけて置くべきものがある。

草のへに螢となりて待ち居らむ。妹が手ゆ 黄金の水を賜ふ言ば (旋頭歌の部)

草むらの螢とならば、宵々に、黄金の水を 妹賜うてよ (短歌の部)

山臥しの峰かけ衣。何と染めよ。肩裾萌黄、袖は紅

山笹の霰同様、此等は、小唄・童謡の雛案である。かうした趣向を用意してゐると言ふより、率然と起る即興から、かうしたものが出來るのであらう。或は又、自分が雛案のおもしろさに耽つてさへ居ればよいので、必しも、み山嵐の歌が其當時行はれてゐて、人に出所が訣つてゐても、

又訣つてゐなくてもよいのであらう。こんなのは、剽竊と言ふべきものではない。ともかく、歌にうまく這入る這入らぬは、第二として、文學風な題材らしいものを感じる力は、十分あつたのであらう。長歌「月の兎」でもさうである。良寛の手にかゝると、昔咄からでも出たやうな幼さを帯びて来る。

手毬の長歌・短歌の類は、さう言ふ生活が、文學の題材として適切だと知つて居たからなのだ。どうせ、頼まれ強ひられて作つたものだらうが。

形身とて残す二人の子。見るに心のほだされて、かにもかくにも 言はむすべ
せむすべ知らにこもり居て、ねのみし泣かゆ。朝な夕なに
などは、同情と言ふよりも、文學として作らうとした計畫と、それから惹かれた情熱とが、若干あるのである。

良寛僧の 今朝の朝葉茶もて逃ぐる御姿 後の世まで残らむ

此歌なども、ちよつと動機の説明に苦しむものである。禪僧の簡易な生活、其と、わりに簡単に笑うて濟す性分、そんなものゝ外に、雲水のやうな生活はして居ても、唯の雲水づれと違ふと言ふ藪を経たことの軽い自信、そんなものが一つになつて、此歌に出てゐるのだらう。が其よりもつとはつきり見えることは、自分を一つの文學上の人物——謂ひ替へれば、畫中の人物に考へて來た點に、製作の動機が繫つて居るやうに思はれる。「後の世まで残らむ」の句で見ると、如何に

も自信深い、いやなものを感じるが、御姿と言ふ語が置かれてゐるのは、おのれ笑ひこけて、人をも笑はしてゐるのである。見つかつたか。とんだしくじりだ。「昔のお師家なら、こんなことも後世の語り草になるのだらうが、……おれのうろたへて逃げたらう様子も、ひよつとすれば、さう言ふ風になるかも知れん。さう思つておくれ。」この位の氣持ちであらう。此人には、不思議な興味といふか、偷盜の上に人間色を認め、其を自分以外のものではないと言ふ風に、表さうとする傾向のあることで、其重くるしさを救ふのに、一流の笑ひを以て掩うてゐる。

長歌「山寺梅」、又「おなじ一首」、「有則に贈る」の三通りある。

つぬさはふ 岩坂山の山越しに、み寺の梅を垣越しにほの見てしより、さねこじ
の根こじにせむと むらぎもの 心にかけて、霞たつ 長き春日を忍びかね、夕
さり來れば、からにしき 里たち出で、はたすゝき 大野を過ぎて、千鳥な
く 濱邊をとほり 眞木立てる荒山越えて、岩が根のこゞしき路を踏みさくみ、
辿り／＼に思ひつゝ、裏門まはり、大寺の垣根に立てば、寺守りの こや ぬす
びとゝ呼はれば 里に聞えて、……花ぬすびとゝ名のらえし君にはませど、うつ
せみの 世の事なれば いつしかも年の經ぬれば、葦の屋の伏せ屋がもとに、夜
もすがら 八握の鬢をかい撫でゝおはすらむかも。この月ごろは

何事も みな昔とぞなりにける。花に涙を濺ぐ今日かも

盗人の忍びよる様の描寫に力を盡してゐる所から、其に對する深い同感、まるで良寛自身行うた事のやうに、澄んだ心に興がつてゐるのが見えるのである。だが此三首類型のものは、有則に與へた一つ事を詠んだものであるが、此などはどうして改作を重ねなければならなかつたのか。假に出來た順をつけると、第一作は「梓弓春の夕に」と言ふ五六句のあるもので、髻のこのない歌、第二作は、「有則におくる」と言ふ詞書のあるもの、第三作が前出の長篇らしく思はれる。なか／＼長く複雑化したものを、短篇に單純化は出來ないものである。良寛も、詩歌の上には、随分執心を持つてゐたことだから、さう安々と觀念することは出來なかつたらう。

春の野に若菜つみつゝ 雉の聲聞けば、昔の思ほゆらくに

春の野に咲ける莖を 手につみて 我がふる里を思ほゆるかな

むらぎもの 心樂しも。春の日に 鳥の群り遊ぶを見れば

草の庵に 足さしのべて、小山田の山田の蛙聞くが 樂しさ

この園の梅の盛りと なりにけり。我老いらくの時にあたりて

子どもらと手携りて 春の野に若菜をつめば 樂しくもあるかな

この里の桃の盛りに 來て見れば、流れにうつる花のくれなる

あしびきの 山田の原に蛙鳴く。獨り寝る夜は いねられなくに

命あらば、またの春べに來て見む。眺めも飽かぬ山の櫻を

ひさかたの 雨の霽れ間に出て見れば、青みわたりぬ。四方の山々

あしびきの かた山陰の夕月夜 ほのかに見ゆる山梨の花

ぢんばそに 酒に 山葵に 賜はるは、春を寂しくあらせじとなり

むらぎもの 心はなぎぬ。永き日に、これのみ園の林を見れば

ひさかたの 空より渡る春の日は、いかにのどけきものにぞ ありける

あしびきの 尾の上に立てる松柏も、今は春べと うちかすみけり

あひ連れて 旅かしつらむ。時鳥 合歡の散るまで 聲のせざるは

國上山 松風涼し。越え來れば、山時鳥をちこちに鳴く

あしびきの 國上の山の時鳥 よそに聞くより あはれなりけり

あしびきの 山田のをぢが 日ねもすにい行き返らひ 水はこぶ見ゆ

わくらはに 人も訪ひ來ぬ山里は、梢に 蟬の聲ばかりして

御饗する物こそなけれ。小甕なる蓮の花を見つゝしのばせ

くれなるの七つの寶を もろ手にておし頂きぬ。人のたまもの

陶器の酒をたづさへ あしびきの 山の大根を をしに來し我が (良寛作か)

肌寒み 秋も暮れぬと思ふかな。この頃 たえて蟲の音もなし

我が待ちし秋は 來ぬらし。この夕べ叢ごとに 蟲の聲する
 飯乞はむ。ま柴や樵らむ。苔清水 時雨の雨の降らぬまに〜
 風涼し。月はさやけし。いざ 子ども。踊り明さむ。老いのなごりに
 たまぼこの 道まどふまで 秋萩は散りにけるかも。行く人なしに
 月よみの光りを待ちて 歸りませ。山路は、栗のいがの多きに
 山里は うら寂しくぞなりにける。木々の梢の散り行く見れば
 秋風に靡く 山路の薄の穂見つゝ來にけり。君が家べに
 秋の日に 光り輝く薄の穂 こゝのお庭に立たして見れば
 秋もやゝうら寂しくぞ なりにける。小笹クサノイホリヲに 雨イサカヘリナムのそゞくイサトサシテを聞けば(イ)
 あしびきの 山のもみぢ葉 散り過ぎて、うらさびしくも なりにけるかも
 夕暮れに 國上の山を越え來れば、衣でさむし。木の葉散りつゝ
 行く秋のあはれを 誰とかたらし。藜アカザ籠コに充て 歸る夕ぐれ
 長月のものかなしきに、くさまくら 旅のやどりに果てし君はも
 あしびきの 國上の山の山畠に、蒔きし大根を あさず喰せ。君
 草の庵に寝ざめて聞けば、あしびきの 岩ねに落つるたきつせの音
 いにしへ(イ)を思へば、夢か うつゝかも。夜は 時雨の雨を聞きつゝ

夜もすがら 草の庵に我が居れば、杉の葉しぬぎ 霰ふるなり
 軒も 庭もふり埋めける雪の中に、いや珍しき 人のおとづれ
 越の海 野積の浦の海苔を得ば、分けて賜れ。今ならずとも
 むらぎもの 心かなしも。あらたまの 今年の今日も、暮れぬと思へば
 谷の聲 峰の嵐をいとはずば、かさねて辿れ。杉のかげ道
 越コシに來て まだ越馴れぬ我なれや、うたて 寒さの肌ヒに切キなる
 今よりは、續ツぎて 白雪積るらし。道ふみ分けて 誰かとふべき
 いにしへ(イ)にありけむ人の持モたりてふ 大みうつはを 我は持ちたり (水瓶の歌)
 人の子の遊ぶを見れば、にはたづみ 流るゝ涙とゞめかねつも
 あづさゆみ 春を春とも思ほえず。過ぎにし子らがことを思へば
 人の身は習慣オチカものぞ。子どもらをよく教へてよ。ねぎらひまして
 紀の國の高野タカノの奥の古寺に、杉の雫を聞き明しつゝ
 福井なる矢垂ヤタシの橋に來て見れば、雨は降れゝど 日は照れゝども
 世の中にまじらぬとはあらねども、獨り遊びぞ 我はまされる
 あしびきの 黒坂山の木の間より洩り來る月を 夜もすがら見む
 如何にせば 誠の道にかなはめと ひとへに思ふ。寝ても 覺めても

必しも即興によつてのみ作つたとも言へぬ。だが製作は、多くさうした軽い氣持ちで、何の心構へなく行はれたものに違ひない。さうして出来たものを、覚え又記しつけておいて、後々までも、心のゆくまゝに手を入れて居たものと見る方が、正しいやうである。今の世の人が考へるやうな、確實性を持たせようと言ふやうな技工でなく、空に浮んで居るやうな調子を完全に捉へようとして、幾度もくり返した改作に違ひない。さうして其が、人に頼まれて、紙に向ふ時、とりわけ行はれたものと思はれる。

かうした、實に浮動するものゝやうな調子を具體化しようとする所からこそ、屢わが歌・人の歌の區別が立たなくなつてしまふのである。今まであげて來た類想・類型の外に、まだ澤山其がある。謂はゞ殆、先人の作をまる取りにしたやうなものも出て來る。此は索引の完備して居ない短歌で、而も人口に諺のやうに膾炙せられた歌の多いわが國の短篇文學では、口をついて生れたと信じてゐるものが、思ひがけず古人の作であつたと言つたことは、我・人共にくり返す經驗である。我々の生活に對する感じ方が、既に古い文學によつて規定せられて居り、さうした代表文學が殆、我々の内生活の聲のやうに力強く我々をとりまいてゐる。だから我々の考へも、我々の物言ひも、何かに觸れたと言ふ際は、既に古人の感慨を我が物にしてゐる時である。だから自ら語までが、古人のまゝ、或はほゞ似た形で復活して來る訣である。良寛のやうに、自由な心で、歌の方へ向けたまゝはふり放した態度で作つてゐる時には、其がむら／＼として出て來る。普通は、

いま二日 三日もたちなば、さすたけの 君がみ足も よくなほらまし
あしびきの 山べに住めば すべをなみ、櫛つみつゝ 今日も暮しつ
大み酒を 三杯五杯たべ酔ひぬ。酔ひての後は、待たでつぎける
夜明くれば 森の下庵 鴉鳴く。今日も うき世の人の數かも
苗々と 我が呼ぶ聲は、山越えて また山越えて 谷の裾越え
松の尾の松のあひだを 思ふどちあるきしことは、今も忘れず
ます鏡 手にとり持ちて、今日の日もながめ暮しつ。影と 姿と
我も思ふ。君もしか言ふ。この庭に立てる槻の木 こと古りにけり
うま酒を呑み暮しけり。はらからの 肩白たへに雪の降るまで
天も 水も一つに見ゆる海の上に、浮きて見ゆるは、佐渡の島山
天傳ふ 日はかたぶきぬ。たまぼこの 家路は遠し。袋は重し
里べには、笛や太鼓の音すなり。深山は、澤に松の音して
わが宿の竹の林をうち越して 吹き來る風の音の、きよさよ
たらちねの 母がみ國と、朝夕に 佐渡の島ねをうち見つるかな
我が宿を 我の やぶとし荒せれば、亂れても鳴く 蟲の聲かな
わが宿の竹の林は 日に千度行きて見れども、あきたらなくに

大抵は内にひきしめて、自分の物にしようとせりつめて行くから、暗合は少いのである。

いそのかみに 旅寝をすれば、いと寒し。苔の衣を我に貸さなむ

世を厭ふ苔の衣は いとせまし。かさねば疎し。いざ ふたりねむ

此は良寛の作と傳へてゐるだけでも、をかしくなる。小町と遍昭との石上寺イソノカミでの贈答として名高過ぎる位のもの。「岩のうへに」が、寺の名の石上になつて居るのも妙だし、「世をそむく」が「世を厭ふ」になつた位の事では暗合ではない。たとひ、口を衝いて自ら生れたとしても、此を又どうして自分の歌だと考へたらう。思ふに、やはり官女の繪と僧の畫に贊を頼まれた時に、古歌を書いたままであらう。第一かうした贈答を、良寛が一人でふつと作ると言ふことも考へられない。此以外は、譬へば「あるはなく、なきは數そふ世の中に、あはれ 何時まで 我が身なげかむ」が「あはれいづれの日まで」だけを記憶違へした程度だと言へる歌にしても、良寛が、ふつとある時創作心が、記憶中のあるものに觸れたのだ、と言ふ説明はつく。

其ほど類型以上のものさへあるのである。其はもう、本歌どりの歌と言ふ程度をのり越えてゐる。語の上の類型に止るものを避けて見ても、相當に前型を指摘することが出来る。其で居て、さうした古歌と並べても、別に生命があるのは、古歌の中の語の用法と違つた形に活して居るからだ。古歌の中に生きてゐる語句の古典的な活力を捉へて來て、新しく自身の生命を活して來た所にあるのだ。古歌の語句から、促された新生命の發動、さうした處に、良寛のやうな態度によつて、

自由に現れて來るものゝ形が見られるのである。さうしてさう言ふ能力のある彼の、語より幾歩か先ツキのものを感受する力を見ることが出来る訣である。

何にしても、良寛の歌に見えた「詩」は、單に歌から出て居るのではない。その漢詩の上における力が出て來たものと見られるのである。

四 明治時代

一 池袋清風

明治十四年の末まで

さみだれの雨のはれ間を吹く風に、^{アヲチ}花散る庭のおもかな

明治十五年中

谷の戸に 雲を残して霽れにけり。横川^{ヨカガ}の奥の夕立の雨

さまよの雲の姿を まづ見せて、出で来る月のおもしろきかな
秋の野の草の庵を立ち出で、夕の空をながめつるかな

明治十六年中

くぬぎ原 梢の枯れ葉散りはて、緑にかへる春の暮かな

瀬戸小舟 鼓ならして騒ぐなり。鯨入りけむ。天の橋立

明治十七年中

白たへに梅ぞ散り敷く。小笠原 下根の雪も いまだ消なくに

つゆばかり散ると思ひし 秋萩の花も 残らずなりにけるかな

雲かゝる杉の梢を底に見て、あやぶくわたる 飛驒のかけはし

なきがらを なほ目の前に残しおきて、いかなる國に 君はいにけむ

明治十九年中

長月の長夜も明けて、長崎のみなとに近くなるぞ うれしき (故郷へ歸る舟のうちにて)

明治二十年中

朝なく、立ち出で、見れば、白雲の底に聞ゆる谷川の音 (比叡の山に避暑しける頃)

雨過ぎし松原行けば からかさ^{カラカサ}に落つる雫の音のすゞしさ

明治二十一年中

見るがうちに 船のともし火かずそひて、神戸の港、日は暮れにけり

明治二十二年中

嬉しくも 神のみ國に、えびかつら 榮ゆる時にあひにけるかな (奉教記念日に寄遺(?)述懐)

明治二十三年中

なつかしき朧月夜に、鴨川の柳のかげを 行き還りつゝ

しづが屋の園のもろこし 穂に出で、秋風すゞし。鎌倉の里 (をりにふれて)

明治二十四年中

春の夜の汽車の窓こそ かをるなれ。菘^{ムナ} 咲く野を 今や過ぐらむ (をりにふれて)

明治二十五年中

大舟のまどより見れば、名も知らぬ離れ小島に 霞たなびく
鯛の鳴きたつ山の 杉むらに、残る夕日のかげの さびしさ
むら雀 ねぐらに騒ぐ聲やみて、月こそ出づれ。園の竹むら
いくばくの夢をのせてか はしるらむ。夜ふけて 汽車の音の聞ゆる
山もとの松のあらしのこゝちして、汽車こそ過ぐれ。朝霧の中に
名も知らぬ高嶺に 雲の歸り来て、日は暮れにけり。旅の山みち

明治二十六年中

山もとのしづが垣ねの花ざかり 麥生の末に見えわたるかな
雨そゞく 野なかの森の夕鴉 なく聲寒くなれる秋かな
垣内田^{かきつだ}に新藁敷きて、しづの子が遊ぶ冬にも なりにけるかな
枯れ尾花、かげ澄みわたる白川の水の緑の 寒くもあるかな

明治二十七年中

夕月のかげを湛へて、濱川にさし来る汐の音の すゞしさ

明治二十八年中

蛙まで 疊のうへにさがりけり。田なかの里の五月雨のころ

明治二十九年中

山寺の佛の顔に、蝸牛はひこそそのぼれ。五月雨のころ
霜枯れし浅茅が原を 行く水の光るも寒し。冬の夜の月
この川も限りなるらむ。橋越しに 海の白帆の見えそめにけり

明治三十年中

ひとり行く旅の山道 ひぐらしの鳴きたつばかりさびしきはなし

明治三十二年中

山里のやれし障子^{サシ}や つくろはむ。霜風寒き冬は 來にけり
蕎麥の花 芋の葉枯れし初霜に、大根の緑 目にぞ立ちける
をちここに 麥蒔くしづの見ゆるかな。山田の原の小春日よりに
霜がれて残る山べの茄子畠に、風の音寒く 日は暮れにけり

明治三十三年中

富士の嶺は をりく夢に見つれども、憂き身は 何も幸なかりけり

(七月十二日の曉、富士の夢を見て)

池袋清風、年三十五の明治十四年以前の舊詠から、歿年明治三十三年、五十四の初秋に到るまで

の製作數千首の中から、鎌田正夫さん並びに井上通泰さんに選抜を頼んで、弟子正宗敦夫さんの出した「かゝしのや集」から、此だけの歌を抜いて見た。

明治の新派和歌運動當時は、清風の名を言ふ人が、其でもあつたのである。併し今になつて見ると、知る人も忘れたやうになり、大凡はもう當時の事を書物の上でばかり測り考へようといふ、次代の人の言説がとり替つてしまつた。此では、池袋氏の名は、書き物の上に現れても、ある必然性が、新派和歌運動史の上には見られなくなつて來るのだ。

我々の心づかなかつたことで、言ひ忘れてはならぬことは、新派短歌が基督教文學の影響を受けてゐたことである。此は、新體詩の方では、既に明らかになつて居ることだが、歌の方には省られなかつたのではないか。新體詩にも、短歌にも古く働いた人の中、大西祝・湯淺吉郎の如き、又、徳富健次郎・北里闌、此等の人々は、京都、同志社を出た人であつた。さうして、池袋清風を指導者として歌を作り初めたのである。「淺瀬の浪」初篇・二篇を見ると、其様子が知れる。

九月十一日(明治二十六年)、東京なる大西祝より

婚禮せし由知らせて、祝をも乞ひければ

限りなき學びの海の底に入りて、龍の都の妹や 得つらむ

清風自身も、十三年九月京都に上つて、同志社に入學する前に、基督教を知り、新島襄にも會つて居るのである。十四年には、洗禮を受け、翌年、同志社別課神學生となり十八年卒業したと言

ふから、本格の信者である。此間、同志社の學生に請はれて和歌を教へた。卒業後は、同志社女學校教員となり、又同志社の圖書掛となつた。明治二十一年、門下の作、自作を選集した「淺瀬の波」を出した。同じ年「和歌概論」を東京日日新聞に、郵便報知新聞には「和歌の略史」を連載した。勿論、時代が時代であるから、此等の論にも多きを望むことは出来なかつた。が、既にある組織を思つてゐる點は、他の人々より遙かに進んでゐたと言へる。此は、彼の周圍に、神學や哲學系統の學問に親しむ人々があつた爲であらうと思ふ。清風が、歌論を公にするに少し先だつて、大西祝は「和歌に宗教なし」の一文を六合雜誌に載せてゐる。此年には、二三年來、新舊共に頻りに行はれて居た歌壇の議論が、著しく新しい方に向つて居る。若い知識階級の人々が、歌の方角を摸索し初めたのである。

而も、其答へを聊かながら用意して居たのは、彼ばかりであつた。「淺瀬の波」は二十一年に出して居るが、之に載せた歌は其前の製作にかゝるものである。「かゝしのや集」の抜き歌集で見ても、單に平明な桂園派式のものに過ぎないやうに見えるが、此とて、此頃としては、極めて新様であつたのである。日向(都城)の人だけに、歌風は八田知紀を越しての桂園流であつて、強ひて古典的な様式を採らず、題材もありふれたもので、人の詠み忘れたものを、事もなげに歌ふと言ふ、心の觸れ方と、詞の出方に、靜かな融合を考へてゐると謂つたものである。さうした點に、新しさを常に盛り出さうとするには、その人の心構へが非常にむつかしくなる。ともすれば、

平俗に落ちこんでしまふものである。おなじ八田流の先輩とも見るべき、高崎正風その他の歌を見て、さうした、陥るべき所におち込んでゐるものが多い。さうして其が、明治年代以降の御歌所風と稱するものに、久しく傳る歌風だったのである。

江戸の浮世畫師の殆すべてが、晩年において皆救ふべからざる安易平俗な畫風に墮落して、筆力も、描いた肢體・容貌も、類型に固定して、感激のないものになつて居る。此は、彼らに先人の畫業に對する理會や、素養がなかつた爲である。其上、何の理論もなく技工のまゝに流して居た故である。所謂舊派短歌も其である。單純な技工、其がどうした質を持つたものとも考へることなしに、常に乏しい心田の上に耕しくして、遂に土壤を疲らしてしまふやうになつたのである。清風の作物を見ると、平明な歌口を常に湛へ持つて居たことは、まづ彼が常に理論と、若干の學殖を保つて居たに因るのだらう。而も凡晩年まで、徐々に新しい方への進みを止めなかつたのは、何よりも注意してよいことだ。此は東京よりも、京阪生活に親しんで居たとは言へ、友人は東京に多く、發表機關も東京に持ち、さうして常に接する者は、當時の知識階級、尖鋭な近代人と思はれて居た耶蘇教徒が多かつた。

外國文學の影響も、當時は、此等の人々から生きて取り入れられた。更に直接には、聖書・聖歌の類が持つ文學質が、若い時代には深い誘きとなつた。此甘美性に囚はれた人々が、新體詩を多く作つた。従つて短歌を會得すれば、此にも、新文學液を注がうとするのは、當然である。

マリヤ クリストをほらむ(二十三年)

ゆだや野の淺茅が露に、ひさかたの 月の光りの、やどりけるかな

密室祈禱(三十一年)

妻子だに知らぬ室屋の祈りこそ 神のうくべきまことなりけれ

かう言ふ歌の少いのは、寧ろ、不思議な氣がする位だ。歌の情調が容易に、基督教の知識によつて動じなかつたからである。だが、全面に變化するよりも、次第に末梢から移つて行くのであつた。其よりも、もつと大きなことは、歌その物の上にあつた。清風の歌自體が變る事よりも、我々の短歌が多少づゝ、違つた方向を暗示せられて、最初の一步は其から踏み出したことである。即基督教徒による新しい文學要求が、新體詩を今様や和讃から拾ひ上げた如く、歌をも歌から探り出さうとした。だが歌はもつと、我々にとつては、頑な古典であつた。だから、表面、耶蘇教文學の影響もないやうな風な静けさを保ちつゝ、其でも變化は、此邊から起つて來たと見るべきである。其は新派短歌の間に流れてゐた一筋の地下水であつた。後年「明星」派の歌が、星を詠じ、菫に歎くものとせられるほど、西洋臭味ある題材を専ら擇ぶやうになつたのは、源頭がこゝにあつた訣である。明星以前に顯るべきものが、久しく隠れてゐたのは、與謝野鐵幹改革を宣した時、「亡國の音」を以て、當時の歌を罵つたから、さうして彼の生活も亦、朝鮮に漂遊するに適する氣を負うた傾きになつて居たから、姑らく形を潛めて居たものと言ふことが出来る。

明星では、耶蘇文學に替へるに希臘・羅馬神話又は、多くの「花語」の類を以てした。意識して、さうした訣ではない。だが、どうしても現れる筈のものゝ、現れて来たことに替りはないのである。

清風は和歌に立ちながら、新體詩をも論じた。世間では、新體詩を以て和歌に代ふべしとする者が多かつた。その對抗策として、短歌の兄弟様式たる長歌を復活させようとするもの、今様を興さうとするものなどがあつた。其間に極めて自然に、和歌改良論が起つて来た。さうして其實際運動を、疾くから稍自覺して試みて居たのは、清風位のものであつた。

若し一つの構圖を積つて見る事が許されるなら、當時の歌壇を三つに分けて見たい。歌人と言はれた、單に文學としての短歌を作る人々、其から歌人といふ職業に對して常に蔑視の目を向けて居た國學或は和學の學者、其外に此兩者に互つて居た歌人で學者なる者、此三つであつた。一は、歌に遊ぶ弟子を擁して、歌の作法を師範して居た者である。此人々の筋は、御歌所にある人々に續いて居る。だから學者系統の人は、其中から落伍して行つた。二は、古學を學び教へると共に歌を作る者であるから、歌風については、多く圓滿な理會があつて、偏することが尠かつた。其でも萬葉を祖述する者、新古今に據る者、各時代の歌の融合したものを本質に近いものと見て、之を作らうとしたものなどがあつたが、作物から見れば、必しも單なる歌人とさして違ひのない者も多かつた。だが態度としては、折れ合はぬ者があつた。だから理論としては國學者式で、學

に準據を持たぬものは、頭から否定する。其志を得たものは、大學講師その他の官職について居たが、民間にある者は、とかく古來の世間を警めると謂つた批判癖が出て、歌よみの歌などは、皆反則として是認せない。第三の者は、市井に居て歌よみである所の町學者。同時に學問もして居る。學と歌と兩方を以て世渡りぐさとしてゐる。だが時を得れば歌道の顯職にもなり上り、學者の權威ともなれようと言ふ望みを棄てなかつた人である。此は兩方に繋つてゐるやうで、同時に兩方から目を側められて、唯、歌を作る啓蒙書や、和文學の手ほどきの註釋類を多く出版した。かう言ふ三種の人々の中、最氣むつかしい第二の學者仲間が、新しい歌の運動をうけ容れる筈はない。尤、其人々の立ち場としては、眞淵以後のある理想として、世間の歌を萬葉集化する責任も負つてゐる訣だが、まだ其に氣づくには到つては居なかつた。

第一の歌よみ階級こそ、別に其持つ文學に操守を感じない。唯、其等の人の與へられたものと反りのあはぬ知識風なものや、學問式なものは、文學としてうけ容れる事が出来なかつた。さう言ふ點では、低い程度乍ら、文學的に敏感な所があつた。だから、第二の者を受け容れることは、此亦出来なかつた。唯彼等の知識と趣味性に受け容れられる程度の新傾向は、景樹以來の標幟でもあつたから、自由にとり込まれた。

第三の町學者は、世間上下の好尚の向ふ所を敏捷に見てとるから、勿論第一階級の人々の認めたものを、直に世に行はれるものとして、新興の歌人を棄てる事はしなかつた。だから、明治時代

を通じて、新派短歌の新人は此人々の間を氣易いよすがとして身を寄せたものである。若い時代は、常にこちたい學問人の門から生れなかつた。何時も安易な中から、新しい言立てをして出て来る。新派短歌もまづ、桂園の風を汲んだものから、出て来たのは、後の姿から見れば、眞に不思議とも言へる形であつた。

一方は、愚庵も行誡も、尙——此人の作物は添削が多く加へられてゐるのでないかと思はれる。——も隠れて相當な爲事をしてゐる。此より數年前既に「志濃夫迺舍歌集」も出、「僧良寛歌集」も板になつて居た。然るに、時は、其とは没交渉に、もつと遅れた發足點から、足を踏み出しかけて居た。

明治二十年は、歐化の風の極點に達した時と、人々から見られてゐる。此年の前後を境として、次第に日本式な運動が著しくなり、民族性格を失ふことを憂ふる思ひが深くなつて来た。さうして其を唱導したのは、當然だが、其に適當な人々と見える國學者がした。此が併し、必しも適當ではなかつた。十九年七月にはじまつた大八洲學會、及び其に近似した國學者・和學者等の運動が其であり、古典短歌が發表せられてゐる。

稍遅れて同じ年、東洋學會が設立せられて、日本以外に、支那・印度の優れた文化があつて、西洋の學風・思想に對抗するに足ることを悟らしめて、時勢の大波を捲き返さうとした。かう言ふ二つの學會の雜誌には、和歌に關する論文が多く載つた。さうした雜誌の少かつた時代だけに、

議論や作物が、影響を與へることも多かつた訣である。

反動運動が、かう言ふ形において起つて来たのは、既に西洋文化をある點まで理會し、或は其を全然無視することの無謀なことだといふことが訣つて来たからである。其と共に、國粹論をするにしても、西洋學の基礎の上に立たうとする傾向を示して來てゐる。さうして、次第に論者の年齢は若くなつて來た。二十年代の和文論の中心が、新しい古典講習科出の和文教育者の手に移つて行つた觀がある。落合直文・小中村義象・萩野由之・佐佐木信綱等が其であつた。西洋文學に對する何らかの理會が、やはり新しい短歌運動にも、必要であつた。而も短歌が、古典文學である性質上、其とり入れ方に問題がある。が、文學の本質と、文學者の生活との關聯は、理論よりも、情調の上で自ら解決のつく時がある。表面何の他奇ないやうな桂園風の歌を作つた清風が、其でも周圍に接する形において、其感じ方において、又とり入れ方において、柔和な歌口の中に、自ら耶蘇教文學のあまさを沁み出させて來てゐるのも認められよう。

比叡の山に避暑しける頃

ふけ行けば、松のあらしも吹きやみて、さやかに響く谷川の水（二十年）

くま鷹の聲ものすぎき 大比叡の谷間に響く 水の音かな

蟹が屋の旅寢の床に 響くなり。秋をよせ來る由井の浦波（立秋の日、鎌倉にて二十三年）

富士の嶺の雪よりおろす秋風の 涼しくかよふ汽車のまどかな（鎌倉より興津へ行く一同年）

此等の歌、従来の歌の見方で見るのが當然で、別の見方を要する程、特殊性が出て居ない。だが當時は、作者自身にも、讀者にも新しい生活様式なる避暑逗留と謂つた氣分が、行間に糾ひこまれて感じて居たのである。かうしたものが徹底して、作者の懐いたもの、讀者の感じるものが、どうしても歌の形の約束以上に現れて來なければならぬのである。

清風の歌は、今日「かゝしのや集」三百首足らずの外の數千首は一纏めに見るのは、ちよつと困難である。正宗さんの選擇を託せられた鎌田・井上兩氏は、その標準を明治三十年代の御歌所風の歌口において居られるだらうから、曾ては贊同して居られたものも、又全然自由な詠み口である歌も、捨てられない限りはない。又さう思ふのが當然なのだから、「かゝしのや集」ばかりによつて、池袋清風の新傾向を見ようとするのは、最初から無理が含まれてゐる、と思はねばなるまい。だがたとへば、さうした中から、亦極めて平俗なものを取り出して見ても、

信者は相愛せよ、といふ教への心を

この世より 天のみなとをさして行く乗り合ひ船は、たのしからなむ (三十一年)

新年

忘れたる友のはがきも 見ゆるかな。年のはじめは、これぞうれしき (三十二年)

乗り合ひ船などは口語臭が堪へられない。だが、作者にはある異様の感激があり、語調に特殊なしなひを出したものに違ひない。これぞうれしきは、凡庸人の感激を凡庸に發想する口語式の詠

歎だが、これぞに特殊な新しい感覺を示さうとしてゐる所も、考へられないではない。何にして、はがきなどが新題として、あるきごちなさと、其から來る一種の遊戲満足、さうしたものが喜ばれて居た時代である。だが此時は、既に翌年に與謝野氏の明星發行を控へて居る時代であった。だから、歌にも自ら新しい生活氣分が出てゐる。後年、石川啄木は、此にある感傷を寓して表してゐる。

正月も 四日になりて、彼の人の 年に一度のはがきも 來にけり (悲しき玩具)

「嬉しき」と淡く觸れ流したのに、對して、十數年経ると、別の表情が行はれて來た。其を單なる嬉しさでない。ほのかな寂しさだと解してゐるのが、自然主義以後の文學たる所以である。鐵幹・子規以前の時代の動きは、まづ清新を擷まうとするのであつた。さうして、さう言ふ動きの一番著しい代表者として、私は清風をとり出して見ようと思つたのである。彼においてこそ、作物もさうした形をはつきり示して居る。其生活を見ても、時代性を見ることが出来る。さうして、新文學の、従来の日本文學と違ふ點、理論を持つて出て來るといふ所も、此人において、まづまづ一等はつきりしてゐると言へるのである。

二 新派運動

世態の上に時の動きが、あんまりあらゆる點で一致して現れて來るものと見る考へ方は、適切で

あればあるだけに、不自然である。だが、雲行きに似て、一方へ／＼と謂つた偏りが、明治の短歌の上にも見られるのは、事實である。

明治も十年度の末までは、まづ舊態が自ら變り目に向つて居た時と見られる。舊時代の生活様式が残り乍ら、でも新しい方角を摸索して行つた社會の有様と、ぴつたり並び進んでゐたのである。と言ふよりも、歌そのものも、亦さうした變化を欲した情勢の一つの條件だつた、と見る方が、正しいのだ。

併し、新しい形を捉へるまでの足掻きは、決して單調ではなかつた。舊制度が廢せられて、新しい組織が行はれるかと思ふと、又元の形にひき戻されて來る。

太政官と内閣との關係が一進一退して變り、個々の事と言つても、八劍社を宮號に復したり、早く廢した門跡の稱を一部に許し又、すべて舊稱を復したりして居るやうな例は、幾らでも見える。早進んで見ては其缺陷が知れて來たり、情の忍び難いものがあつたりするのである。だがさう言ふ繰り返しの間に、二三步進んでは一二歩退き、又進んで絶えず時の要望に調節して合せて行かうとすることは止めなかつた。

其中途に、新しい形が多く残る。だが此ばかりでは、飛躍が容易でないと云ふ所から、一方激しい促進運動が行はれる。と同時に、一方絶えず古い均整をとり戻さうとする復古黨の牽制力が加つて來る。明治七年、板垣退助等の民選議院設立建白があり、翌年には立志社が起され、十四年

には板垣の自由黨が結ばれてゐる。十八年頃には、その黨の政治運動が激化し、二十年、彼の榮爵拜辭となる。又引き續いて、時弊十餘條の封事を上り、後却下された。此板垣の動きは頗目につくものだが、封事建白の件に關しては、五月に勝安芳の時弊二十一條の建白があり、七月に亦谷干城の意見書が出され、板垣のは八月の事になつて居る。さうして、此等三通の上書建言が、促進にも保守にも相關つて居た事を思ふと、此時代の世間が考へられるではないか。自由黨・改進黨・帝政黨・後藤象二郎の大同團結が互に絡みあつて、亦上に述べたやうな姿を見せて居る。大同團結の前身とも見るべき丁未俱樂部の初寄り合ひをした二十年十月三日には、國學者・音義論者だつた堀秀成が死んでゐる。其翌日が板垣の封事の却下せられた日である。偶然ながら、時の動きの、色々な姿を包んでゐる事を思はせてゐる。

此年二月には、徳富猪一郎さんの「國民の友」が出た。一年経つた四月に、三宅雪嶺さん等の「日本人」が對抗して發行せられたのも、國粹主義者には、最早堪へ難い世の中だつたのだ。日の興奮を残して過ぎる新聞よりも、更に長い印象を留める雑誌の上に歐化・國粹の争ひを決定しようとしたのである。而も其が單なる政治・巷談中心の新聞としての外に、今一つ明治文學を形づくる側に、有力な働きとなつたのは、考へなければならぬ。

此二つの雑誌發行の間に横つた一年こそ、激しい流れが、民族精神の上に筋を引いて過ぎた時であつた。十二月二十六日から二十八日に互つて、凡六百人の政論家・壯士等を、宮城の三里以外

に放つと言ふ保安條例が出勤したのである。かうなりつたのも、條約改正延期に對する憤り、言論集會の自由に對する熱望・地租軽減の要求の三問題を中心にしての國中有志の運動が、運動其ものゝ意義を知り初めて來た所にあつたのである。

而も國粹・民權兩論者ともに、其因る所は行き止らぬ歐化に問題が在つたのである。が、其中心に動いてゐたものは、強く此時代に生きようとする心だつたのである。

此改革の氣運に乗つて、恐らく正反對の立ち場にある筈の、國學・國文學の學者文人も、自ら今までの研究や作物に、生きた時代の力をとりこまうと努めたのである。表面新しい文藝運動に反對した人たちにも、力強く拒否しようとする力その物の現れ方が、變つて來た訣である。謂はゞ、學者の間にまだ、たぎつて居た國學者の遣り所ない血が、此時勢にのつてたけり立つて來たものと見られよう。だから、明治の短歌の革新も、さう言ふ歌に對して情熱を寄せた評論の側から、見て行く必要がある。

明治九年に、「蓮月歌集」(「海人の荊藻」は早く出版せられてゐた)、十一年に「志濃夫酒舎歌集」が出、翌年、「僧良寛歌集」が出た。此とて出來るだけ先人の名作を傳へる外に、或はおのゝの江戸期傳來の遊戯三昧を、わりに狭い世間に擴める位の考へしかなかつたのだ。新しい活版技術をすら利用するものは少かつた。だから大體において、江戸の歌書と何の擇ぶ所のない歌集・歌書・作法書の刊行に止つて居た。個人の歌集としては、現存の人のにも、相當よいものも出た

が、多くは故人の追善の爲のであつた。

維新殉難の志士の歌を集めたものも相當に出たが、凡、事もない幕末の歌壇とおなじやうな平靜に還つて、時々明治或は開化など言ふ所謂新風を意味するやうな名稱のものが、後から／＼盡きずに出た。十年度位からが、殊にさうした色彩の強いものゝ出た訣は、世間の見極めがついて、文人らしい安易に就かうとした爲であらう。十年の「明治花月歌集」(下澤保躬)、十一年には、「開化新題歌集」(大久保忠保)、「明治百人一首」(岡田霞船)、十三年には、「開化新題歌集」は二篇を出してゐる。又、「明治開化和歌集」(佐佐木弘綱)、翌年には同じ人の「開化新題和歌梯」すら出てゐる。つまり歌に遊ぶだけの餘裕が世間に出て來たのである。此間に最早出て、最長續きしたのは、明治九年に第一編を出し、三十二年に第九編を出した橋東世子・橋道守編纂の「明治歌集」である。此も二十年の第七編位で、年月を隔てゝ續篇を出した點から見られる如く、その微かな役目すら過ぎ去つたのである。

かう言ふ間に、古い作法集の翻刻が次第に現れて來、遂には新しい物が目立つやうになつて來た。十二年に「雅言解」、十三年に「増補冠辭例」、十四年に「改正増補和歌麈の塵」、十七年に「和歌入門」、「布留の山婦美」の翻刻が出た。明治十九年になつて初めて現れた佐佐木弘綱の「詠歌自在」は、此種のものでは新様式を創り出したものでもあり、同時に彼をして歌道の師範者としての隠然たる勢力をなさしめたのである。さうして彼の事業は、彼の助力者であり、同時に後繼

者であつた信綱氏の努力の多かつたのは固よりである。二十四年、落合直文の「新選歌典」が出て、右の書を凌ぐ出来榮えを見せた。翌年佐佐木信綱氏の「歌の葉」が出、又三十年に同じ人の「詠歌辭典」が出て、麓の塵・布留の山婦美系統の物では、到達すべき最高い點に行きついたと謂へる。

かうして啓蒙書の出版せられた一方に、もつと本格的な歌の本然の姿を知らうとする方面へ進んで居た動きを知らねばならぬ。

明治十五年に、皇典講究所並びに分所が、東京と府縣々々に置かれた。明治維新の精神方面を分擔した國學者の事業は、扱、成つて見れば認められざるに等しいと扱ひしか受けて居なかつた。矢野玄道は「檀原の宮に還ると思ひしは、あらぬ夢にて ありけるものを」と歎息した。國學者は、官途にありつきを得たものゝ外は、多少とも皆かうした慷慨を懷かないものはなかつた。其と今一つ、自分らの學統傳來の理想と反した歐化主義の時勢の波が、とめどなく氾濫するやうに見えた。此立ち場に立つての社會批評が、國學者の間には、明治末年まで持續せられる癖を作つた。歌の上で見れば、後年、林麴臣が自らも歌は作り乍ら、頻りに遊戯文學として短歌に遊ぶ徒を罵つたのは、其著しい姿である。二十五年、「歌よむわざを學生にもどく」「戀歌は詠むべからず」などを發表したのは、「國文學」に關係のない國學者一部の自由な意見の吐露であつた。かうした國學者の氣風は、平田篤胤以後の月花の風流を恥ぢた國學者の傳統の傾きを示したものだ

つたにしても、國學の理想が、かくの如く蹂躪せられても、尙屑々たる歌文に遊ぶのが楽しいのかと言ふ怒りだつたのである。何等批判なく新政の註釋づけをし乍ら、文學御用掛或は大學講師の類にとり立てられた者は、多くは傳統から言へば遙かに傍流にあるものであつた。又官邊に縁故を結ばずとも、江戸の歌人・誹諧師がしたやうに、歌道の師範として、何の主義もなく文學を弄ぶもの、すべてが國學のある方角から見れば、末流邪道としか見えなかつたのであらう。

全體として世を憤る人・怒りを主として國學者及び新興の國文學者に向けようとする者の出て來るのも、尤な時勢であつた。

皇典講究所が出来、其外、國學者の満悦を促しさうな事は、ちら／＼實現せられ出した。丸山作良及び矢野玄道などが、晝提灯を提げて歩いたり、「先皇遺民」などゝ名のつたりするやうな煩悶時代の續いた結果だが、當時の西洋文化をとりこまうとする熱意は、更に強くもあり、不斷でもあつた。明治二十年は、其小さな頂きに達した時と思はれる。世間で謂ふ、鹿鳴館の舞踏會が行はれ、又攻撃せられ出した此年の五月には、玄道が世を憤り乍ら死んでゐる。

國學者が持ち越した學問も、歴史典故に關するものか、又末流餘技ともある點では見做された短歌に與るものでない限りは、用ゐられる事が少かつた。

二十年はちやうど、其色々な汐の八百合ヤハアヒに流れ合うたやうに見える時であつた。内的の情熱が出口を求めて居た最中であるし、又無爲に苦んだ學徒がはけ口を、知らず／＼に探してもゐた。其

に文運は既に歌の上にも興らうとしてゐる。其に外的には、政治が改革運動・現状破却の頂上に驪りつめてゐる時であつた。前年來の文壇と比べると、今日において著しく見られるのは、二十年・二十一年に互つての著しい文學活動である。

追つて二十三年以後、國學院・東京大學附屬古典講習科の開設と言ふ事實を控へてゐるので、其先觸れが、自ら出て來るのも、當然である。此より先十七年には、明治・大正に互つて、御歌所派の強敵として働き續けるやうになつた海上胤平が、「東京大家十四家集評論」を出版してゐる。胤平は劍客出で、法官でもあつたから、純粹の國學者とは言ひにくい、氣概の激しい所は、國學者と通じる所が、餘計にあつた筈である。歌と國學とを加納諸平に學んでゐるから、まづ紀伊本居派の系統である。しかく彼自身自負してゐたからでもあらう。其論難の癖は年を逐うて激しくなつて來た。十八年には、鈴木弘恭の「……十四家集評論辯」が出てゐる。「十四家集」其物は、十六年に出て居た。此間一年づゝ經過してゐるのだから、單行本とは言へ、時勢の悠々たることを語つてゐる。時代の動きが激しくなつて來たといつても此程度だつたのだ。二十年に先だつ二三年は、雜誌類の頻發した時代で、其が必しも政治雜誌ばかりではなかつた。「國民の友」が政治雜誌以外にも領域を開いて成功して來た所から、社會改良、又基督教式教養を興へようとの意味のものが出て來た。さうして其が最濃厚に、文學領域に切り入つて來た。本派本願寺派の「反省會雜誌」が出たのも、其反動であり、又影響を反面に露してゐる。「以良都女」が七月に

出た。「女學雜誌」(十八年)などの影響はあるが、國民の友の反映を多く含んで居る。二十一年には、「少年園」が出た。青年文學雜誌の源頭に立つてゐるものと言へる。此が「文庫」の前身である。

今までは單行本の時代で、此からは雜誌によつて、文學及び文學論が發表せられることになつて來るのである。だから、應酬も、反響も、速かに現れて來るやうになつた。其と共に、新聞が明治初年の漢文もどきや、雜誌に出るやうな戯作狂文の半遊戯文章をも載せるやうになつて、書かれたものゝ反應は、一層敏活に起つて來ることゝなつた。

だが其等は、外的の原因であつて、内的には、新しさを欲する、現状に對する辛い批判を行ふ改革運動の影響と見ねばならない。其ほど急にいきり立つて、皆いら／＼と議論をしまじめたのである。

西洋主義に立つて、而も之を民人に施かうと謂つた位置に居た末松謙澄は、後年まで、文學美術の翻譯論を發表してゐたが、若し夙く、大學や雜誌に立ち場を持つ事に氣づいて居たら、或は、坪内逍遙・森鷗外に似た爲事はして居たかも知れない。彼の「歌樂論」を東京日日新聞に出したのは明治十七年であつた。彼だけが特別な位置に立つてゐる如く、此後も暫らく、彼の後を尾いて來るものがなかつた。

胤平同門の先輩飯田年平はまだ健在で、十九年から二十年にかけて「石園歌話」を大八洲學會雜

誌に出してゐる。其同じ誌上で、旗野餘太郎（櫻坪？）が、「和歌には韻ありやなしやの疑」を書いて居る。此にも直に、相當の反響があり、後年まで問題を持ち越した。古典科の小中村義象・萩野由之の「國學和歌改良論」が單行せられ、其中の萩野氏の「和歌改良論」が、最注意を呼んだ。之に對して、二十一年の初頭多くの論評が出た。林龜臣が三月になつて、「言文一致歌」を東洋學會雜誌に出したのも、かうした時勢の現れで、若し短歌の本質に叶うた爲事だつたら、可なりの大事業となつた筈である。彼にはかうした飛躍が特色であつて、而も尋常の事であつた。中年から彼は英國公使館に出入して、さとう公使を教へた。其爲、晩年まで其好意を受けて居たのである。進取と頑守と兩方の心理を備へてゐた人だ。此年になつて、東京日日（六月―七月）に「和歌概論」を連載した池袋清風は、五月に、自歌及び門下の歌を集めた前述の「淺瀬の波」を出した。又八月には「和歌の略史」を郵便報知に連載した。彼は此後十年立つた三十三年に歿した。其年は、新派短歌運動の本格式になつた年であつた。池袋氏の説以前に短歌について新意見は出なかつた訣ではないが、纏つた意見としては、此人を最初とせねばならぬ。當時としては、組織立つた研究をして居て、此後も古代・中世の短歌に對して、歴史基礎を築かうとする熱意を、數多の論文に示してゐる。

萩野由之は、古典科出では、最強靱な學問素質と、冷靜とを持つた人であつた。落合・小中村（池邊）兩氏と合同で多くの爲事をしたが、素質が違つて居る。併し此頃は若かつた。文學運動にも

興味を持たずに居られなかつたのである。北邊佐渡島から來た人の素朴と、天稟の聰明で、今の歌が歴史の上で、どう言ふ位置をうろついて居る、と言ふ事は、見透された人である。如何なる歌が將來出て來るか、苦しまれ作られての上の事である。又此人後來の業績で見ると、其方向は無理であつたと見てよい。唯過去と照し合せることが、即決式に出來た人なのであらう。公表したもの、私的のものにも、和歌に關した書き物は相應にあつた。尙翌二十二年「和歌及び新體詩を論ず」（十二月）が出た。

長歌は、在來短歌ばかりで押して來てゐた長い時代の後、明治に入つて、實はもつと自由に長い思想の陳べられる様式が望まれて居た。ところへ、西洋詩の翻譯などが、ぼつ／＼見え初めたので、新しい刺戟を受けたのである。

江戸時代から長歌製作が頻りに懲懣せられてゐたのが、こゝに芽を吹かうとして來た訣だ。夙く十三年に、「歌道本義神風の伊勢の海」が発行せられた。著者村山守雄。此書は昭和に入つて、子、村山龍平の手で再版を出した。二十年には、「露園長歌集」を出し、又「明治長歌集をつくらむの主意」と言ふ論を、大八洲學會雜誌に出してゐる。さうして二十一年には、「明治長歌集」を出してゐる。

此二十一年には、國民の友に徳富蘇峰さんが「新體詩」を論じた。長歌に對しての近代風な、漢詩とも違ふものを標榜したのだが、恐らく此頃が使ひ初めであらう。名としては一時的の物だつ

たが、長く用ゐられるやうになつた。

短歌・長歌共に、何となく舊風では憚らぬものが感じられて来て、之を處置しようと言ふ時期になつたのである。だから、末松謙澄以下の論旨、長歌・新體詩にも互つてゐるのである。

「國民の友」から宮崎湖處子等の出たのも理由のあつたことだ。井上通泰さんは「新日本詩人の評」を書いてゐる。單に桂園の歌にばかり趨かなかつた時代だつたのだ。同年九月「長歌改良論」を佐佐木弘綱が発表した。海上氏は之に對しても、翌年四月「長歌改良辯駁」を出版してゐる。

此二つは、當時としては實行價値のあつた論である。二十二年になつて、池袋清風が「新體詩批評」を續け、森鷗外が之に應酬した。

こんな間に、短歌の活路を、新しく同じ徑を踏み返すことによつて見出さうとしたのが、井上通泰さんで、新しい立ち場から御歌所派先輩たちの本領を吟味した訣である。「香川景樹の傳」を書いた。その後、柵草紙に「桂園叢話」の類を續載して、二十七年に及んで居る。此年は新派和歌が、既に誕生しようとしてゐる訣だ。「桂園叢話」の三十回に互る間に、第八以下第十七まで（二十四年八月—二十五年十二月）は、松岡國男の名で發表してゐられる。新體詩に一つの傾向を開かれた、後年の柳田國男先生も亦、桂園の作物について、新しい道を見出さうとして居られるのである。

二十一年から二十二年に互つた内田周平氏（遠湖）の「詩人は國語を以て歌はざるべからず」の

論は、漢文學と獨文學に素養のあつた人だけに、書くことには、こゝがあつた。此などこそ、眞の自覺を以て書かれたものであると謂へる。直接には影響を與へなかつたにしても、新派短歌の運動にも早く、印象してゐると見られよう。

明治の短歌革新の一つの元標のやうになつた萬葉集註釋事業は、江戸の國學者傳來の考へ方で、極めて難儀な、而も極めて重大な國家事業のやうに思はれて居た。明治九年十二月七日、（文學御用掛）三條西季知・高崎正風建白して、萬葉集註解書を撰らるべきことを上進し、二十六日、宮内省より、萬葉註疏編纂を近藤芳樹等に命ぜられた。此年、島木赤彦が生れてゐるのも、偶然を超えたものを感じさせられる。十二年に到つて、土佐人鹿持雅澄遺稿「萬葉集古義」の大作のあつたことが訣つて、之を出すことになつた。九月十六日、編纂は中止せられた。十二月になつて、新しく萬葉集古義校正の事業が初まつた。其が十四年たつて、二十六年に刊行せられた。木板大字であつたのを、三十一年、吉川半七に出版を許すことになつて、三十卷本が出来たのである。

この二十二年には、「萬葉集美夫君志」初巻が出、又おなじ作者——木村正辭氏——の「萬葉集書目」が出来た。前年既に「書目提要」が出てゐる。正辭は、萬葉學の興隆するまで、江戸以來の研究方針を持ち續けた人と言ふべきであるが、歌は、萬葉が心に觸れて居ないことを示してゐる。つまり學問と文學——もつと廣く言へば生活全面に、知識と感情とが別々に働くことを、何とも思はなかつた舊時の學者歌人の態度を露に見せてゐる訣だ。さう言へば、雅澄ほど、萬葉を

敬愛した學者でも、其「山齋集」に收めた歌は、萬葉卷十七以下の風に出て居ない位である。

二十三年頃からぼつ／＼萬葉に關する文章が見え初める。正辭氏の文は勿論、源實朝論（小中村義象）が出た。四月、「日本文學全書」が出、十月初めて、「日本歌學全書」が出た。此最初からの計畫として萬葉集を收めることになつて居た。萬葉の出たのは、翌年九月以後十一月に互つて居る。さうして此年で最大な事は、三上參次の「日本文學史」の出版せられたことである。ここで、從來木板活字本、或は「略解」、稀に「考」などに據つて見ることの出來た萬葉集は、一冊二十五錢すべて七十五錢を拂へば、讀むことが出来るやうになり、簡明な頭註もついてゐて、念書人を喜ばしたことが一通りではない。此意味において、弘綱父子の萬葉普及の功勞は記憶せられるべきだ。

雜誌の執筆者の匿名の者は、今日もはや推察出來ぬのが多い。東洋學會雜誌に、七八月に互つた白手伊普の「將來の國歌」の如きも、其である。注意すべき書き物だが、「知らで言ふ」を綴つた戲名が、同時に、西洋らしい感で、興を引く。

この頃には、既に新體詩には、宮崎湖處子が出、又國木田獨歩も出ようとして居たが、歌にはまだ一人の眞の新しい作物を出すものがなかつた。其は其訣で、明治の小説が江戸の戲作と殆絶縁した形で、世の中に出て來たと同じ徑路で、新體詩が出て來、其が段々文學式な内容を深めようとする時であつた。だから前々から數人の長歌論者が立つて、新體詩を日本式なものに引き戻さ

うとしたのであつた。東京大學を出た新しい文學士和田萬吉が「短歌を排して、長歌を興すべし」と言つたのが、其議論としては進み過ぎのものだつたらう。之にも反對が多かつた。和田氏が頻りに「短歌排斥長歌振起」の論を唱へたのも、此年の注意すべき事件だ。

前に述べたやうに、一概に國文學系統の人々と謂つても大體三通りの違ひがあつた。其が學校出の人たちを加へた爲、ふり合ひを替へて來た。純粹の國學出のもの、國學者の範圍にあり乍ら歌ふ時には狂體などにも足をふみ入れたもの、其から新時代の國文學研究者、此三つの對立は久しく續き、中でも初めの二つは、世間では其ほど目立たずに居たが、内らではよほどの差があり、互に少しの差違をきびしく守つて、一つは道義の城に立て籠り、他は専ら文雅の流れを進んで、自然世間との交渉の多い書物を出して行つた。大體、講究所・國學院及び國學院にすら容れられない激しい慷慨を懷いてゐた人々、今一方は類題歌集や作歌法などを頻りに出し、多くの文學上の弟子を取つて世過ぎをした町學者である。新しい國文學の人々は、帝國大學の國文科を出て、啓蒙時代の哲學や、博言學や、修辭學や、さうしたものもを學んで、其處にまだ、前代以來の講義を續けた講師たちの説く所との調和が完全に見出されなかつた時代である。而も此派は極最近まで、大體において、文學を論じる事深くなつて行つたけれど、自らの國文學を創作することが少かつた。理論は進んだが作物のない人々は、併し此人々だけではなく、全體としても國學・國文學者には多かつた。殊に明治の文學は、かう言ふ人々以外の、唯の文學者又は享樂風に文學を扱

ふ他の學者などによつて、推し進められて來たのも事實である。
此間に古典科を出た落合・小中村等の國文學者が、純文學でも、純國學でもない間の態度乍ら、
した爲事は注目せられなければならない。先に述べた日本文學全書二十四卷が計畫せられて、多く
の流布本が、活版になつたのである。

三 正岡子規

板伯入閣

自由よ。汝はもろともに
輓軻不遇のはたとせを
過せし友を失ひき。
偽り多き其友は
汝を欺き、束縛の
奴隸と 汝は賣られけり。
あはれよ 自由。しかはあれ
安かれ。汝を繋ぎたる
鐵の鎖は、誠ある

神に解かれむ。國民は
汝を助けむ。あゝ自由。
鴉の頭白くなる
日を頼むとも、なか／＼に
頼むべからず英雄は

花守りの 花にそむきし怨みかな

——正岡子規

時事偶感

ふぢかつら 力に立てる板垣は、柱の朽ちしるしなりけり

——池袋清風

詩形の性質上、其でも新體詩の方には、若干の文學味が受けとれる。歌の方は、如何にも適當な
表現法が見出されないので、むき出しに歌つたと言ふ處が見える。明治二十九年四月、自由黨總理
板垣退助が、伊藤博文内閣の内務大臣となり、黨總理を辭したことで、世論を湧き立たした當時
のものである。いづれも、此事件について、世の俗論以上に出た見識を見せては居ない。新體詩
は、三十年正月、前年の大小事件を回顧した作物中の一つである。今日傳る子規の詩は、二十九
年の物が最古い。其中の一つ「四季」は、當時としては、野心作である。天上と下界とを對照し
て、春夏秋冬を描寫して行く。其間に出て來る男神女神は大體において、二十六年「文學界」

などに據る詩人たちのする想像と似たものであるが、著しく現実的であり、又西洋式の神でもなく、日本式に傾かうとして居る。だがその「冬」の篇になると後の成熟した時代の泣董を思はせる内容を持つて居る。さうして、其最終の聯、

風の音をも 忍びつゝ、靜かによりて 恐るゝ、男神をとめを 抱き起し、つ
めたき唇 青き頬に 心をこめて 接吻す。やがてぞ男神 立ち去れば、少女
は がばと倒れけり。

空想の乏しい表現である。が一方、かうした材料、此が子規かと驚かれる程である。健康な精神を立てとほして居た人とは見えない。かうしたところから見れば、晩年の「佐保神の別れかなしも」の類の女神を扱つたのは、やはり西洋臭味を離れてゐないのだらう。子規にも初めには、新詩社と通じる神話式構想の、あつたことが思はれる。二十九年は、はじめて公然と、詩、其も長篇を、十篇以上物して居るが、短歌は匿名でばかり發表したか、其とも制作欲が起らなかつたか、表面傳らない。二十八年の分に溯つて見る。

陣中日記のうち

かへらじと かけてぞ誓ふ。あづさゆみ 矢立たばさみ かどです。我は
見わたせば、もろこしかけて 舟もなし。霞につゞく春の海原

船の中にてよめる歌

舟にして 家やはいづく。わたつみの見ゆる限りは、見るものなしも

冬の歌よめる中に

武藏野を われ行き居れば、上つ毛や 赤城の山に、雪ふれる見ゆ
あり明けの二十日の月の はら／＼としぐれて消ゆる 杉のむら立ち

古葉みな落ちて ものなき梢より 星吹き散らす 木枯しの風

「かへらじと」の歌は、竹の里歌に屢見える所の——一時は子規の本格調と解せられた事もある萬葉ぶりによつた誹諧味である。此がおなじ新聞日本に關係あり、子規の門下にもなつた坂井久良岐のへなぶり調に傾いて行つたのである。我々は、かうした歌に、子規の韜晦趣味を見る。さうして其は、過去の隠者文學と通じるものであることも考へる。決して狂歌ではないのである。彼は短歌の上にもあつくるしい抒情を避けようとし、又歌人に對して、ある優越感を示し、同時に溺没しきつて居ないものを見せようとするきほひが出て居るのではないかと思ふ。だが後には、かうした歌口には獨特の感覺を、自らも持ち、人も氣がつくやうになつて、語句の上に一種の擬古態度、と見えるものとなつて來た。

ていぶるの高脚机・集配人・新聞紙など言ふ類は、單にへうきんな物言ひだけではなくなつてゐることを思はねばならぬ。さうして此味ひが今も尙、根岸派の後のアララギ派には傳つて、齋藤茂吉さんの歌の持つ善良と、愛敬との一部の因子となつて居るやうだ。かうした純萬葉でもない

が、後代の歌と萬葉とで混成したやうな感じ方の誹諧が、出てゐるかと思ふと、「見わたせば」のやうな^ぶ近代の堂上風の、「もろこしかけて……」の、「霞につぐ……」の、と謂つたものが竝んで居る。「舟にして」は、其ほど熱意を萬葉に寄せてゐる所は感ぜられないが、「こゝにして倭やいづこ、白雲の……」の歌の外貌をなぞつて居る。第五句で急に纏つて来る萬葉感が三四句に及んで居る。但、五句は其ほどに反省がある訣ではなく、存外軽い韜晦味に過ぎないのだから。四句の委細^{ツドク}した所は、萬葉調を破つてゐる。でも、一首として見ると、二句までの言ひ方の空なものに響く程、形式だけが充實して來てゐる。かうした事實を、實作上に感得せない人ではなかつた。彼の萬葉ぶりは、かうした所から、理會が深まつて行つたのであらう。

「むさし野を」、竹の里歌式の本格式なもの。三十二年の「上野や黒髪山に」で見ても、子規にとつては、放ち難い姿だつたのである。同時に寫生歌の啓蒙時代の姿を示してゐるものと言へよう。「あり明けの」の歌は、杉のむら立ちが、聯絡不完全のまゝで續いてゐる。俳句・連句の上の聯想づけである。さう言へば、「はらくとしくれて消ゆる」二十日月も、連句そのまゝである。ともかく、一首の調子は通つてゐるが、從來の短歌とは變つたものである。おなじ年の歌で、語句だけを拾うて見る。

「……梢より星吹きちらす 木枯しの風」も印象風で、純然たる寫生でなく——寧、觀念式であるが——ともかく、其に似た効果はあげてゐる。「我が門に 立てる枯れ木のほの見えて、……」ほ

の^{見えて}を中心として纏つて來るものは、簡朴で氣分深い寂けさにならうとしてゐる。唯「……星疎らなり。夕闇の空」と常識に墮したものに纏つたのは遺憾だ。「苦の上 近く飛ぶ千鳥かも」活きた表現である。寫生として感じさせないのは、上句の「舟つなく三津の港の 夕されば、」である。勿論伊豫の三津个濱であらう。難波の三津でない處に現實性が見られる。だが同じ「冬の歌」の中の「風荒るゝ 伊勢の浦廻の濱荻」を併せて見ると、此すら空想以上に出てゐる訣ではないと言ふ氣もする。自分の療養した須磨を思つた歌、「……西風すさみ浪立つらしも」は、氣魄のうつものがある。但、^{すさみ}はまだ概念式であつた。別の冬の歌二首の「……大井川に 紅葉おしわけて、筏さすなり」わけての^{すさみ}だけに、生命の反省はあるが、外は助からぬ氣のするものだ。其と竝んだ「夜をこめて 熊や射つらむ」の三句以下、「曉の血しほ凍れり。白雪のうへに」、二句と放して見れば、大正・昭和の寫生歌にも通じるものを持つてゐる。

「水上は嵐吹くらし」とある「紅葉おしわけて」の歌が既に、前年二十七年にもあつて、「木枯しの風吹きおろす」となつてゐる。おなじ歌に手を入れたのが、「水上は」の方である。兩方とも冬の歌と言ひ、一方は題しらずらしいが、ともあれ、季節感が紅葉に囚れて居ない所に、俳句の範圍から、自由なものとして、短歌を見初めてゐたと見られよう。

君が著る羅紗の衣の薄ければ、な吹きおろしそ。から山おろし
こゝにも既に、誹諧味が歌に出て來てゐる。さうして際立つた萬葉ぶりではないが、古今以前の

氣分で、新語をひきずつて行かうとしてゐることも同様である。この年、

棚橋に 駒立て居れば、薄月夜 梅が香遠く匂ふ夕ぐれ

「緋をどしの鎧をつけて 大刀佩きて 見ばやとぞ思ふ。山櫻花——直文」と言ふ二十五年に落合氏の試みた繪様を更に密畫にした趣きだ。此は寧、淺香社ぶりの王朝趣味或は擬似王朝趣味で、事實時代觀の荒かつた頃とて、武家時代も王朝も、一つに感じてゐたのである。「梅が香遠く」以下が、別の調子で舊調でもあり、又俳句式敘景とも見られる。だから、子規もなか／＼正直に、他の影響を受け易い性質を持つてゐたことが知れる。子規にしても、かう言ふ歌の出來たのを、新古今風（此も當時通有の錯覺）として得意だつたのかも知れない。だから、

朝な／＼ 鶯來鳴く窓のうちに、何物語 人の讀むらむ

大海原 八重の潮路のあと絶えて、雲居に霞む もろこしの船

など言ふのを作つた。大海原は遣唐使時代の空想で、王朝物であらう。朝な／＼は、王朝時代と言ふよりも、近代生活を王朝爲立てにしたものである。何にしても、「何物語……讀むらむ」は、あまり無造作過ぎて、今では我々すら、當時の子規の、歌にした氣持が受けとりにくい。おどけたと言ふのでは勿論なからうが、まづ一葉あたりの小説を見る趣きと解する外はない。かうした無造作が、次に來る歌語に對する異様な感覺を育て、來る。若し、純粹の古典派の人だと、かうしたことも少かつたらうし、従つて此までの歌語以外の用語や、語法をとりこんで來ることも

少かつた筈である。其處に、子規のやがて持つべき強さ・珍しさが藏せられてゐるのだと思ふ。

御佛の いとも尊し。紅の雲か 櫻の花の臺か

櫻の花盛りの上野の大佛を廻る花は、紅の雲か。其とも、佛の蓮臺とも、櫻がなつて居るのかと言ふので、理くつの合つたやうなあはぬやうな、出たところ勝負と謂つた風の歌である。

紫の一本やいづれ。武藏野の叢がくれ 莖咲くなり

寫生ならば生きて來るところだが、此は唯、知識の遊戲である。觀念である。紫の一本ゆゑにと謂つた武藏野のゆかりの花を、莖かと考へて、其をゑがらつぽく理くつ爲立てにしたのだ。其當時には、尙かう言ふものを、歌にすることの出來た學者や、歌よみが居た。

紫のひととにほふ 武藏野の 草葉がくれの花莖かな

さすがに、子規はもうさうした考へ方は出來なかつた。だからやはり、新しい王朝ぶりとも、堂上風の古い歌口とも、どうとも解せられる、かう言ふものが出來て來る。

君來ぬと見し 手枕の夢さめて、櫻に残るあり明けの月

歌からは古く、思ひは稍新しいと謂へば言はれる。かうしたものを作つてるかと思ふと、一方、

丈六の佛の御手のたなそこに、雲立ちのぼる 五月雨の空

谷に生ふる葉廣柏の陰暗み、晝も鳴くなり。山ほとゝぎす

島山を雲立ちおほひぬ。伊豆の海 相模の海に、浪立つらしも

三十年代における若い作家の歌は、凡まづ「丈六の」のやうな歌からはじめるのが、常であつた。だからさしたるものとも思はなかつたが、今見れば此二十七年頃に、誇張は誇張であり、空想は空想として詠るが、其でも尙寫生態度を以て、想像に節度あらしめた處はよい。「島山を」になると、たゞの空想を擬似萬葉調——其も一貫する事なく——で語をつけたに止つてゐる。が「谷に生ふる」は内容はないが、俳句で習練した配置・配合は過ちなく、歌にしたてゝ居る。五句だけが獨立して聞えるのは、俳句じつただからである。でも形としては、此が一番歌らしくなつて來てゐる。今も、相當な値打ちのある作だ。

三韓舟中の作に擬す

雲か あらず。烟か あらず。日の本の山あらはれぬ。帆檣の上に

三韓とあるけれども、まさか其ほど、古代の人物に自ら擬したのではなからう。一二句、氣を負うたやうに聞えるが、子規のものとしては、誹諧調に安らかに聞くべきである。——かうした處に、當時は男性的な調子を、感受したのである。——なぜなら同様な詠み口の後の作は、皆長閑なものであるから。三句以下は、もう子規の本領を顯してゐる。語を此程、著實につける處から寫生歌が起らずには居なかつたのである。

焼大刀を 手にとり見れば、水無月の風ひやゝかに 龍立ちのぼる

龍は、りゆうかりようであらう。此も歌より詩、支那風な題材をとり入れようとしたので、其に

相應した調子は出してゐる。二句が洗煉を缺いてゐるやうに見えるが。彼としては、この言ひ方は此後とも續けて行くのであつて見れば、一つの姿を作る要素と見て行かねばならぬだらう。其外の一つ、此年の和漢兩様の趣向の歌について思はせられるのは、後來彼が詠史又は聯作において、聯想を自在にし、又人に其を奨めた作物における想像と、其に價値あらしめる確實性と、眞實味との問題は、既にこの頃にも、子規には、ある解決はついてゐたやうな氣がする。此などは橘曙覽の影響と、私は見てゐる。おなじ風でも、

ことさへぐ から山おろし 秋立ちて、大砲の音に 馬嘶ふなり

になると、想像を把持するだけの力がない。眞實を感じさせるだけの調子がない。此も、男性調に見られたらうが、空虚である。

その前年二十六年は、子規が新聞日本入社後はじめの作物が出た。二十五年十一月に、社員となつたのである。

松島や 雄島の浦の浦めぐり 廻れど飽かず。日ぞ暮れにける

波の音の聞も あやなし。大海原 月出づる方に、島見えわたる

夕されば、吹浦の沖の はてもなく、入り日に群れて、白帆行くなり

此位がまづ、新しい方角を示してゐた。「松島や」の歌は、まだ、こがらかつたものゝ内で摸索してゐる様子が見える。結局、實感も出ないでしまつて居る。「波の音の」は感激のない一二句が、

一首を成立しないものにしたが、三句以下は氣魄が充ちて、其で無明を突破しよう、とするだけの力を見せてゐたと謂へる。「草枕夢路かさねて 最上川。ゆくへも知らず 秋立ちにけり」「立ちこめて 尾の上もわかぬ曉の霧より落つる 白絲の瀧」など言ふ歌と並んで、かうしたものであるのは、さすがである。「入り日に群れて……」と言ふ描寫に、其が度^{カク}されずに出てゐることに氣づくだらう。

其でも、此年と前年二十五年は、歌と言へば謂へるものを作つて居る。「うちむれて若菜つむなるをとめらが かたみの底の 浅き春かも」「年のうちに などは咲かぬ。咲けりとも、雪にや埋む。庭の梅が枝」桂園流とも言へるが、やはり「筐の底の浅き春」は俳句から出たものを、「底浅し」に關聯させたまでだらう。「年のうちに」の循環口調は、子規に古くから纏綿して居るもので、俳句と本質に相違ある短歌を、まだ呑みこんで居なかつた。其でかうしたものを目がけても来たことゝ思はれる。「雨に朽ち 風にはやれし柴の戸の 何を力に叩く水鶏ぞ」「關守りの招くや 其と来て見れば、尾花が末に風わたるなり」。その趣向の幼稚、此から忽にして新派短歌が出て来たのだ、と思ふと驚かれる。此年以後子規は、日本俳句の選に努力し、作句力も張り充ちて来たのだから、其間に此だけの作のあるのも、自然とは言へ、自ら後年短歌改革に進む階程を、靜かに蹈んで居たのだと思ふことは懐しい訣である。

此年以前は、子規の歌として見るべき特殊性のあるものを見ない。一つは僅かながらも、萬葉の

歌に接したのは、此頃が初めだつたのだらう。其以前は毫も、さうした痕跡も見えて居ない。今、二十一年以後の分を順に拾うて見る。

檐の端に栽多つらねたる檜の木の下枝をあらみ、白帆行く見ゆ

ちはやぶる 神の社の榊葉を 起き臥し仰ぐ 我が住ひかな

五月雨に 四方の眺めもなかりけり。堤をゆるする隅田の川波

さみだれの間なく時なく降る空の このもかのもとに、光り見えけり

さなきだに ゆふべの風は涼しきを 縦の梢に、月も出にけり

まれ人の 今日^キは來にけり。草の戸に力の限り 吹けや。川風

花の香を 若葉にこめて、かぐはしき櫻の餅^{モチ} 家づとにせよ

君ならで 誰にか見せむ。おのれだにつたなしと思ふ みづくきのあと

——戲に畫をかきて女の許へつかはすとて

言はずとも 思ひの通ふものならば、うちすてなまし。人のことは

——牛島神社の祭りに、物言はぬ馬鹿踊りを見て

二十二年

ほとゝぎす 共に聞かむと契りけり。血に啼く別れせむと知らねば

——服部大人の故郷へ歸らるゝ……別れのつらきをりから、如

何にしけむ。昨夜より血を咯くことおびたゞしければ……

二十三年

春風の 吹かぬくまなし。野の道は、名もなき草に、花ぞ咲きける
くさくさの花さきにけり。春の野は、いづこを踏みて 人の行くらむ

二十四年

世を捨てし身とは思へど、雨の日は 菅の古蓑 菅の古笠
かざしたる花の移り香したりて、菅の小笠に そぼつ春雨
つゞらをり 幾重の峰をわたり来て、雲間に低き山もとの里
寝ぬ夜はを 如何に明さむ。山里は 月出づるほどの空だにもなし
庭も狭の草刈りかねつ。撫子の花やまじると 思ふばかりに

百首に近い四年間の作物の中から、一かどある物をと、強ひて抜いて見た。此中で、まづ無條件に採ることの出来るのは、二十四年の木曾行の「つゞらをり」だけである。此とて、先人の類型を思はせる匂ひの濃い歌だが。其ほかには、二十一年の「堤をゆるす」であるが、上句が、子規當時の語を以てすれば、あまり月竝である。よい素質を見せたのは、「このもかのもに」、二十四年の「月出づるほどの」位である。此は確かに、子規自身育てゝ行く筈のものであつた。其餘は、櫻餅の歌の誹諧味が子規得意時代のあくどさなく出て来てゐる。歌としては、獨立性は乏しいが、

後年の主張の如く、詞書きを助けに見れば、馬鹿踊りの歌に、特異な觸れ方が出て居ると謂はれる。二十三年の「春風の」「くさくさ」の「」を見ると、かうした所に、新文學に養はれたものゝ出てゐることは決るが、歌の形式に這入ると、其がこんなはかない姿に、ちゞこまつてしまふ事が思はれる。大體において、やはり趣向に終始した歌ばかりで、形式も、調子も低いものである。子規も故郷松山に居た頃から、歌は教つて居たと言ふが、此では當時の桂園派の行つて居た所までも達して居ない。池袋清風その他の人の物と比べて見れば決る。

此だけの準備を整へてかしま立ちしたのが、子規の新派運動であつた。作物に油の乗り出したのは、明治三十年或は三十一年の間にあるらしい。だが、彼の短歌に關する評論類の雑誌新聞に見え出したのは、もつと早い。明治二十五年十月「日本」入社直前には、正岡子規の名で、早稲田文學に「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」と言ふ俳句・短歌に關する一文を載せてゐる。二十六年には、おなじ早稲田文學に「歌學雜談」を書いた。二十五年は、新派短歌の上と言ひ合せたやうに、今一つの事が起つた。其は、後來子規及び子規門流と、對蹠の地位に立つ新詩社の盟主となる與謝野鐵幹が上京して、落合直文の弟子となるのである。九月の事である。

四 與謝野鐵幹

落合直文は、第一高等學校その他に教職を持つて居た關係上、弟子の範圍が廣かつた。其中には

大學その外で、國文學、或は他の科に進んで、益盛んに歌や國文學に興味を持ち續けた者も多かつた。其程又、直文は、若い精神に深く觸れる所のあつた人柄であつた。直文の學の感化をその

まゝ大學に繋いだ人たちは、二十六年高等學校を卒業して帝國大學國文科に進んだ、鹽井雨江・大町桂月・武島羽衣等の人々である。淺香社の成立したのには、色々な事情もあるだらうが、落合氏の心をきめさせたのは、此邊にあるのだと思ふ。二十六年二月、紀元節を吉日として結ばれ、二十九年四月まで、詠草發表が續けられて居た。之を見ても、前の諸氏の同級生の大學入學・卒業と、何かの關係があると見るのは、間違ひでないやうな氣もする。

此等の人の中、熱心でない人も多かつたし、又後から入社して來た人も殖えた。其翌年、直文の相談相手でもあり、與謝野鐵幹の爲の師友とも言ふべき鮎貝槐園（房之進——直文の弟）が、乙未義塾の總監督として渡鮮した。其頃は、此人と鐵幹とがあさか社の中心勢力であつた。二十八年四月には、鐵幹も乙未義塾分校に赴任した。其間、二十六年末には二六新報社に入社して、此時まで勤めて居た訣である。

あさか社は、槐園・鐵幹の渡鮮後も形骸だけでも續いて居たのを見ると、詠草を新聞日本・二六新報に發表しただけが爲事ではなく、直文中心に集る歌道執心者の團體の名で、其中發表するに堪へる物だけを出した、と言ふに過ぎないやうに見える。

鐵幹はあさか社詠草以外にも、その作物・評論を柵草紙・二六新報などに發表し初めた。歌は落

合氏風の歌と言ふ外はないものが多かつた。此頃、歌論壇で雄飛したと見えるのは、前に述べた紀伊派に屬する海上胤平である。純萬葉風ではないが、その理論から見れば、萬葉を祖述する作家と言ふべき人であつた。長歌に自信を持ち、短歌も、様式を萬葉に則るべきを楯にして、動もすれば、學と文學とを混同する所はあつた。が、學者歌人に屬する人で、歌よみにも、歌よみ學者にもつれなく當つて居た。明治歌壇では、最後まで御歌所風の歌に張り合つてゐた。鐵幹は、此胤平と、彼槐園との歌風と氣概に感じて、影響を受けた所が多かつたらしい。子規などに見ても、新聞に關聯してゐた爲、周圍の影響を受けて、政治時事に敏感であつた。唯、其は單なる世俗觀より出なかつたとは言へ、鐵幹も新聞人となつて以來、從來よりも更にさうした感激性を高めたやうである。だが、彼の議論や批評でなく、内容があつた。感情に根ざし、深い具體性のものであつた。二十三年を中心として高まつて來た國粹熱が、彼の生活状態と關聯なく、其心の方に高い正義觀を持たせてゐた。彼は學統はないが、師以上に國學者の質を持つて居た。一つは育つた環境に因がある。主として京都に成長した。父禮巖（尙綱）は、西本願寺派の僧であつたが、維新以來の志士その他との交際もあつた。鐵幹の稱する所では、蓮月も愚庵も幼にして知つたと言ふ。父は曙覽とも知つて居た。文學と、愛國の情熱が、彼の青年時代の素行と交渉なく純なものに伸びて行つた。或は其爲に、日常の行動が美的生活に傾いて行つたものとも、辯ずることも出來よう。東上したのは、二十歳であつた。子規は此時二十六。鐵幹の早熟は、驚くばかり

である。

二十七年五月、彼の第一獅子吼と謂はれる「亡國の音」を書いたのは、近因遠因相叶ふものが揃つたからであるにしろ、年はこの時やつと、二十二歳であつた。さうした青年が、二十歳上京以前に、既に唯の世人の一生を経た程の経歴を積んで、明りと陰との兩つの限を持つてゐた。さうして、才の趣くまゝに、彼の周囲を壓倒するやうな傍若無人の態度で、おし廻つたことを想像して見よ。彼の朗らかなる飾らぬ方面までも、警戒すべきものと感じさせたのも、頷かれる。謂はゞ自然主義文學以後の石川啄木の、「あこがれ」發表前後と思へば、彼の行動についての理會は、或は容易になるだらう。啄木時代と違ふ所は、彼の二十代には、政治情熱が世を揺つてゐた。其から來るある荒さが、殊に感受性の強い、國粹精神を豊かに懷いて居た彼には、あまり露骨に出てゐた。而も、反動精神は、ともすれば、寧ろ、國事犯に坐する事を望むと言つた情熱とさへなつた。其に彼自身、天才を自負するに到るやうな機會に度々遭遇してゐる。

大事の前の小事、公事に對する私事、我が身は選ばれた人、まづ我をと謂つた判斷が、若い彼の心を、先へくと誘うてゐたに違ひない。其が二六新報入社と共に、天下を負ふ士と謂ふ誇りを高めたに違ひない。彼の渡鮮には、他の事情もあるだらうが、必、彼の前に、爲す事多き地として、見えたに違ひない。それ處ではなかつた。もはや一觸即發の利那を待つばかりになつてゐた朝鮮である。事實此頃の韓半島は、天下國家に志ある者の、均しく心を燃すやうな所であつた。

與謝野氏赴任後、半年なるかならぬ十月八日京城事變が起り、嚴妃遭難・大院君入宮の事があつた。此は、公使三浦梧樓京城に著任して、一个月を経たばかりの時である。三浦氏は、十月二十六日、廣島に歸著すると共に、兇徒嘯集罪・謀殺罪の名で、一味と共に囚はれた。此事件が暗示する彼の渡鮮計畫と、其後の事業に與へた積・消兩極の影響が考へずには居られない。

鐵幹が、朝鮮に對する執著を全く捨てたのは、明治三十一年であつた。だが、此時まで、靜かに半島に起臥したのではなかつた、幾度か、本土・半島の間を往來したのである。「東西南北」(二十九年七月)も、「天地玄黄」(三十年一月)も、此間に出版せられて居た。

橘曙覽評傳

一 晩年の作物

天皇はスメラギ神にしますぞ。天皇の勅チヨクとしいはゞ、畏みまつれ
天アメの下清くはらひて、上古カミツヨの御まつりごとミに復る よろこべ

橘アケミ曙覽が、越前福井三橋の志濃夫廼舎で、五十七年の生涯を終へたのは、慶應四年八月二十八日であつた。

「此日、早且自ら起たざるを知り、一二、後事を遺命し、且つ、如カ斯ク古來未曾有の大御代に遭ひながら、眼前、復古の盛儀大典を見奉るに至らず、況や、かねての抱負も、將に達するに向はむとして、今日はかなく世を去ること、返すレも口惜しけれとて、切齒瞑目せられたり。聞く人、其志のほどを悲しまざる者なかりき。」と、臨終の様を追懐したのは、彼の長男井出今滋である。
(明治卅六年作、橘曙覽小傳)

橘曙覽評傳
この英雄風な最期の記述せられてゐる日は、京都では、既に東京行幸の爲の訓諭が出るまでに、新代アラタキヨの光りが照りわたつてゐた。

その前日、八月廿七日には、紫宸殿に御して御即位式を行はせられた。大禮の則る所は古典にあつて、中古以來、儀裝・冠服皆唐制に據つたのを廢せられた。越前福井までは、まだ其御儀の仔細が、傳聞せられるに到らなかつたであらう。今數日、世を去ることが遅かつたなら、彼の末期の心は、如何ばかり明らかであつたことであらう。三日前(廿五日)には、越後柏崎で、日柳燕石が死んでゐる。彼とは風馬牛の生活を終つたのだが、同じ越路に来て、同じ思ひに歿したことがある因縁を感じしめる。八月廿三日には、會津城の一部が落ちた。廿二日、嘉彰親王新發田城に入城ある。廿一日には、即位禮を行はせ給ふ旨の奉告に、奉幣使が、皇大神宮に向ふ。北越地方では、その十六日に、長岡藩の反將河井繼之助が敗死する。十五日には、西園寺公望が、村松に入つた。此より先、六月、北陸道鎮撫使を罷め、會津征討越後口總督府參謀となつて居たのである。十二日には、總督嘉彰親王、越後三條に進まれてゐる。この六月、軍務官知事として、會津征討越後口總督として征途に就かれ、廿七日には、敦賀に次られてゐる。その二日前、八月十日には、鹿兒島から廻航した西郷隆盛が、柏崎に來著して、總督宮に拜謁して、新潟に向つてゐる。京都では、八月九日、加茂社行幸がある。彼の死後、最近の日次ヒトナを見ると、その翌日、山階陵・後月輪東陵に御參拜。四日目の九月二日には、嘉彰親王、新發田城を本營とせられる。三日には、福井藩主松平茂昭、命を受けて、永平寺の宗規を調べ定めることとなる。九月八日改元。明治と號した。一世一元に定まつたのである。

九日、丹羽長國(二本松藩主)降る。十一日、上杉齊憲、子茂憲を遣して、嘉彰親王に新發田に謁して謝罪し、會津征伐先鋒を命ぜられる。十三日、京都では、大久保利通、江戸の事態を陳べ、發輦の期が定められる。諸侯の國々の状況で目につくのは、九月十九日、仙石久利、但馬出石城を毀つことを請願して聽されてゐる。東北では、伊達慶邦(仙臺藩主)謝罪降伏歎願書を、奥羽追討平潟口總督四條隆謨に上り、板倉勝尙(福島藩主)官軍に降る。十六日には、皇學所・漢學所が設けられる。十七日には、和氣清麻呂・楠木正成・兒島高德を岡山縣下に合祀することを許してゐられる。かうして、九月廿日には、愈、京都御發駕あり、廿一日石部、廿二日土山に著かせられてゐる。此日初めて、天長節の御儀を行はせられ、賜宴がある。之より先八月廿六日、聖誕日を天長節と稱し、賀宴を賜ひ、刑戮を止めるよしの布告があつた。光仁天皇御宇の舊制に復したのである。此日、東北では、輪王寺宮使僧、總督四條隆謨の下に到つて謝罪する。廿三日、酒井忠篤(庄内藩主)降る。九月廿四日、途上、皇太神宮御遙拜、四日市に入らせられる。南部藩・磐城泉藩・湯長谷藩・平藩皆降る。廿五日、桑名に到らせられる。長岡藩主牧野忠訓、謝罪降伏。廿六日、熱田に著かせられる。翌廿七日、熱田神宮御親謁。羽後松山藩・龜田藩降る。東征大總督參謀西郷隆盛、鶴岡入城。十月三日、掛川に入らせられる。此日、伊達・上杉降伏の報せがある。又、六日、越前鯖江前藩

主間部詮勝の出處疑はしきにより、歸國蟄居を命ぜられる。十月十日、藤澤に入らせられる。諸大名の扈從を多くして、自尊する弊を除かしめる命が出た。十一日、神奈川を過ぎさせ給ふ。その際、諸外國の船艦祝砲を奉る。十二日、品川に入り給ふ。此日、榎本武揚・大鳥圭介等、七隻を率ゐて箱館に出奔。大和柳本城主織田信及、崇神・景行二聖陵修繕の許しを請ふ。翌十三日、東京著御。江戸城を皇居と定め、東京城と稱する。十七日、朝堂に臨ませられ、萬機親裁の事告げ給ひ、詔して、祭政惟一の大典に基くことを示し給ふ。

これが、曙覽死去前後の世間の姿であつた。彼でなくとも、此間に生きて光榮を感じ、この休光を見ずして死なむことを悲しまぬ者はなかつたであらう。

彼はさすがに、詩人である。死ぬる恰も三月前、

五月廿八日より、病床にありけるまゝに、野山のけしきも見難く、臥しての

みありけるにより、つれなくさむため、大きなうつはものに水いれ、

小さき魚放ちおきて、朝夕うちながむ。

湛へつる器の水に 鱒ふらせ、海川見ざる目をよるこぼす

顔のうへに 水はしらせて飛ぶ魚を見かへるだにも、眉たゆきなり

△窓の月 浮べる水に魚躍る。わが枕邊の廣澤の池

ひれはねて 小き魚の飛ぶ音に、寝るともなく、寝る目 あけらる。

恰も明治代の正岡子規の境地である。而も其よりも、深く没入する所があり、又、時代の早さから來るうは調子の中にも、彼らしいものがある。曙覽がかうして臥してゐる間にも、天下のあり様は、刻々に著しく維新の大業に向つて變改して居たのである。如何に敏感であらうとも、一介の市井の隠士に過ぎない彼である。松平春嶽や、中根鞆負(雪江)や、橋本左内等の福井藩の主従が、此間に經過した苦惱を、身を以て感じることは、固より出来なかつたであらう。江戸將軍家の親藩であつたゞけに、春嶽主従の忠誠は目立つたが、其と共に、板挾みの境遇に苦しみ、又薩州その他の壓迫に堪へ難かつたことは察するにも、餘りがある。だから、此等の人々の苦しみは、地下の彼の心にも、通じたのである。彼の家に來遊し、又彼に學んだ人々に、歌を詠んでは與へくしてゐる。北陸道鎮撫使に従つて、會津其他の征討に向ふことを奨めたのである。各藩共に、藩論が一決した後すら、個々の人の志は、各別途に向うてゐた。だから、容易に藩士の動向は定らなかつた。殊に福井藩では、藩主初め在京する時の方が多かつたから、一致した氣勢が湧き立たなかつたことが察せられる。佐幕の氣勢は示さなかつたまゝで、進んで從軍しようとはせぬ者も多く、又其を鞭撻することも、強くは出来なかつたであらう。故老の間には、春嶽が他家より入つて、藩の運命に心を用ゐることの少いのを怨んだものもあるであらう。又、主の意のままに精勵して刑死するに到つたのを、見殺しにするほかなかつた橋本左内の先例を見て、まだ十年にもならないのである。教養が上にばかりあつて、下は極めて昏かつたのは、福井藩ばかり

ではなかつた。僅か三百年の習癖によつて、動く事より知らぬ士人の寄りあひである。春嶽の誠意は、その藩國において、裏打ちして示さなければならぬ場合であつた。

さうした間に、自由な立ち場に居た彼は、彼だけの交友範囲において、風流にことよせて、激勵することが出来た。其とて、町人と士分とは、身分違ひである。單に「志濃夫迺舍集」や、「曙覽小傳」の印象を我々が受けるやうなものでは、なかつたに違ひない。たとへば、野邨恆見に與へた歌、

愚にも まどへるものか。大勅 たゞ一道にいたゞきはせで

勅にそむく そむかず 正し見て、罪の有無 うたがひはらせ

後の歌、現實味は十分調子に出てゐる。併し輪郭を描き過ぎて、却て表現不足に陥つてゐる。つまり心はやりと、あまりに特殊事情に囚はれ過ぎた爲である。恐らく、罪の有無は、勅に背くか背かぬにある。おのが身そこに惑うてゐるか、どうか糺して見て、疑ひ迷ふ心を霽して、勅に従ひまつれ、と言ふのらしい。「愚にも」の方は、少し悠揚とし過ぎてゐて、實感が逸れてゐるやうだ。世間には、かうした愚者が多い。さうではないか、と同感を誘つたに過ぎぬやうにも見える。が、山田秋甫さんの橋曙覽傳によると、當時軍監附きの要職にあつた門下野邨氏の遲疑の舉動を憤つて、一時遠ざけたことがあつたのだとある。其ほど臆れてゐた人かどうかは、此歌だけでは、判断は出来ぬ。恆見（淵藏）は、左内の手足となつて、密勅事件の裏に活躍した人である（永

井環其他)。さすれば、景岳の最後に最痛切な感じを受けた人の筈である。其判断に迷うたとしても、一分の理はあるのである。其にしても、此は彼の弟子だつたから、かうしたことも言ひやられたのであらう。或は、中根雪江から、多少さうした方面を託せられてゐたかも知れない。又さうした事を託する雪江でなくとも、中根氏の腹中に入つて、衷情の察せられない曙覽ではなかつた。だがとにかく、彼の此憤りは、やはり時流を抜いた所がある。單に歌よみとしての歌ではない。此二首はよくないが、氣魄は却て、後の方などには、強く出て居る。

此と時を同じくして詠んだと見られるものに、尙八首ある。皆彼の弟子に與へたのである。

大皇の醜の御楯といふ物は、如此る物ぞと 進め。眞前に——小木捨九郎主に

第三句聊か、平俗調に近づいた嫌ひはあるが、之を救ふに到るだけの力ある喜びが、一首に充ちてゐる。

さしたつる 錦の旗の下に立つ 身をよろこびて、大刀とりかざせ——岩佐十助主に

三句以下の宜しきは、彼の純真な感情の出でゐる宜しきである。殊に四句を受けて、五句のおほまかで、邪のない詠み口は、唯企てゝ出て來るものではない。

佐々木久波紫が大御軍人に召されて、越後路に下れる馬のはなむけに

負氣なく勅に 背く奴等を 罰め盡して歸れ。日を経ず

同じ時また、芳賀眞咲に